長野市の埋蔵文化財　第29集

浅川扇状地遺跡群

浅川端遺跡
あさかわばた

1988・3

長野市教育委員会
長野市埋蔵文化財センター

序

発掘調査とは後世に伝えていくべき国民共有の財産である埋蔵文化財の一部あるいは全部を、ある時期に特定の人が調査のために破壊する行為であるといわれます。現代そして未来における市民生活の充実という目標達成のために増大する開発、そしてそれによって恩恵を受けることは我々に与えられた一つの権利であります。しかし同時に我々はその一方で失われていく文化財に対し、その文化財を現代にまで保存してきた過去の人々に対し、その文化財を共有し得たはずの現在そして未来に生きる人々に対して責任を負わなければならないのも事実であります。

今回調査しました浅川端遺跡も、宅地開発という現代の必要性にせまられての調査でありましたが、ここに本報告書を刊行いたしました。わずかではありますが我々に課された責任の一端を果し得たものと考えます。今後この報告が長野市における古代史・地域史研究に大いに活用されますことを願ってやみません。

末筆ながらこの調査のために御指導・御協力願った関係者のみなさまをはじめ、直接・間接に調査に参加されたみなさまに感謝いたします。

昭和63年３月

長野市教育委員会　教育長　　奥　村　秀　雄

例　　言

1　本書は大成産業株式会社による仮称「檀田団地」造成事業予定地内における緊急発掘調査報告書である。本遺跡は長野市大字吉田２丁目289―２番地外の地籍に存在するが、今回の事業にともなって発見された新発見の遺跡であり、遺跡名は「浅川扇状地遺跡群　浅川端（あさかわばた）遺跡」として報告するものである。

2　調査及び報告書作成等の業務は長野市埋蔵文化財センターが行った。

3　本書作成における作業分担は下記のとおりである。

遺構図整理・浄書	千野
遺物整理	横山　倉田　原
遺物実測・拓本	中殿　矢口　千野
遺物浄書	矢口　千野
写真	青木　矢口

4　本書の編集、執筆等は千野、矢口が行った。なお第２章「遺跡周辺の環境」については、長野市立博物館専門主事　和田博氏に玉稿を賜った。

5　遺構図は１：60を基本としているが微細を要するものに関しては１：30とした。遺構図中のドットは床面もしくは床面直上の遺物出土位置を示し、それに伴う数字は遺物番号を示している。またスクリーン部分は炉もしくはカマドである。

　遺物実測図は１：４に基本的に統一した。須恵器は実測図断面を黒色で示し、黒色処理された土師器または赤彩された土器は処理された部分をスクリーンで示した。

6　調査日誌及び遺構実測図中遺構名を略記してある。住居址（ＳＢ）・土壙（ＳＫ）・溝址（ＳＤ）等である。

7　調査の諸記録及び出土遺物は長野市埋蔵文化財センターで保管するが将来的には長野市立博物館の管理となる。

8　遺物の注記記号は遺跡名の頭文字をとってＡＫＢとしてある。

目　　次

序
例言
第１章　調査に至る経過と方法 …… 1
第１節　調査に至る経過 …… 1
第２節　調査体制 …… 1
第３節　発掘調査の方法 …… 3
第４節　調査日誌 …… 3
第２章　遺跡周辺の環境 …… 5
第１節　自然環境 …… 5
第２節　歴史的環境 …… 7
第３章　調査 …… 10
第１節　遺構の分布 …… 10
第２節　土層序 …… 10
第３節　縄文時代の遺構と遺物 …… 13
18号住居址　３号土壙
第４節　弥生時代の遺構と遺物 …… 21
４号住居址　７号住居址　９号住居址　11号住居址
１号溝址　土器集中遺構
第５節　古墳時代の遺構と遺物 …… 45
２号住居址　３号住居址　６号住居址　８号住居址　10号住居址
12号住居址　13号住居址　14号住居址　15号住居址　16号住居址
17号住居址　２号住居址
第６節　奈良時代の遺構と遺物 …… 68
１号住居址　５号住居址　１～３号建物址
第７節　平安時代の遺構と遺物 …… 77
第８節　時期不明の遺構 …… 78
第４章　調査のまとめ …… 80

挿　図　目　次

図１　調査地周辺の地形①　……　2
図２　調査地周辺の地形②　……　6
図３　調査地周辺の主要遺跡　……　8
図４　調査区全測図　……　11
図５　III区北側西壁土層図　……　12
図６　18号住居址実測図　……　13
図７　18号住居址出土土器実測図　……　14
図８　18号住居址出土土器拓影　……　15
図９　３号土壙実測図　……　16
図10　３号土壙出土土器実測図①　……　17
図11　３号土壙出土土器実測図②　……　18
図12　検出面出土縄文式土器拓影　……　20
図13　検出面出土の縄文時代の遺物　……　20
図14　４号住居址実測図……　22
図15　４号住居址出土土器実測図　……　22
図16　４号住居址出土土器拓影①　……　25
図17　４号住居址出土土器拓影②　……　26
図18　４号住居址出土土器拓影③　……　27
図19　７号住居址実測図　……　28
図20　７号住居址出土遺物実測図・拓影　……　28
図21　９号住居址実測図　……　29
図22　９号住居址出土土器拓影　……　30
図23　11号住居址実測図　……　30
図24　11号住居址出土土器拓影　……　31
図25　１号溝址実測図　……　31
図26　１号溝址出土土器実測図　……　32
図27　１号溝址出土土器拓影　……　32
図28　土器集中遺構実測図　……　33
図29　土器集中遺構出土土器実測図　……　34
図30　土器集中遺構出土土器拓影①　……　37

図31　土器集中遺構出土土器拓影②　……　38
図32　検出面出土弥生式土器実測図　……　39
図33　検出面出土弥生式土器拓影①　……　41
図34　検出面出土弥生式土器拓影②　……　42
図35　検出面出土弥生式土器拓影③　……　43
図36　2号住居址実測図　……　45
図37　2号住居址出土土器実測図　……　46
図38　3号住居址実測図　……　48
図39　3号住居址出土土器実測図　……　49
図40　6号住居址出土土器実測図　……　50
図41　6号住居址実測図　……　51
図42　8号住居址実測図　……　52
図43　8号住居址出土土器実測図　……　52
図44　10号住居址実測図　……　54
図45　10号住居址出土土器実測図　……　54
図46　12号住居址実測図　……　56
図47　12号住居址出土土器実測図　……　56
図48　13号住居址出土土器実測図　……　57
図49　13号住居址実測図　……　58
図50　14号住居址・カマド実測図　……　59
図51　14号住居址出土土器実測図　……　60
図52　15号住居址実測図　……　62
図53　16号住居址実測図　……　63
図54　16号住居址出土土器実測図　……　64
図55　17号住居址実測図　……　64
図56　2号溝址・ピット群実測図　……　65
図57　石製品・玉類実測図　……　67
図58　検出面出土の古墳時代の遺物　……　67
図59　1号住居址実測図　……　68
図60　1号住居址出土土器実測図　……　69
図61　5号住居址実測図　……　70
図62　5号住居址カマド実測図　……　71
図63　5号住居址出土土器実測図　……　72

図64　1号建物址実測図 …… 74
図65　2号・3号建物址実測図 …… 75
図66　4号土壙出土土器実測図 …… 77
図67　検出面出土の奈良時代以降の遺物 …… 78
図68　ピット1・2、1号・2号土壙実測図 …… 79

表　目　次

表1　4号住居址出土土器観察表 …… 23
表2　1号溝址出土土器観察表 …… 33
表3　土器集中遺構出土土器観察表 …… 35
表4　検出面出土土器観察表（弥生時代） …… 39
表5　2号住居址出土土器観察表 …… 47
表6　3号住居址出土土器観察表 …… 50
表7　6号住居址出土土器観察表 …… 51
表8　8号住居址出土土器観察表 …… 53
表9　10号住居址出土土器観察表 …… 55
表10　12号住居址出土土器観察表 …… 57
表11　13号住居址出土土器観察表 …… 58
表12　14号住居址出土土器観察表 …… 62
表13　16号住居址出土土器観察表 …… 65
表14　検出面出土土器観察表（古墳時代） …… 67
表15　1号住居址出土土器観察表 …… 69
表16　5号住居址出土土器観察表 …… 73
表17　4号土壙出土土器観察表 …… 77
表18　検出面出土土器観察表（奈良時代以降） …… 78

図　版　目　次

図版1　第Ⅰ区全景
図版2　第Ⅱ区全景　第Ⅲ区全景
図版3　18号住居址　同遺物出土状況
図版4　3号土壙　同遺物出土状況　4号住居址
図版5　7号住居址　9号住居址
図版6　1号溝址　11号住居址

図版７　土器集中遺構
図版８　２号住居址　２号・３号住居址
図版９　３号住居址　同遺物出土状況
図版10　６号住居址　８号住居址
図版11　10号住居址　12号住居址
図版12　12号住居址カマド　同遺物出土状況
図版13　14号住居址　同貯蔵穴内遺物出土状況
図版14　14号住居址カマド　同遺物出土状況
図版15　16号・17号住居址　16号住居址　２号・３号建物址
図版16　１号・２号住居址　１号住居址
図版17　５号住居址　同カマド
図版18　５号住居址カマド　１号建物址
図版19　２号溝址・ピット群　調査風景
図版20　18号住居址・３号土壙出土土器
図版21　３号土壙・土器集中遺構・１号溝址出土土器
図版22　３号住居址・12号住居址出土土器
図版23　14号住居址出土土器
図版24　２号住居址・５号住居址出土土器

第１章　調査に至る経過と方法

第１節　調査に至る経過

昭和62年春、大成産業株式会社（長野市栗田857番地１）は長野市大字吉田二丁目289―２番地外地籍の農地に14区画の宅地及びアパート用地１区画・公園１ヶ所からなる仮称「檀田団地」造成事業を計画した。

開発地域は長野市内でも有数の規模を誇る「浅川扇状地遺跡群」の周知の範囲内に位置し、土器片等の散布も認められたために長野市埋蔵文化財センターは、同予定地内における埋蔵文化財の有無を確認するために試掘調査を実施することとした。

試掘調査は昭和62年５月13日に実施し、長さ約２ｍ・幅約１ｍの試掘抗を事業予定地内の任意の地点に４ヶ所設定した。その結果いずれの地点においてもかなりの量の遺物ならびに、遺構らしき黒色土の落ち込みが確認された。

この試掘調査の結果をもとに、長野市埋蔵文化財センターでは施工に先立って発掘調査による記録保存の必要性を認め、昭和62年６月４日より調査に着手する運びとなった。

造成予定地の大部分が遺跡範囲に含まれるものと思われるが、宅地部分に関しては盛土によって造成されるため、調査範囲は開発によって遺構面にまで掘削が及び破壊されることが予想される道路施設部分の約630㎡について調査を行った。

なお本遺跡は、前述のとおり周知の「浅川扇状地遺跡群」の範囲内に位置し、その名称については所在地の字名をとり「浅川扇状地遺跡群　浅川端遺跡」として報告する。

第２節　調査の体制

調査主体者	奥村　秀雄	（長野市教育委員会教育長）
総括責任者	小木曾　敏	（長野市埋蔵文化財センター所長）
庶務・経理	小山　　正	（　〃　所長補佐）
〃	倉田佳世子	（　〃　調査係職員）
調査担当者	矢口　忠良	（　〃　調査係長）
調査主任	青木　和明	（　〃　調査係主事）
〃	千野　　浩	（　〃　〃　）
調査員	中殿　章子	（　〃　調査係職員）
	横山かよ子	（　〃　〃　）
執筆者	和田　　博	（長野市立博物館専門主事）

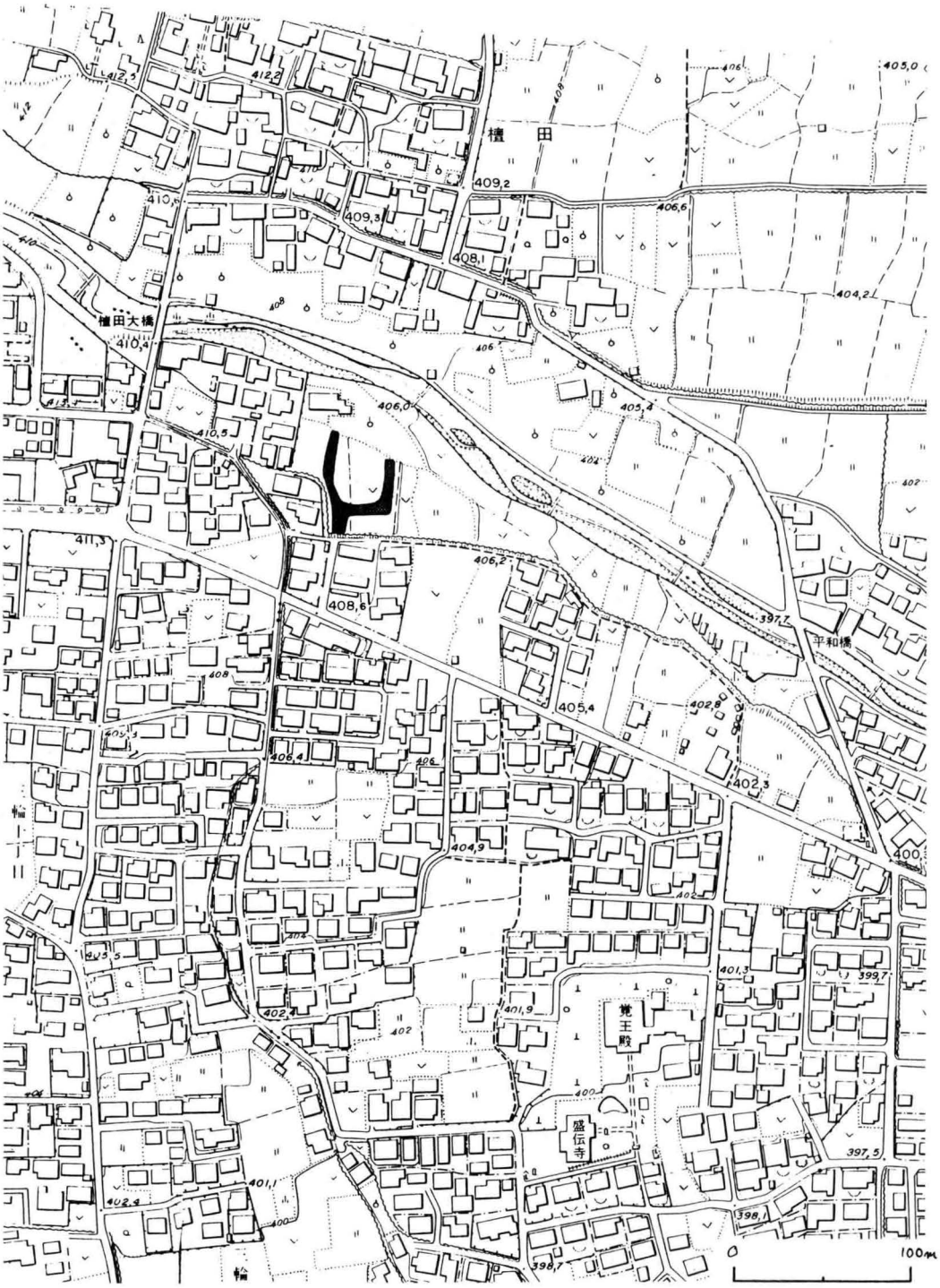


図1　調査地周辺の地形①

調査補助員　斎藤孝之　　（愛知学院大学学生）
　　柳沢和久　　（　　〃　　）
　　原　正樹　　（東京経済大学学生）
　　清水隆寿　　（立正大学学生）
調査作業員　青木恵子　荒木　保　荒木良子　臼井充子　太田経子
　　岡田志野　笠原博子　柄沢清志　柄沢孝子　川島邦子
　　神頭登美子　神頭幸雄　西原　延　八田明己　藤沢月子
　　松岡栄子　丸山悦子　丸山美江子　村越量平
整理作業員　徳成奈於子　岡沢治子

第３節　発掘調査の方法

試掘調査は開発予定地内の任意の地点に計４ヶ所、長さ約２ｍ・幅約１ｍの試掘坑を設定し、掘削にはバックホーを援用した。結果はいずれの試掘坑においても、現地表下約40～60㎝の範囲内にて遺物包含層・遺構面を検出した。よって事業予定地のうち遺構面にまで掘削がおよび、破壊されることが予想される道路施設部分の約630㎡について、発掘調査による記録保存の必要性を確認するに至った。

調査範囲の表土除去にあたっては、試掘調査の結果に基づきバックホーを援用した。遺物包含層及び遺構検出作業の際に出土した遺物については「検出面出土遺物」として採取し、遺構検出の後、覆土内出土の遺物は覆土上位・中位・床面直上等出土位置毎に一括して採取した。遺構内遺物のうち主要なものに関しては写真撮影の後、測量により位置・レベル等を記録した。写真撮影は各遺構ごとに遺物検出状況・掘り上がり状況・遺構内細部について実施した。

検出された遺構の測量は標高・南北軸ＢＭを基準に２ｍメッシュを組み、簡易的な遣り方測量によって実施し、基本的に１：20、また詳細を必要とするものに関しては１：10の縮尺で行った。

第４節　調査日誌

５月13日　試掘調査。事業予定地内における遺跡の存在を確認。塩崎角間殿屋敷遺跡の調査が終了するのを待ち、調査体制をととのえて本調査を行うことに決定する。

６月４日　バックホーを援用して表土除去作業を行う。午後、発掘機器材・テント等の搬入作業を行う。

６月８日　本日より調査作業員を加え本格的に調査を開始する。テント設営後、残土処理・遺構検出作業に入る。

６月９日～12日　遺構検出作業。弥生時代住居址・古墳時代住居址・奈良時代住居址などの遺構が検出された。

6月15日　Ⅰ区南端、Ⅲ区北端において遺構検出作業継続。午後Ⅲ区北端における遺構の存在の有無を確認するため、サブトレンチを入れる。遺物包含層と溝のような落ち込みを確認するが明確な遺構は認められない。

6月16日　ＳＢ１・ＳＢ２・ＳＢ５・ＳＢ６調査開始。ＳＢ１は本日終了。

6月17日　ＳＢ２・ＳＢ５・ＳＢ６調査継続。ＳＢ１写真撮影。Ⅲ区サブトレンチセクション実測。

6月18日　ＳＢ２・ＳＢ５・ＳＢ６調査継続。ＳＢ７・ＳＢ９・ＳＢ10 調査開始。

6月19日　ＳＢ２・ＳＢ５・ＳＢ６・ＳＢ７写真撮影。ＳＢ５カマド部分、並びに土器出土状況微細実測。

6月22日　ＳＢ３・ＳＢ４・ＳＢ８・ＳＢ11・ＳＤ１・土器集中遺構調査開始。

6月23日　ＳＢ３・ＳＢ４調査継続。ＳＢ８・ＳＢ10・ＳＤ１写真撮影。

6月24日　ＳＢ３・ＳＢ４・土器集中遺構調査終了写真撮影。ＳＢ３・土器集中遺構微細実測ならびに遺物取り上げ。ＳＢ12・ＳＢ14・ＳＢ16・ＳＢ17・１号建物址調査開始。第Ⅰ区測量。

6月25日　ＳＢ14・ＳＢ16・ＳＢ17調査継続。ＳＢ12・１号建物址調査終了、写真撮影。

6月26日　ＳＢ14・ＳＢ16・ＳＢ18調査継続。

6月29日　第Ⅱ区において、下層における縄文期の遺構の存否を確認するために、サブトレンチを入れる。ＳＢ18・ＳＫ３検出。２号・３号建物址調査開始。

6月30日　ＳＢ14・ＳＢ16・ＳＢ17調査終了、写真撮影。ＳＢ14カマド実測。

7月１日　ＳＢ18・ＳＫ３・２号・３号建物址調査継続。ＳＤ２調査開始。ＳＢ12実測。

7月２日　ＳＢ18・ＳＫ３・ＳＢ16・ＳＢ17・ＳＤ２・２号・３号建物址調査終了、写真撮影。本日にて実測作業を除きすべての遺構の調査終了。ＳＢ18・ＳＫ３実測。

7月６日　写真撮影・実測作業終了。機器材・テント等を撤収し、本日にて現場におけるすべての作業を終了する。

第２章　遺跡周辺の環境

第１節　自然環境

大峯山（△828.2m）から△923.0mの三登山へと、西南から東北へ続く流紋岩質凝灰岩（裾花凝灰岩）の山地に断層沿いの深い横谷を刻む浅川は、海抜350m程の長野盆地（善光寺平）に流下して、駒沢川と共に複合扇状地を形成する。

谷口附近では地附山東側を限る箱清水断層と、霊園高地や三登山の南斜面を走る田子断層・西条断層とが交差して錯雑な地形を露呈するうえ、霊園南山麓に分布して油徴を有する浅川泥岩層（新第三紀中新世小川層下部）はすべり易く、谷口地形をさらに複雑にしている。

浅河原口から盆地に出た浅川は、ほぼ90°の広がりを持つ盆地を構成しつつ対角線状に西北から東南へ流下して約３㎞、ＪＲ信越本線と交差する通称メガネ橋附近を南限として放物線状に流路を東北へ変える。

この間、扇頂に近い浅川橋附近から山田橋に至る右岸に、最大幅300m・延長約1.8㎞にわたる自然堤防が観察され、壇田大橋以下が顕著でその上を檀田通りがほぼ縦貫している。

本遺跡はその微高地の中央部に近く、この附近では約２～３mの段差が自然堤防と旧河川敷平坦面との間にあって、河岸段丘状を呈する。流路の両岸に観察される旧河川敷平坦面は本遺跡付近約800m間のみの存在であり、しかも左岸檀田地籍のそれがやや上流に形成されているところからすれば、檀田大橋直前で僅かに左折して手力橋へ直流する現流路が、かつては檀田部落の西側付近で右折せずに平和橋近くまで直流していたために、河岸段丘状の微地形となったと考えられる。

現在幾筋もの田用水として左右に分水しているので、護岸・えん堤の完備した約２m程度低い川底には僅かな水量を見せているに過ぎないが、以前は相当の荒川であった。そのことは浅川下流の左岸にある南郷が、浅川上流の北郷に対する南郷でその故地は湯谷沖附近とか、本遺跡の南東南400m弱にある盛伝寺は中世の宇木（岐）城跡で、同城は浅川の水害を受けてさらに南1.2㎞の相ノ木城（現長野女子高校敷地。同校建設以前は遺構が残存）に移転した等の伝承からもうかがわれる。また昭和29年に湯谷沖で道路開設のために撤去された古墳の石室は、大部分が地下に埋没し石室内は土砂で充満していた。

その一方浸食もはげしく、治水工事以前は檀田大橋附近で右岸に10m近い浸食崖が観察され、橋上からのぞく川底は非常に深かった。それだけに浅川は急流で扇頂から本遺跡附近までの平均斜度は1/25、以下手力橋付近までは1/50勾配を示し、この落差と水量を利用した水車による精米所が８軒も営業していた。

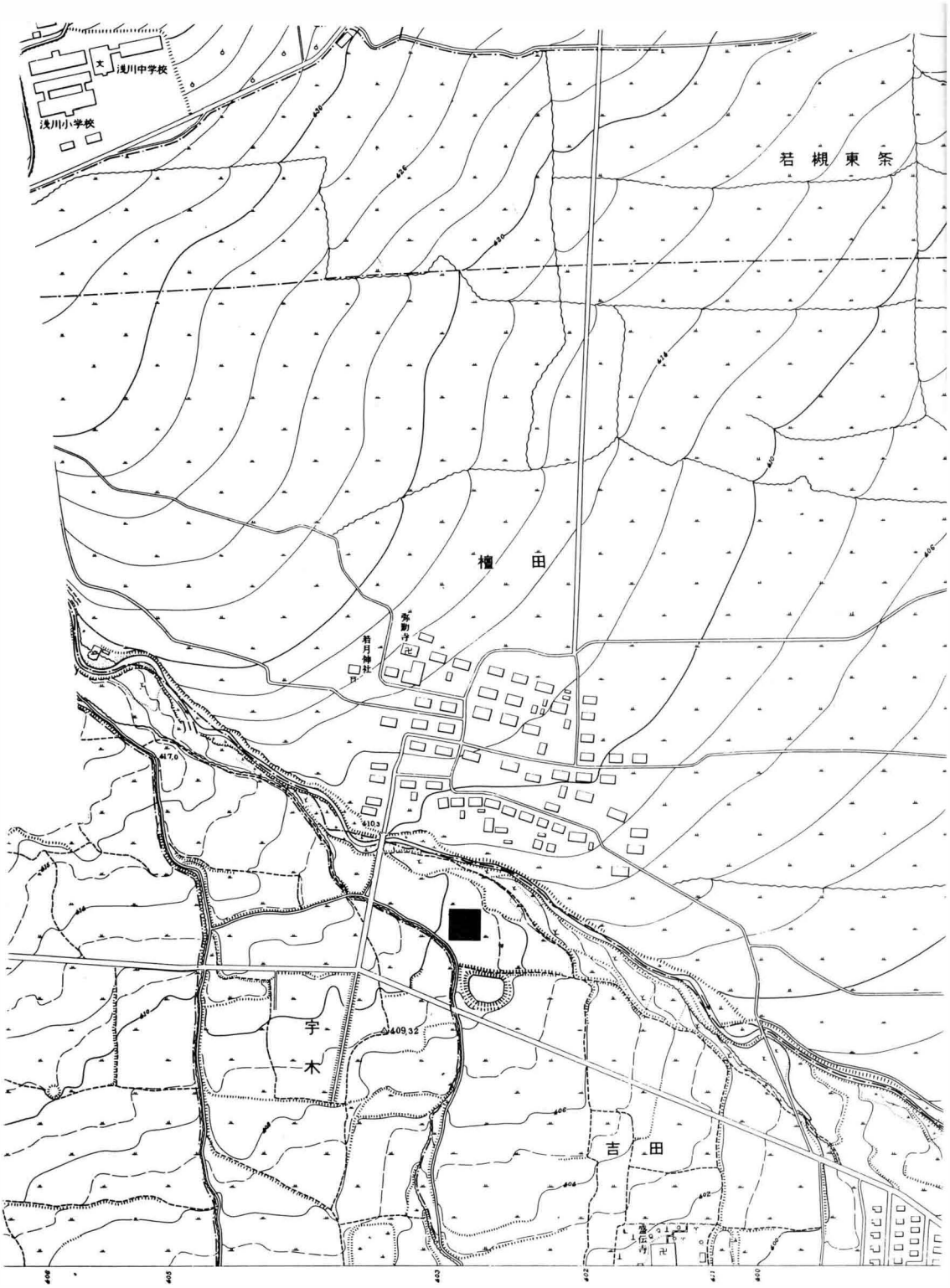


図２　調査地周辺の地形②（大正１年頃）

大正１年　　測図･昭和27年応急修正の地理調査所発行 1/50000地形図によると、盛伝寺は耕地中の野寺で、自然堤防端末に吉田農業高校（現吉田高校）があるのみ。集落は川北の檀田のほかは宇木も押鐘もはるかに離れ、一帯は水田地域であった。現在では一段低い川岸平坦面は果樹園になり、本遺跡附近に水田を主とした耕地が僅かにあるだけで、大部分は檀田通りを主軸とした住宅街化し、平和橋から山田橋付近では浅川左岸まで住宅街が進出し、さらに拡大する様相を示している。

第２節　歴史的環境

浅川流域では、源流に近い猫又池・大池の旧石器時代遺跡をはじめ、ことに浅川扇状地に遺跡が濃密に分布し、浅川扇状地遺跡群として包括されている。

これらのうち縄文時代遺跡は湯谷及び赤萱平・刈田・牟礼バイパスＡ地点・徳間榎木田その他扇状地両翼特に駒沢川流域に集中し、湯谷は本遺跡や辰巳池遺跡と共に浅川との関連が考えられる。弥生時代の遺跡では本遺跡がある微高地東端の吉田高校敷地で箱清水式に先行する吉田式期の遺構･遺物が検出されているほか、条里的遺構の残存ともいわれる湿田地帯を隔てて北方約600ｍ付近の神楽橋遺跡が、徳間小学校（柳田）･国鉄貨物基地遺跡などと共に栗林式･箱清水式期を主とする弥生時代から平安時代にかけての著名な複合遺跡とされている。

扇端附近では、湧水地帯をはさんで時には箱清水式も伴出する古墳時代以降の遺跡が、三輪小学校をはじめ数多く分布する。この地域を延喜官道などの古道がぬっていたとされ、沿道に美和神社・皇足穂命神社（旧地は大銀杏地籍）など式内社やその比定対象とされる古くからの社が鎮座する。

扇状地との比高差が300ｍ以上もある地附山頂上には前方後円墳があり､その東斜面には上池ノ平・池ノ平・山脚扇状地面に湯谷沖の各古墳群が所在したが、基盤整備や地附山崩落によって上池ノ平古墳群の一部以外すべて姿を消した。霊園高地や三登山の南山脚一帯にも往時は数多く古墳が築かれていた形跡はあるが、残存するのはこうもり塚など約10基ほどで、吉古墳群など多くの古墳はその地続きとなる三登山東山麓一帯に所在する。

湯谷沖一円が水田地域であった当時は檀田沖同様に条里的遺構が観察され、律令時代にはこの扇状地上の各集落は水内郡８ヶ郷、特に芋井・大田・尾張部などの各郷に分割包含されていたと推定される。

平安時代末期にはこの地域に信濃28牧のうちの吉田牧が設けられており、駒弓・桐原牧両神社や駒沢などはその名残とされ、広大な浅川流域は好適な放牧地であったと考えられる。

この時代、若槻地域を中心に扇状地北部付近を領域として證菩提院領の若月（槻）荘が成立し、後になって新熊野社を本所として大覚寺統（南朝）に伝領された。

鎌倉時代以降、この荘園を本拠として若槻氏が栄え、室町初期には高梨氏傘下であったため、

①浅川端遺跡(調査区) ②吉田高校グランド遺跡 ③箱清水遺跡 4下宇木B遺跡 ⑤三輪小学校遺跡
⑥三輪遺跡 ⑦中越遺跡 ⑧徳間柳田遺跡 ⑨古屋敷遺跡 ⑩駒沢新町遺跡 ⑪牟礼バイパスA地点遺跡
⑫牟礼バイパスD地点遺跡 ⑬浅川西条遺跡 ⑭神楽橋遺跡 Ⓐ湯谷古墳群 B地附山前方後円墳 Ⓒ上池の平古墳群
D県主古墳 E籠塚古墳 F蚊里田古墳群 G上野古墳群 Ⓗ吉古墳群 I田中窯址
(○印は、発掘調査が行われている遺跡)

図3 調査地周辺の主要遺跡

応永８年（1401）桐原要害と共に若槻城が守護代細川慈忠に攻撃された。里城の周囲にあった檀田や伺去が兵火を受けて現在地に移動したことはその際の伝承と推定される。

当時、小武士たちの領有地は列強蚕食の地とみえ、大塔合戦（1400年）では宇木・中越氏は中（長）島氏らと共に東北信武士勢に反して守護軍に名を連ね、前記桐原は文明３年（1471）には島津領となっている。

嘉暦４年（1329）の諏訪上社造営目録に「玉垣３間　宇木・小居・平林」とあり、諏訪御符礼之古書に「宇木・小井・桐原・小鹿野（押鐘）・長島（現在地不明）の５ヶ村は交代で頭役を勤仕した」（文明19年―1487など･現代文訳）とされ、宇木（岐）は古井ともいうとの頭注が附されているところからすれば、中越を含む５ヶ村が小井郷であった日々の存在もうかがえる。

近世初期の村切り以来本遺跡や盛伝寺址は石高235石637合の押鐘村に含まれ、405石986合の宇木村とは最近まで盛伝寺西方の果樹園内に痕跡を留めていた浅川乱流跡を境界として両村とも松代領であったが、既述のように宇木や押鐘の集落ははるか離れ、付近一帯は一面の水田地域であった。この景観は今から約30年ほど前まで続いていた。

参考文献『長野附近の地質』『上水内郡地質誌』『長野県町村誌』『信濃史料』『長野県史』『長野県の地名』『長野市の埋蔵文化財調査報告書第22集』ほか

第3章　調　査

第1節　遺構の分布（図4）

調査地内を便宜上、次のIII区に別けることにする。西側の南北に延びる調査地、10号住居址から1号住居址間をI区、東西の1号溝址から2号溝址に至る間をII区、そして東側の南北方向の14号住居址から北の調査地をIII区とする。

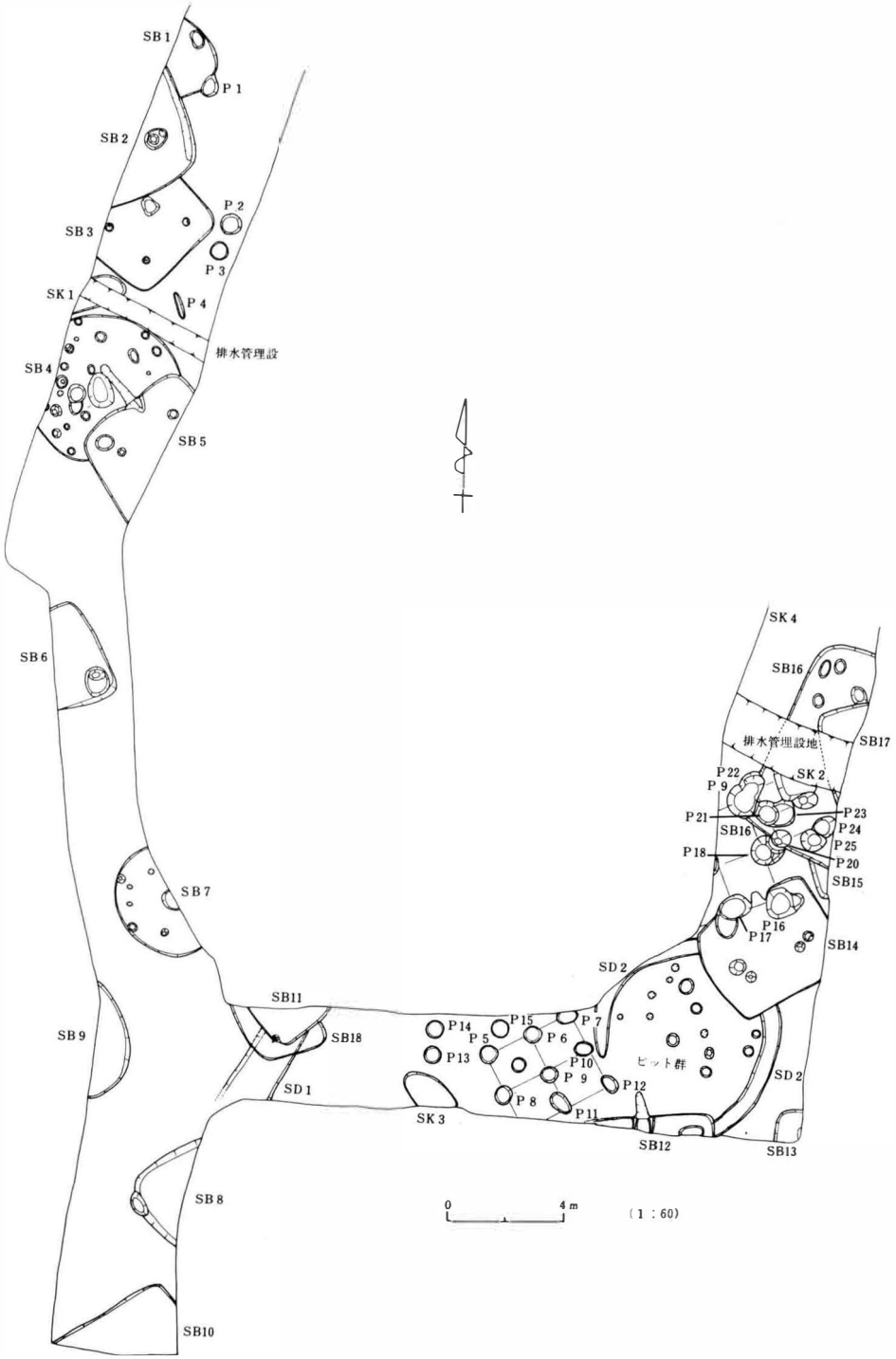
今回の調査は道路敷の部分のみの調査で、各時代毎の分布状況は把握し得なかったが、遺構番号を付したものは住居址18軒・ピット20個（建物址3軒？）・ピット群1ヶ所・溝址2ヶ所を数える。そのあり方は浅川に近い所で古墳時代を中心とする遺構が重複関係にあることがうかがえる。ただI区の1号住居址及びIII区の16号住居址（4号土壙）以北では遺構が確認できず、遺物の出土量も激減する。本遺跡はこのように浅川の右岸微高地上に展開する弥生時代から平安時代に亘る複合集落址で、予想以上の集落規模をもった遺跡であることを垣間みせている。

第2節　土層序（図5）

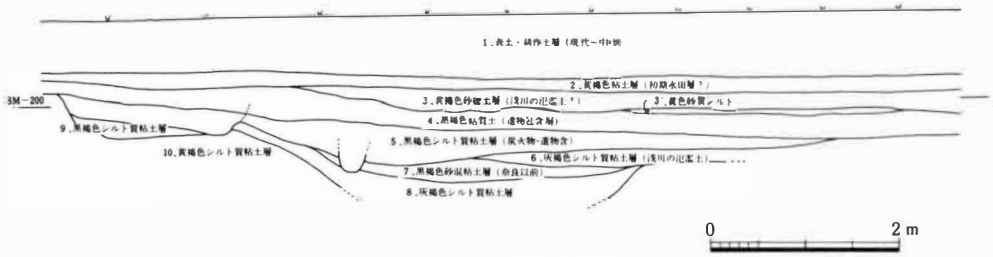
III区の北側に位置する4号土壙以北の土層断面から調査地中の土層序を示す。現地表面から60cm程を第1層表土・耕作土層とした。この層は南及び西にいく程浅くなる傾向にある。黄褐色砂混り粘土で、数枚の堆積が確認されるが明確には区別できない程の微妙な差しかない。恐らく現代から中世にかけての水田耕作地であろう。第2層は黄褐色を呈する粘土層で、この地域及び浅川よりだけに存在し上部が青灰色になる。この地では初期の水田層の可能性が高く、4号土壙のあり方から平安時代のものと推定される。第3層は黄褐色砂混り粘土層になり3層ともに浅川の氾濫土の堆積によるものであろう。第4層は遺物包含層で、砂礫を含む黒褐色粘質土層になる。そして第1・4と基盤層の第10層が調査域内の基本層序になる。

これ以外の層は、断面図を観察した部分の土層であるが、前節の遺構分布のあり方を規定しているように思われるので詳細に記すことにする。第5層は黒褐色シルト質粘土層で、炭化物及び若干の遺物を含む。第6層は第3層と同様に浅川の氾濫土と思われるが灰褐色砂混り粘土層で、奈良時代及びそれ以前の遺物を包含している。第8層は灰褐色シルト質粘土層になり、部分的に黒色及び黄褐色粘土ブロックが混入する。遺物の混入は極く少量にすぎない。

これらの層の堆積時期を推定すると、第4・5層は平安時代、第6層は奈良時代の自然堆積、第7～9層は奈良時代及びそれ以前ということになる。この推定が正しければ、この大溝様の落ち込みは、少なくとも奈良時代迄痕跡をとどめており、ただ底面まで調査を実施してないため断定できないが、それ以前には浅川の旧蛇行水路の可能性がある。そして第3・6層の氾濫堆積土


SB1
P1
SB2
P2
SB3
P3
SK1
P4
排水管理設
SB4
SB5
SB6
SB7
SB9
SB8
SB10
SB11
SB18
SD1
SK3
P14
P5
P15
P6
P7
P13
P10
P9
P8
P11
P12
ピット群
SD2
SB12
SB13
SK4
SB16
排水管埋設地
SB17
P22
SK2
P9
P21
P23
SB16
P24
P25
P18
P20
SB15
P16
P17
SB14
SD2
0
4m
(1:60)

第4図　調査区全測図



第５図　III区北側西壁土層図

の存在を考え合わせれば、平安時代に至るまで浅川の影響を受けていた地でもある。このため前節の微高地北縁に遺構等が残されなかったことが理解されよう。

第３節　縄文時代の遺構と遺物

II区の11号住居址、１号溝址検出中に縄文時代前期の土器片が発見され、11号住居址の床面を掘り込んだ所、該期土器片と住居址の存在を確認した。そのためII区の西側に試掘坑を設定した。試掘坑は11号住居址を覆うように南北2.6m・東西約25mのものとそれに東へ接続して巾2.0m・長さ3.5mの規模のものである。この結果、住居址１軒と土壙１基を確認･検出した。この時代の遺物は他から出土しておらず、この調査地付近でまとまるものと思われる。

第18号住居址

遺構　（図６）

Ｉ区とII区の接合部に位置し、上部に11号住居址があり、東壁を破壊している。また北壁は調査区域外にある。表土から検出面まで80cmを測る。

形態は、西壁と南壁が鈍角になり、南壁と東壁が鋭角になるなどかなり不整な隅丸方形になるものと調査範囲内から予想される。規模は東西間約2.5mで、南北もこれに近いものと思われる。覆土は黒色粘質土で、その掘り込みは浅く南壁10cm・東壁７cm・西壁15cmを測る。

床面は平坦であるが、西壁よりの11号住居址床面から４cmで東壁予想線上では同一床面状になるように東から西へ傾斜している。このため１個体分の土器がかろうじて残存したが、東壁の掘り込みは確認できなかった。

残存した土器は口縁部を東方向に向け平偏化した状態で南西隅付近から出土した。

遺物　（図７・８）

口径27.5cm・器高の最大26.7cm・最少25.0cm･底径7.6cmを測る。器高の数値に差があるが体部の形態にゆがみは認められない。

口縁部は平縁で、端部が面取りされ平坦になる。体部は幾分丸味をもって立ち上がるが、成形の時間差を現わしているものであろうかその立ち上がりの角度は３段階に大別できる。上部にいくに従い傾斜角度を増す。中位の２段階下半の表面剥離が

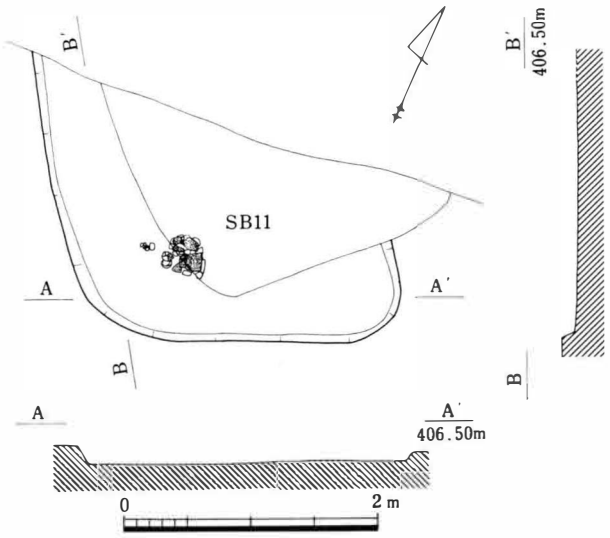


図６　18号住居址実測図

図7　18号住居址出土土器実測図

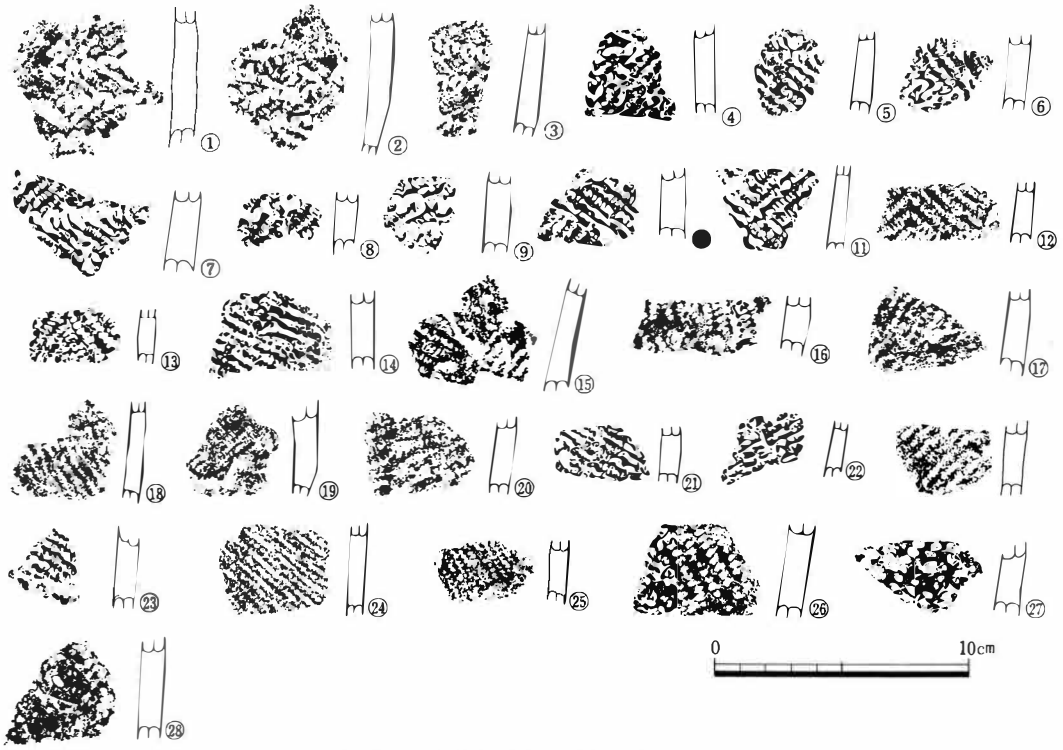


図８　18号住居址出土土器拓影

ほぼ全周に認められ、成形時の屈曲を修正するために粘土の貼り付で調整したものと思われる。底部は上げ底になる。

体部外面の整形は全面に縄文が施文されているため定かでないが、表面剝離面からはヨコナデがうかがえる。底部外面はヘラナデによりていねいに仕上げられている。口唇部及び内面は滑面のある工具（ヘラ）と指頭により成形痕を感じさせない程ていねいにナデが施される。

色調は外面下半が黄褐色、上半が茶褐色を呈し、内面上半が茶褐色、下半は黒褐色になる。器壁は第１と２の成形接合部で厚く1.2cm、第２と３の所では薄く0.9cmを測る。胎土に若干のセンイと大き目の砂石を含み混和材としている。

外面の文様は、これらの整形後、少なくとも口唇部の整形を済ませた後に施文される。上部にループ文の結束部を有する長さ5.2cm前後のしまりの良い単節ＬＲとＲＬに撚られた２本の縄文原体を用い、口縁端部から底部外縁に至るまであますところなく単節斜縄文が施文されている。全体的にみると口縁部から底部方向へ７帯施文され、上部の方がていねいに施されその痕跡を明瞭に残すが、下方にいくに従い雑になり、その痕跡も浅い。また施文方向は左廻り（逆時計廻り）で行なわれ、施文原体の交互の使い別けにより羽状縄文を呈し、それに加え原体の施文位置をずらすことにより１帯に２個宛重菱形縄文と相反する綾杉文状の文様をも作り出している。編年的位置は前期初頭の関山式期をあてることができる。

図７は18号住居址の覆土から出土したもので、すべて縄文が施文され、胎土にセンイを含む。焼成はあまり良くなく、黄褐色から黒褐色の色調を呈する。縄文原体は単節のＲＬ・ＬＲを基本とするが、７はＬＲと多条のＲＬの組み合せになる。１～９はループ文を伴う羽状縄文を構成し、10～13も２種類の原体を使い別けて施文される。ループ文における縄文原体の長さは、３の1.5cmから７の2.5cmのものが多い。ただ５は３cm程になる。

３号土壙

遺構　（図９）

II区の中央付近に位置し、南側の一部は調査地外へ延びる。この遺構も試掘坑の調査によって発見されたもので、近隣のピット群検出面から５cm程深いだけである。

形態は不整楕円形状を呈し、その規模は主軸（南北）２ｍ前後が予想され、東西軸は中央で1.15ｍを測る。主軸方向はＮ―51°―Ｗになる。掘り込みは検出面から北壁で21cm・東壁で18cm・西壁25cmを測る。この数値にみられるように底面は東から西へ、また北から南へは９cm程の勾配をもって傾斜する。

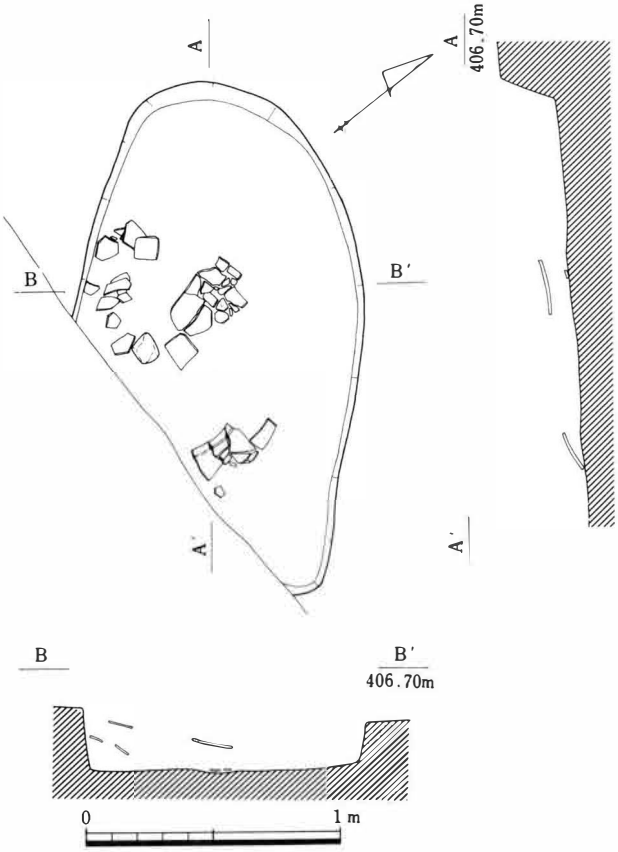


図９　３号土壙実測図

底面及び覆土から４個体分の土器片が破損した形態で集中して出土している。覆土は18号住居址と同様黒色粘質土である。

遺物　（図10・11）

５個体の深鉢が破片として出土している。10図１・２は口縁部にたが状の突帯をめぐらす深鉢である。１は口径を36cmと推定したが、４分１以下の破片からのもので若干の数値の変更はあろう。残存器高30cm、最大径は突帯部にあり39cm、体部上位のくびれ部径33cm、体部中位の最大径33.4cmをそれぞれ測る。この数値に見られるように、突帯下方で口縁部は逆くの字状に内傾し、成形時の粘土帯の巾に規制されたものであろう。ナデツケ整形により上下に凹みがみられる。口縁端部は低い波状を

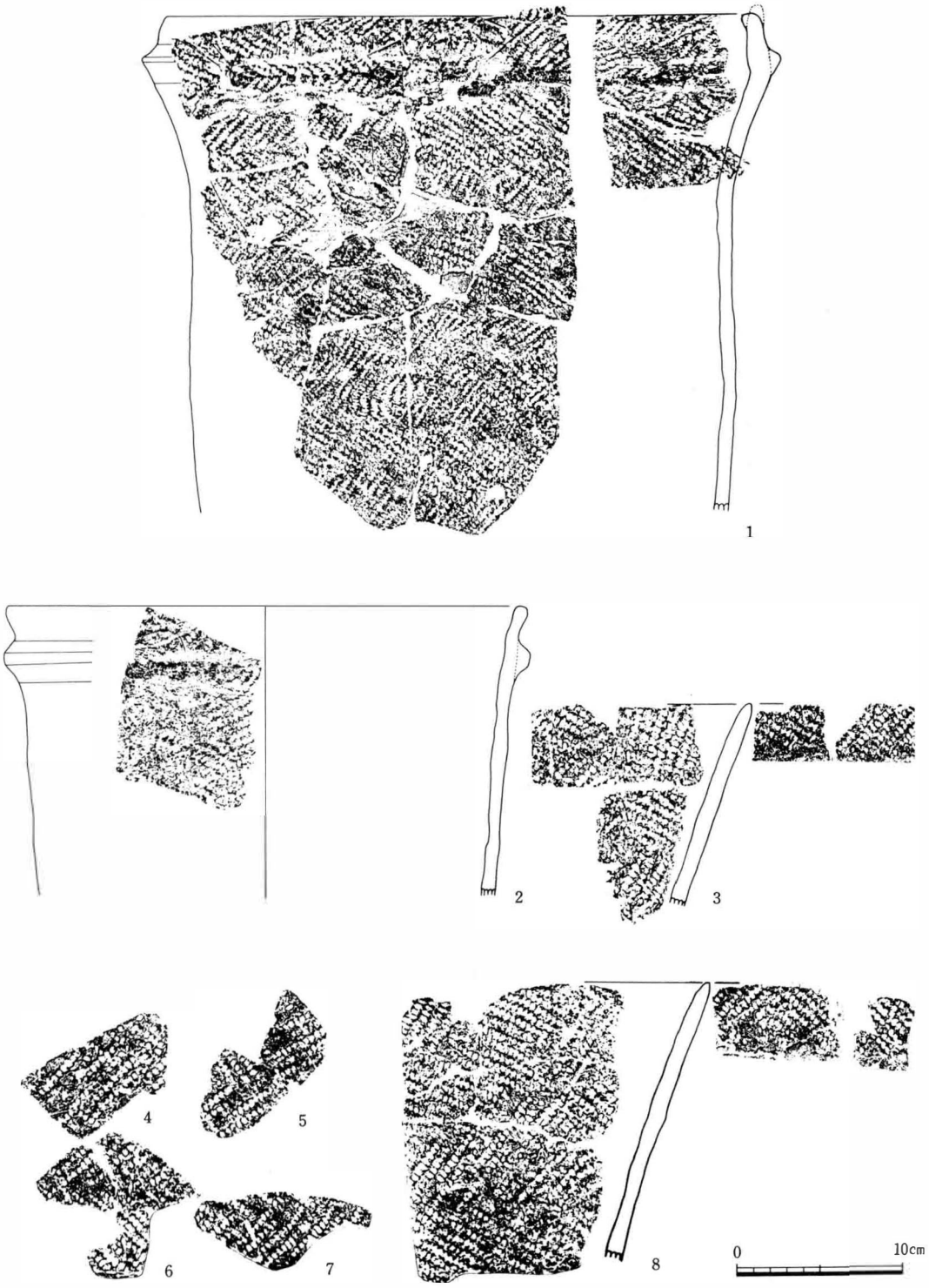


図10　3号土壙出土土器実測図①

図11　3号土壙出土土器実測図②

呈し、小突起部は4ヶ所と思われ、この部位は直立する。突帯は断面三角形状になる。また体部の形態は上半が外開し、緩やかなくびれ部を形成し、体部中位でわずかに張りをみせるものの直線的で、中位から下方にいくに従い体部径を縮小する傾向にあり、最終的には10のような底部に至るものと予想される。内面の整形は口縁部がヨコナデ、体部にはハケナデのちナデが施されている。器壁は体部上半で1.1cm・体部中位で0.7cmを測る。胎土に少量のセンイを含み、石英粒の混入が目立つ。外面の色調は黄褐色から暗茶褐色を呈し、内面は暗茶褐色で、器壁断面は黒色に近い色になる。焼成は良くない。

外面は全面に単節斜縄文が施文されるが、器面が荒れておりまた雑な回転であるため、拓本で読みとる意外その観察は中々困難である。施文原体は、長さ5cm以上の単節ＲＬとＬＲに撚られた2種類の施文原体が使用されている。施文は左廻り（逆時計廻り）で、交互に2種の縄文原体を使い別け、上段から下段に回転押捺され、雑な羽状縄文様になる。この文様は上段ほどていねいで、下段に行くに従い不明瞭になる。

2は、1と器形が幾分異なる。口縁部は体部から直線的に接続し、屈曲部を形成しない。口縁部に至って更に小さく外開する。口縁端部は丸く仕上げ、低い波状を呈するものと思われる。口径は32cm、丸味を帯びた台形に近い突帯部径32.4cm、体部の残存最少器径28cm、残存器高17.5cmをそれぞれ測る。焼成不良のためか外面の磨耗が1よりも著しく、1と同様の施文原体と方法により施文されていることがうかがわれる。内面整形はナデによっており、胎土の混和材は1と同

様である。器壁の厚さは0.7～1.0cmの範囲内にある。色調は外面が赤褐色で、内面は暗黄褐色を基調とし、器壁断面は黒味を帯びる。１・２の土器は、在地性の強いものと考えられ、近隣地域では小県郡長門町六反田遺跡にみられる。

３～８は同一個体である。口縁端部が器肉を減じて鋭利になって焼成破損が多いのと、波状口縁を呈すると思われるため口径の数値を推定することができなかった。残存部の器高は15.4cmである。器形は底部より単純に外湾気味に立ち上がる深鉢になる。器壁は１cm内外で一定している。外面は１・２と同様の施文原体・方法により全面に縄文が施されるが、原体の長さは４cm程である。この土器の特色は口縁部内面に外面と同様の一帯の縄文がめぐることにある。内面の整形及び胎土等は２と同様である。焼成は比較的良く、内外面とも残存部の上半は黒褐色で、下半は茶褐色を呈する。器壁断面はやはり黒色を帯びる。４～７は３・４の体部残欠である。

９・10は深鉢底部周辺の破片で同一個体である。形態は尖底に近い砲弾形になる。底部の厚さも体部と差がなく1.2cmを測る。ただ外面に幅１cm程のヘラケズリが認められ器肉を減じている。底部外面中央に径７mmの棒状工具による刺突がある。残存器高は18.9cm、残存最大径は27.6cmを測る。内面の整形及び胎土の混和材は２と同様で、施文方法等は１とほとんど同じである。色調は外面が赤褐色を呈し、内面が黒褐色を基調とする。器壁断面は内側だけ黒味を帯びる。焼成は良い。10は９の体部片である。

11は深鉢の底部の破片で平底になる。底径は12.5cmである。この破片でみる限り、ＲＬの単節斜縄文を底部外縁まで施文し、その原体の撚りが細かい。胎土にセンイを混入するが、石英粒は極少である。色調は内外面とも赤褐色に近く、焼成は良い。器壁断面は黒味を帯びる。この土器は前述した土器群と異質な感じがする。

これらの土器はみなれない一群で、地方色の強いものと思われ、縄文だけの施文やその方法と尖底に近い底部を考え合せ、一応関山式より前出の編年的位置を与えたい。ただ11の土器を積極的評価すれば関山式期に近い時期が与えられよう。

検出面出土の縄文時代土器　（図12）

II区の調査において検出されたものがほとんどで、また全てに縄文が施される深鉢である。１～４は口辺部の破片で、１は面取りされ平坦であるが他は丸くおさめる。２は口縁部下に一条の凹みがめぐり、外反する点特異な器形になる。４は口縁部の表裏に縄文が施こされ、３号土壙のものと同一個体であろう。施文は、単節ＬＲ・ＲＬの縄文原体を基調とするが、10の原体は多条になる。３・５～10にはループ文が施文され、３を除き２本の原体を使い分け羽状縄文をつくる。１～３・５～９は、整形及び施文がていねいに施されるのに対し、他のものは雑に仕上げている。前者は関山式土器の特長をもっており、後者もセンイを胎土に含み他時期のものが皆無であることからこの時期の所産と考えられよう。ただし21は、前期後葉に編年される諸磯Ｃ式土器で、浮

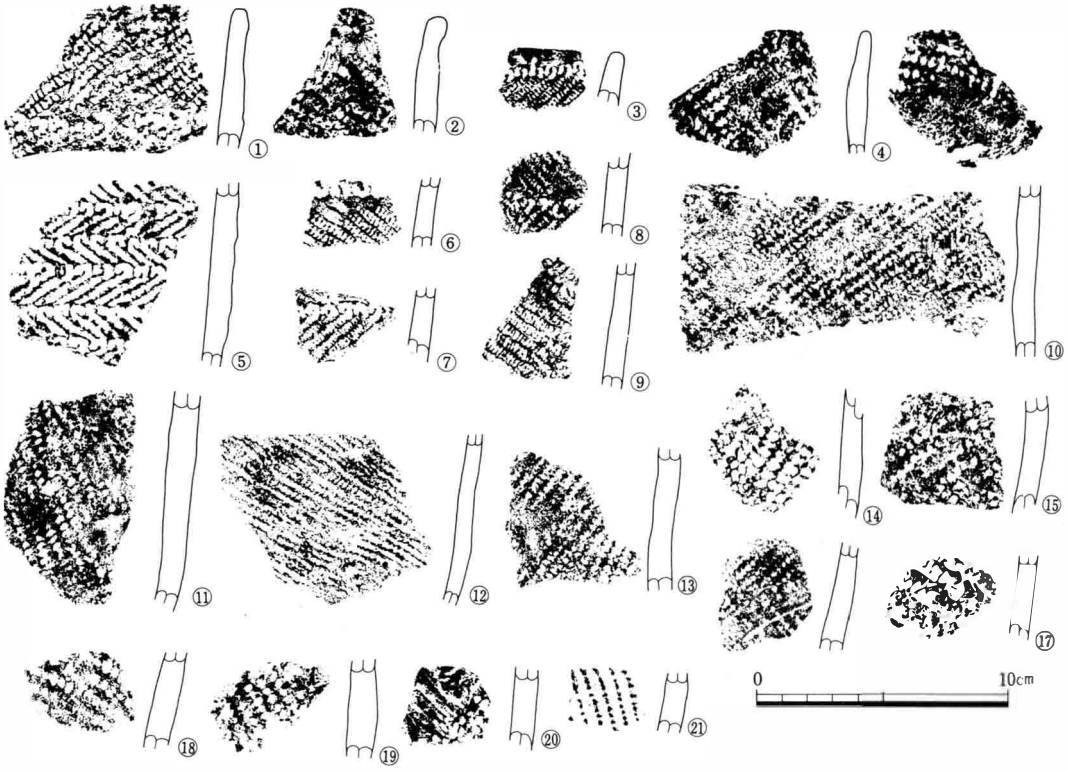
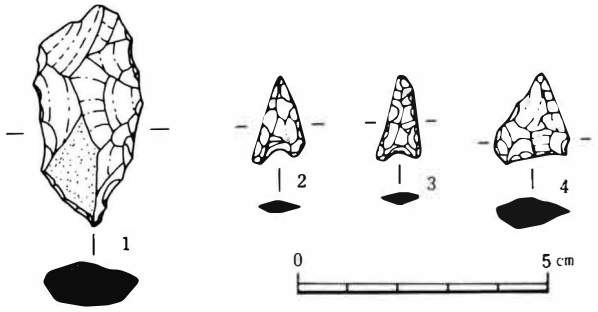


図12　検出面出土縄文式土器の拓影

線文で飾られる。

第13図には検出面出土の石器を示した。(1)は石錐かと思われる。材質は頁岩製で風化が著しく剝離面は摩耗している。(2)～(4)は石鏃で材質はいずれも黒曜石製である。(2)(3)のような凹基のものと(4)のような平基のものとがある。



第13図　検出面出土の縄文時代の遺物

第４節　弥生時代の遺構と遺物

住居址４軒・溝址１ヶ所・土器集中遺構１ヶ所を検出したにすぎず、またほぼ全容を推定することができる遺構は４号住居址１軒だけで、他は半分以下の調査である。このうち弥生時代中期（栗林式期）に比定されるものは、４号・７号・９号住居址、１号溝址、土器集中遺構等で、11号住居址だけは後期の箱清水式期の所産である。これらの遺構の分布状態を今回の調査結果から瞥見すると、調査地の西と南に展開するようなあり方を示す。また同時期遺構の重複も認められない所からそれ程密集した集落を形成してはいなかったであろう。

４号住居址

遺構　（図14）

Ｉ区の北側遺構群内にあり、西側の一部は調査対象区域外にあるが、ほぼ全容を露呈できた住居址である。しかし残念ながら東側は５号住居址によって掘り込まれ、その内容は定かでない。形態は不整円形を呈し、南北間5.0m、Ｐ１・Ｐ４のさし渡し間5.2mを測る規模になる。検出面からの掘り込みは浅く、北壁８cm・南壁17cmである。床面もこの数値のとおり中央が高くなるものの総体として南へ勾配を有する。Ｐ１・Ｐ４の中央部で床面を見ると中央の炉付近で盛り上がり北壁の検出面の高さにまでなる。尚、この床面は貼り床が施され、堅くしまっていた。炉は住居址の中央にあり、南北に長く1.2m、東西0.9m程の地床炉である。炉底面まで25cm程掘り込まれ、底面に焼土、その上部は上面まで多量の炭化物が残存していた。また実測図中鎖線の範囲にも焼土が認められた。この他床面には10～50cm大の意味不明な柱穴が散在する。この中から主柱穴を抽出するとＰ１（径42cm・深さ50cm）・Ｐ２（径32cm・深さ48cm）・Ｐ３（径36cm・深さ10cm）・Ｐ４（長軸56cm・深さ35cm）を上げることができよう。８本柱円形配列が予想される。壁際の柱穴は不規則であるが支柱穴であろう。

遺物　（図15～18）

壺形土器・甕形土器が出土しているが実測し得たのは図15に示した８個体にすぎず、またいずれも磨耗が著しいため詳細は不明な点が多い。

(1)は細頸壺口縁部で、口縁部は頸部から緩やかな弧を描いて比較的大きく外反し、端部は丸みをもって終る。口唇部への加飾の有無は磨耗のため不明である。頸部には太篦描沈線が２本認められるが、沈線間は上段は無文帯として残し、下段はＬＲの縄文を充塡している。(2)も細頸壺であるが(1)と異なり頸部は筒状にやや長く立ち上がり、口縁部は短く外反して終る。外面口頸部は強いヨコナデが行われた後、縦もしくは斜方向のヘラミガキがなされる。内面は口縁部付近に若干ヨコハケを残すがハケ整形後全体にヘラミガキされたものと思われる。口唇部には縄文が施さ

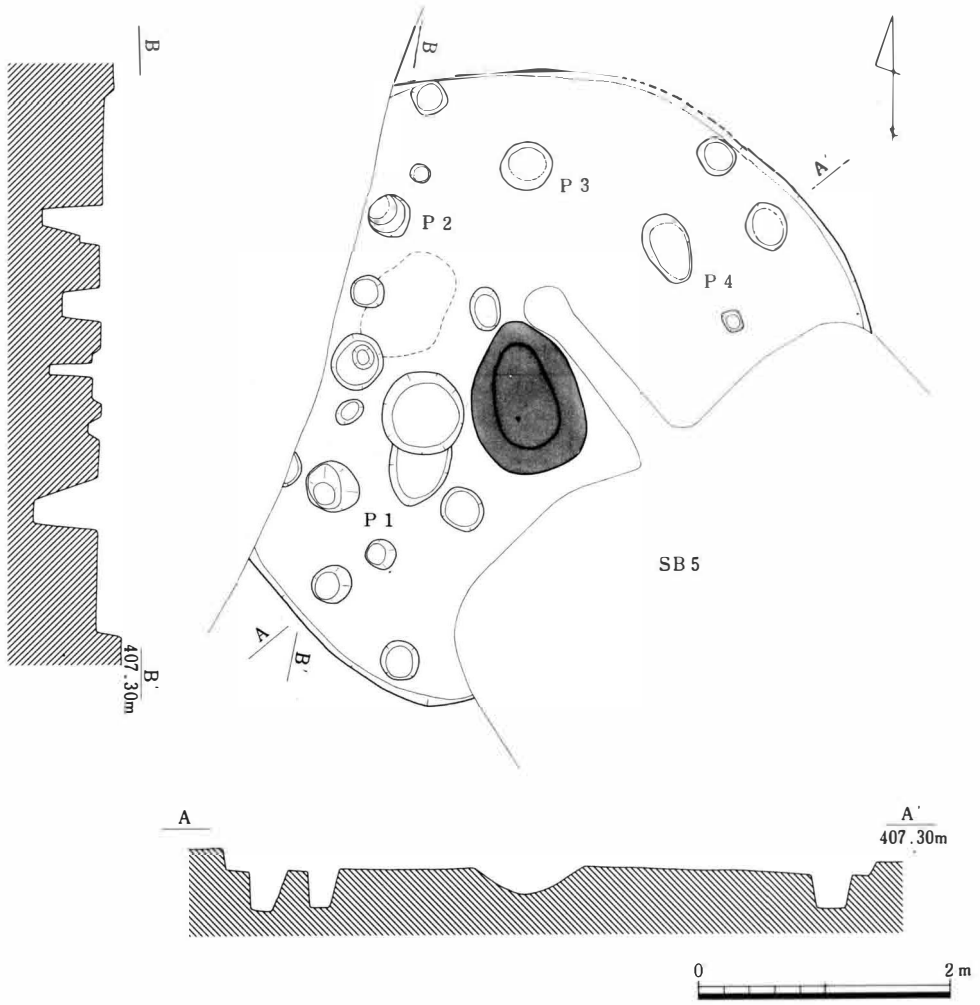


図14　4号住居址実測図

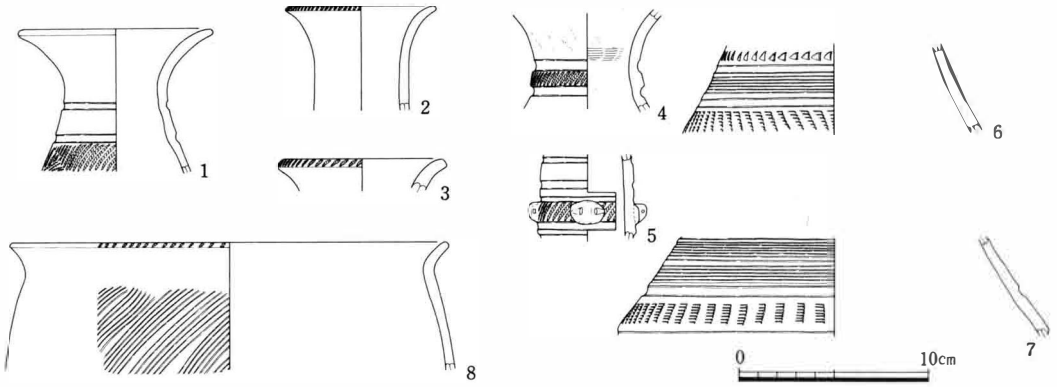


図15　4号住居址出土土器実測図

表１　４号住居址出土土器観察表

番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存度	成形・調整	備考
1	弥生	壺	10.2			1/2		
2	〃	壺	7.9			1/3	外面：強いヨコナデ→縦or斜方向のヘラミガキ 内面：ヨコハケ→ヘラミガキ？	
3	〃	壺	8.9			1/3	内外面ともにヨコナデ	
4	〃	壺				4/5	外面口頸部：強いヨコナデ→斜ハケ→ナデ 内面：ヨコハケ→ナデ	
5	〃	壺						
6	〃	壺				1/4	外面：施文後→ヘラミガキ 内面：ナデ	
7	〃	壺				1/6	外面：斜ハケ→ヘラミガキ 内面：ナデ	
8	〃	甕	23.4			1/6	内面：指頭による調整痕を残す	

れている。(3)は口縁部破片であるが口縁部は短く外反して終り(2)と同様の形態が予想される。内外面ともナデ整形されるのみで、口唇部には縄文が施文されている。

(4)は頸部付近の破片であるが口縁部は(1)と同様の形態が予想される。外面口頸部は強いヨコナデのあと斜めもしくは縦方向のハケ整形がなされ、その後再びナデ整形される。内面は頸部付近を中心に横ハケ整形され、頸部下はその後強いナデ整形がなされている。太篦描沈線が２本施され沈線間は上段にＬＲの縄文が充塡され、下段には図示し得なかったが櫛状工具による押し引き文が施文されている。(5)も頸部付近の破片であるが筒状に長く立ち上がる形態をとっている。内外面とも磨耗著しく調整などの詳細は不明である。太篦描沈線が５本まで確認できるが沈線間に文様をもつのは一帯だけである。この部分は粘土紐を貼つけた突帯をなし、ＬＲの縄文を施文したのちに横方向に一孔を有する突起を貼りつけている。突起は現状では２個確認されるが、全体では４個あったものと思われる。

(6)(7)はともに壺胴上位から胴中位にかけてのものと思われる。(6)は２本の太篦描沈線によって区画された文様帯が３帯確認できるが、上から棒状工具による右まわりの刺突文・櫛描直線文・櫛状工具による押し引き文がそれぞれ描かれている。外面は斜方向のハケ整形後施文されその後軽いヘラミガキがなされている。内面はナデ調整であろうか。(7)も太篦描沈線によって区画された文様帯が２帯確認できるが、上段は櫛描直線文が２帯施され、下段は櫛状工具による押し引き文が施されている。(6)同様文様施文後にヘラミガキがなされている。また内面には指頭による調整痕が若干残されている。

(8)は甕形土器で口縁部は頸部から短く外反して終り、最大径は胴部に有すると思われる。櫛描直線文・簾状文等の頸部文様は認められず、胴上半に櫛描単斜条痕が認められるが横位羽状文となるか否かは不明である。口唇部には縄文が施文される。内面には指頭による調整痕を残すが詳

細は不明である。

図16～18には拓影を示した。①～㊾は壺形土器で、①は口縁部破片で口唇部には縄文が施文されている。②③は頸部に突帯をもつものであるが②はハケ状工具による刻みが、③には縄文がそれぞれ施文されている。

④～㉜は胴上位から胴中位にかけてのもので、太篦描沈線による直線文で区画された内部に主として櫛状工具による文様が充塡されているものである。④～⑬は櫛描直線文と櫛状工具による右まわりの刺突文が充塡されたもの、⑭～⑰は櫛描直線文と棒状工具による右まわりの刺突文が施されたものである。⑭⑮には、棒状工具による刺突文が認められる。また⑱～㉓は櫛描直線文のみが認められるもの、㉔～㉜は櫛状工具による刺突文のみが認められるものである。

㉝～㊺㊿～㊼はやはり胴上位から胴中位にかけての破片で、太篦描沈線による直線文で区画された内部に主として縄文が充塡されているものである。㉝～㉟は縄文と櫛描直線文が認められるもの、㊱～㊺は縄文と棒状工具による刺突文が認められるものである。㊲は文様帯が3帯認められ、縄文と刺突文が交互に施文され下端には円弧文が描かれている。㊿～㊼は縄文のみが認められるものである。㊻～㊾は太篦描沈線による直線文で区画された内部に棒状工具による刺突文が認められるものである。また㊿は頸部破片で、直線文で区画された内部にヘラによる縦方向の刻みが加えられるものである。㊽～㊷は頸部から胴上半にかけての破片で、直線文で区画された縄文地文上に篦による山形文もしくは重山形文を描くもの、また㊸㊹は太篦描沈線による直線文のみが認められるものである。

㊺～㊷は胴上位から胴中位上にかけての破片で懸垂文をもつものであるが㊼～㊾は同一個体である。懸垂文の内部にはいずれも縦方向の櫛描直線文が描かれているが、懸垂文の形状・周囲の文様などにいくつかのバラエティーが認められる。㊺㊿は沈線で区画するのみで、周囲に棒状工具による刺突文をめぐらさない。特に㊿は懸垂文下端が区画されることなくそのまま下の横帯文に連なり、また懸垂文の周囲には縄文が施文されている。㊼～㊾は懸垂文の周囲に棒状工具による刺突文をめぐらすが、さらにらそのまわりに縄文が施されている。

㊷～㊻は工字文もしくはその流れをくむ文様をもつものである。工字文の内部に縄文が施される㊷㊻と、工字文の外部に縄文が残される㊹、ならびに沈線のみの㊺が認められる。㊽～㊸は重円弧文をもつもの、㊺㊻は重山形文をもつもの、㊼～㊾はその他の文様をもつものである。㊽は縄文地文上に重四角文が描かれている可能性があり、また㊾には櫛状工具による楕円形状の文様が認められる。

❾⓪～⑲は甕形土器で、⑨⓪～⑨⑥は口縁部破片である。形態の上からは頸部から緩やかに短く外反して終る⑨⓪～⑨②⑨⑤⑨⑥と頸部から内湾ぎみに立ち上がって終る⑨③⑨④とにわけられる。前者は口唇部の加飾の差異によってさらに縄文が施文される⑨⓪⑨①、篦による刻みのみが施される⑨②、縄文が施文された後に指頭による押捺が加えられる⑨⑤⑨⑥とに分類できる。⑨③⑨④は口縁部が内湾ぎみに立ち

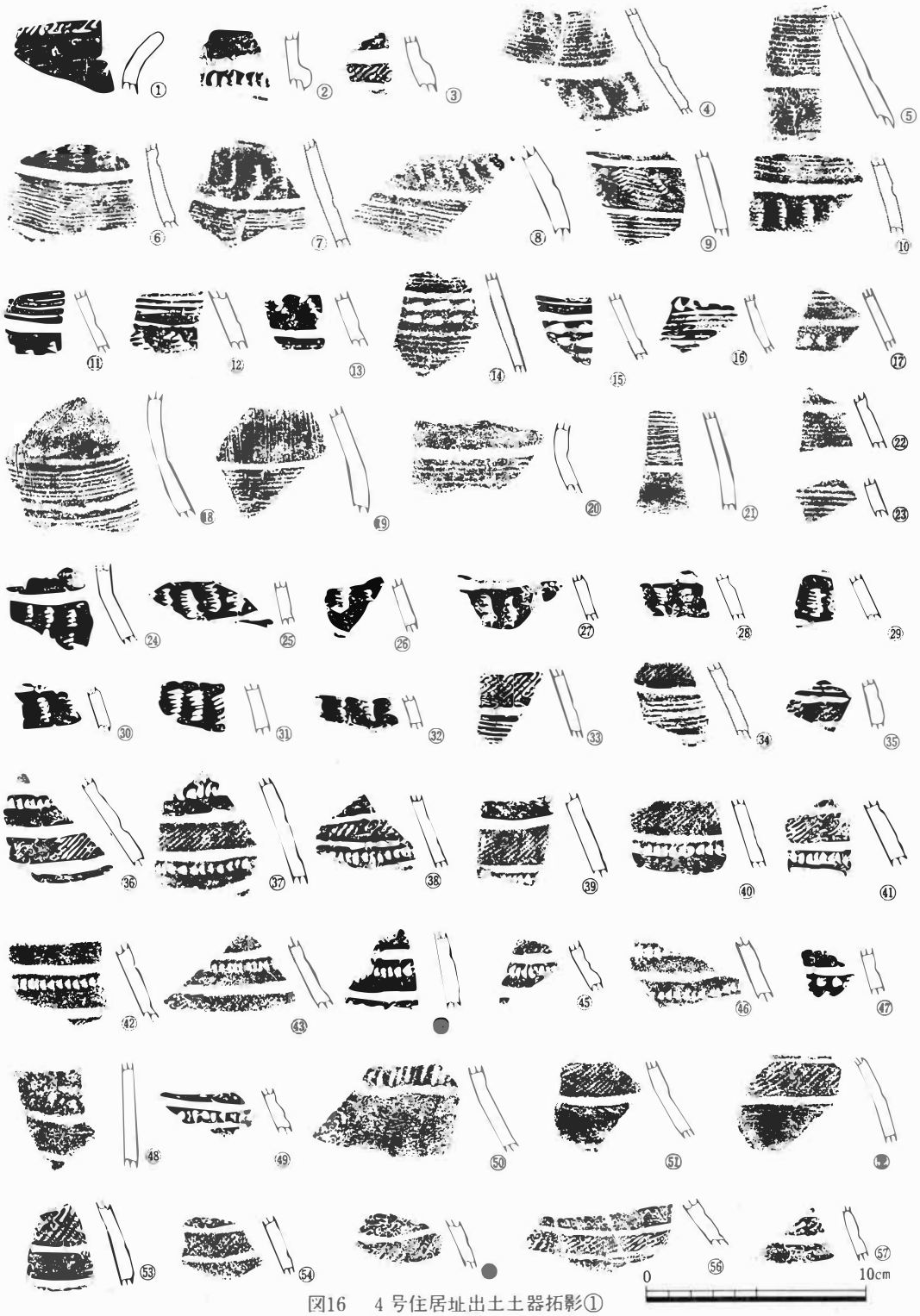


図16　4号住居址出土土器拓影①

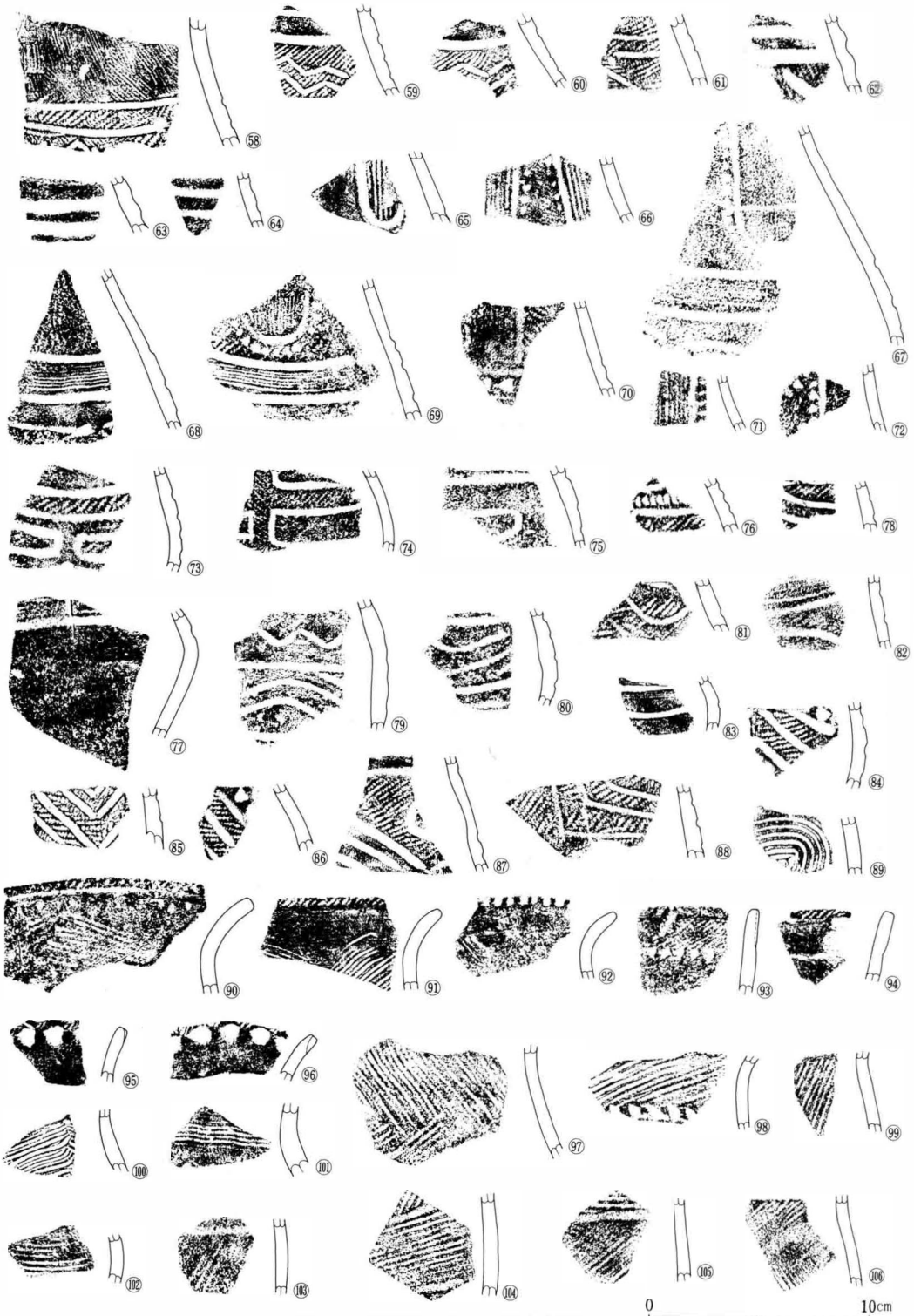


図17　4号住居址出土土器拓影②

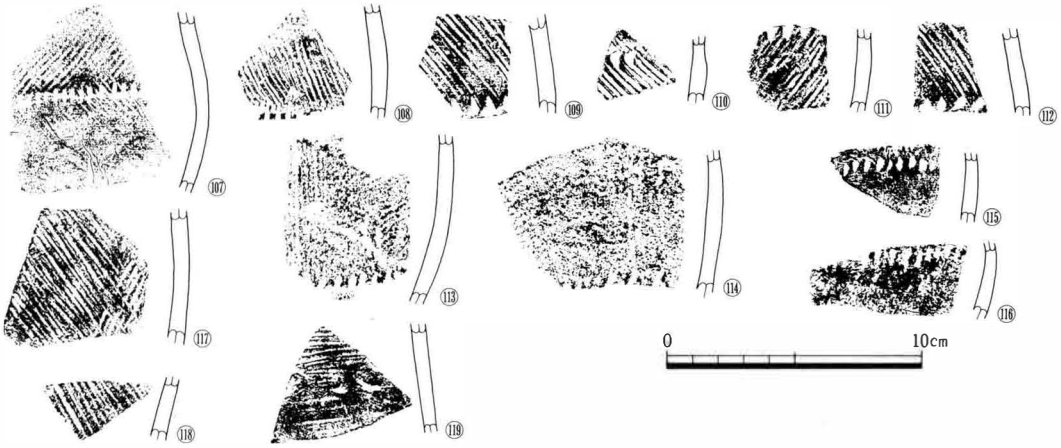


図18　4号住居址出土土器拓影③

上がり、また折り返し状口縁を呈するものである。ともに口唇部には縄文が施文されるが、㊸は口縁部外面の折り返し部に縄文が施文され、また体部との境の段の部分には篦状工具による刻みもしくは刺突がなされている。㊹の口縁部外面はナデ整形されるのみである。

㊼～㉑は頸部付近の破片で、㊼～㊾は横方向の櫛描羽状文が描かれていると思われ、㊽はさらに棒状工具による刺突が加えられている。㉖は縦方向の櫛描羽状文が、㉑は櫛描直線文が認められる。㉑～㉒は主として胴部中位から下位にかけての破片であるが、櫛描羽状文もしくは単斜条痕をもつ㉑～㉒と、波状文をもつ㉓㉔とに大別できるがともに中位下半の文様帯下端、もしくは段をなす部分には棒状工具による刺突が施されている。㉓㉔ともに波状文を施文した後に、櫛描直線文を縦方向に施文する文様をもつものである。

7号住居址

遺構　(図19)

I区とII区の接点近くに位置する。形態は、径4.0mの円形を呈するものと思われるが東側半分は調査区域外に延びる。掘り込みは北で12cm,南で14cm、西で12cmを測り、床面は平坦で軟弱である。炉は住居址中央に設けられ、径80cm程の地床炉になる。その掘り込みは23cmで底面に焼土が認められた。またこの住居址も床面上に薄く焼土が確認された(実測図中鎖線の部分)。主柱穴はＰ１（径16cm・深さ41cm）・Ｐ２（径20cm・深さ44cm）・Ｐ３（径20cm・深さ37cm）の６本方形配列を推定する。他は支柱穴であろう。ただ入口部を想定する時、Ｐ１・Ｐ２の壁際にある柱穴はじゃまになるため逆方向の東側に入口があったのではなかろうか。

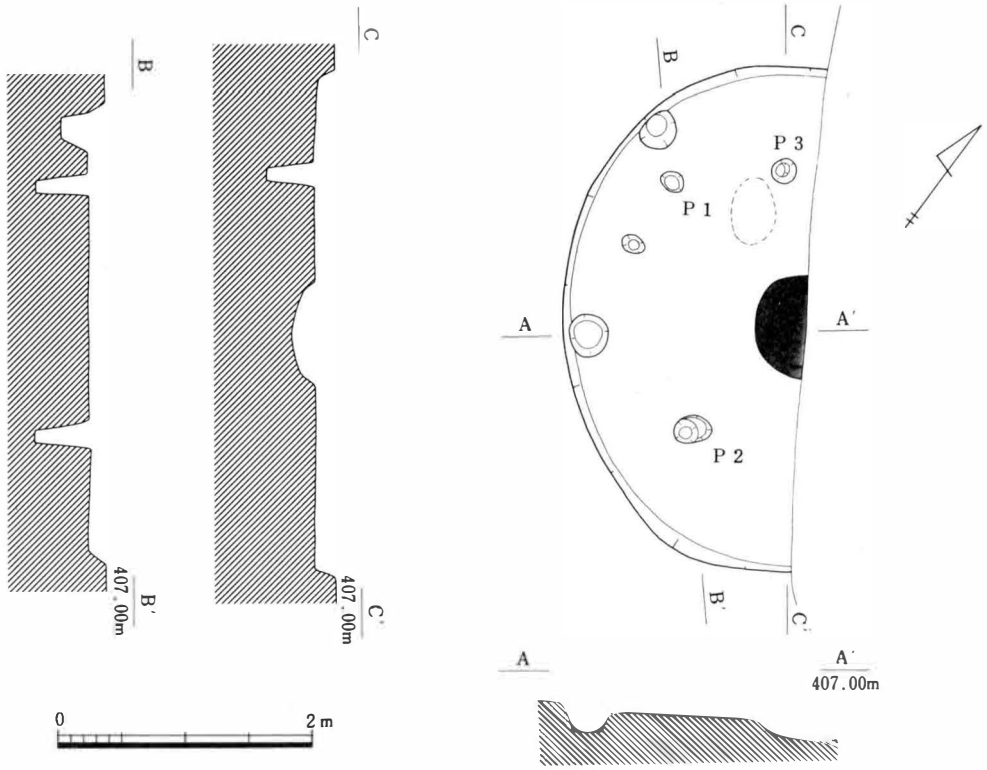


図19　7号住居址実測図

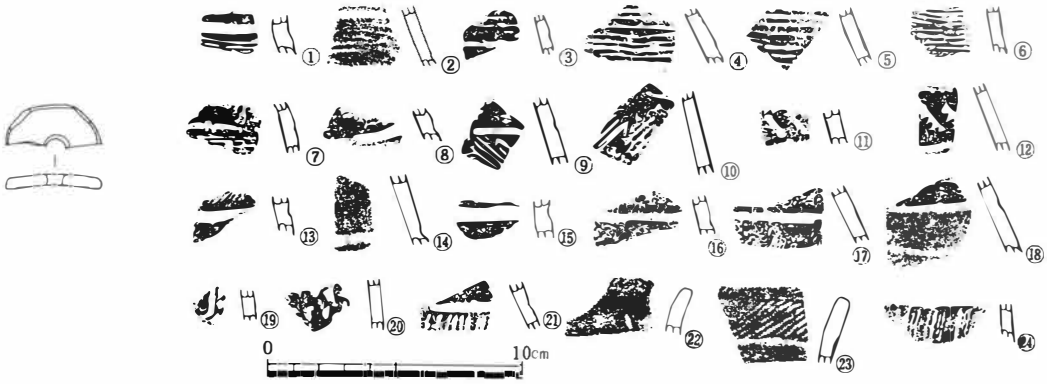


図20　7号住居址出土遺物実測図・拓影

遺物　(図20)

実測可能なものは土製円板が1個出土したのみで他は破片である。(1)は土器片を再利用した土製円板で径約3.7cmを測る。外面はヘラミガキされ、内面はハケ整形されていることより壺形土器の破片かと思われる。中央には一孔を有するが穿孔は内外面からなされている。

①～㉑は壺形土器の頸部から胴上半にかけての破片である。①～③は太篦描沈線による区画内

に櫛描直線文が認められ、④～⑥は櫛描直線文のみ認められる。⑦⑧は沈線、櫛描直線にさらに棒状工具による刺突文が加えられる。⑨⑩は櫛描単斜線文が認められるものだが、⑨は縦位の羽状文になっている。また⑪⑫は櫛状工具による刺突文がなされるものである。⑬～⑱は主として篦描沈線のみのものだが⑬は上半に縄文が認められる。⑲は懸垂文、㉑は篦による縦方向の刻みが施されている。

㉒㉓は甕口縁部破片で㉒は口縁部が短く外反して終る形態をとり、口唇部には縄文が施される。㉓の口縁部は折り返し状を呈し、口唇部ならびに折り返し部には縄文が施文されている。

9号住居址

遺構　(図21)

I区の南側、II区との接合部奥に位置する。検出された部分は東側の3分の1位にすぎず、柱穴・炉等は確認することができなかった。形態は長円形を呈するものと思われ、長軸（南北）4.2m・東西軸3.0m前後の規模になるものと予想する。掘り込みは北側で33cm、南側で36cmを測る。床は軟弱で南に幾分傾斜するが平坦に近い。

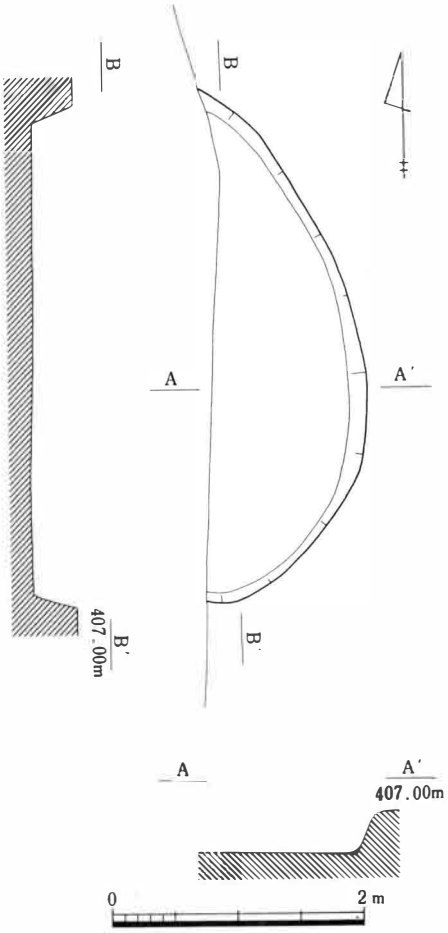


図21　9号住居址実測図

遺物　(図22)

実測可能なものはなく、壺・甕形土器の破片が出土しているのみである。①～⑬は壺、⑭～⑲は甕の破片である。①～⑤は太篦描沈線による直線文で区画された内部に縄文が施されるもの、⑥は縄文のみが認められるものである。⑦～⑩は直線文とその内部に棒状工具による刺突が施されたもので、⑦はおそらく円弧文が加わるものであろう。⑪～⑬は懸垂文をもつもので、⑪⑫には沈線区画内に縦方向に櫛描直線文が描かれ周囲には棒状工具による刺突文がめぐらされる。⑪は懸垂文施文以前に地文として縄文が施され、⑫は懸垂文の周囲に縄文が施される。⑬は磨耗が著しく詳細は不明である。⑭⑮は甕胴上半の破片で櫛描波状文と直線文が描かれ、⑯～⑱は胴下半の破片で櫛描単斜条痕が認められる。

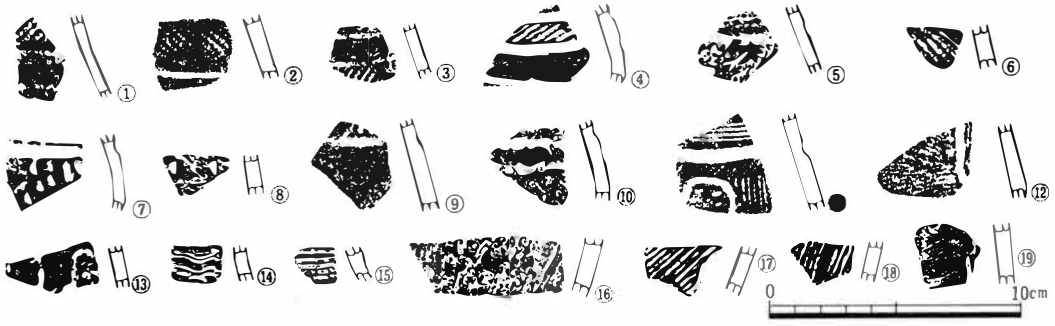


図22　9号住居址出土土器拓影

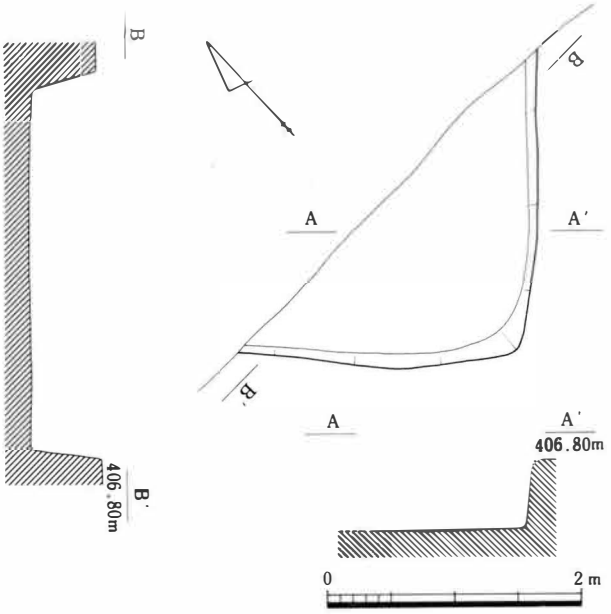


図23　11号住居址実測図

11号住居址

遺構　（図23）

Ⅰ区とⅡ区の接合部に位置し、下部遺構に縄文時代の18号住居址がある。また1号溝址と重複しこれよりも新しい。調査は住居址の南西隅付近を実施したにすぎず、他の4分の3程は北側の調査対象区域外にある。南北軸方向をN—48°—Wにとる（長）方形を呈する住居址と思われる。掘り込みは深く南壁で50cm・西壁55cmを測る。床面は平坦で軟弱である。柱穴等は認められなかった。

遺物　（図24）

実測可能なものは出土していないが壺ならびに甕の破片が出土している。①～④は壺頸部破片である。①④には櫛描直線文を櫛で縦に切ったいわゆるT字文が認められる。①は櫛描直線文が3帯認められ、また施文部以外はヘラミガキされ赤彩されている。②③には櫛描直線文のみが認められる。⑤は3本一組の櫛状工具による単斜文が認められるが文様構成等は不明である。　⑥～⑧は甕口縁部破片で形態には単純に外反して終る⑥⑧と、端部にて若干内湾ぎみに立ち上がる⑦の二者が存在するがともに波状文が施文され、また口唇部は無文である。⑩～⑫は甕胴部破片である。

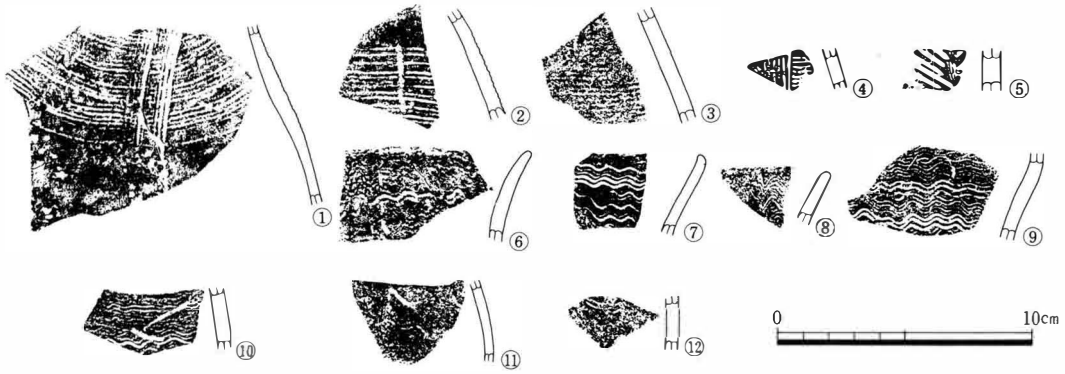


図24　11号住居址出土土器拓影

1号溝址

遺構　(図25)

I区とII区の交点にあり、南西から北東へ展開するものと思われ、底面の傾斜はこれに添う。北側で11号住居址により切り込まれている。全長は不明であるが、上部巾1.6～1.5mで、底面巾1.3m程を測り、その掘り込みは浅く20cm内外の規模になる。形態は巾広のU字形になる。底面及びこの直上には土器片をはじめ拳大から人頭大の自然礫が散在していた。

遺物　(図26・27)

実測可能なものでは壺形土器が3個体出土している。(1)は細頸壺であるが口縁部と胴下半を欠失している。胴部はさほど強く張らず緩やかに頸部へと移行してゆく。外面の整形は磨耗のため不明であるが内面胴部は横もしくは斜めのハケ整形後ナデ整形され、頸部は全体にナデ整形される。文様は大きく頸部・胴上位・中位・下位の4つに分けられる。頸部は3本の太篦描沈線によって二つの文様帯がつくり出されるが、上段は無文のまま残され下段には篦状工具による縦位の刻みが充填されている。胴上半には懸垂文が一周で6ヶ所施文される。懸垂文は沈線で区画されるが下端は直線で区画され長方形状を呈する。区画内部は縦方向の粗雑な櫛描直線文がそれぞれ2帯づつ施されるが、櫛状工具は3本一組でいずれも左

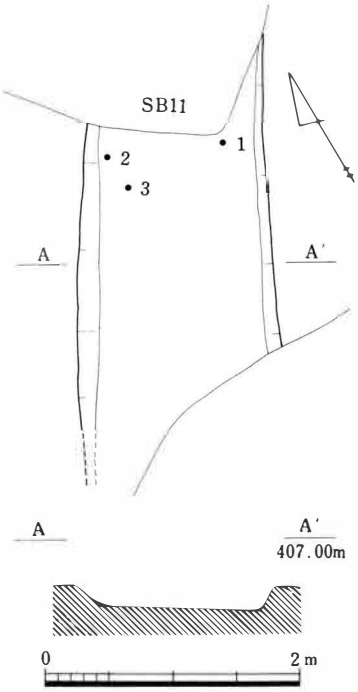


図25　1号溝址実測図

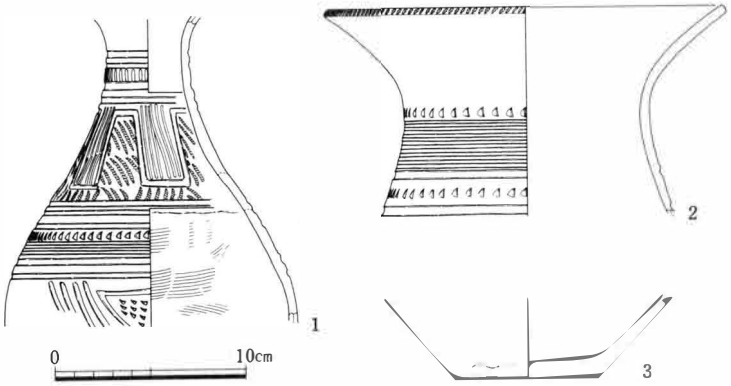


図26　1号溝址出土土器実測図

から右の順序に施文されている。懸垂文の周囲には棒状工具による刺突は認められないが縄文が充塡されている。胴中位は沈線で区画された内部に、棒状工具による右まわりの刺突文と櫛描直線文が描かれ、胴下半は篦描による重三角文が描かれている。また重三角文の中央の区画には棒状工具による刺突文が充塡されている。

(2)は太頸壺であるが口縁部は頸部から直線的に大きくくの字状に外反して終る。磨耗のため調整等の詳細は不明である。口唇部には縄文が施される。頸部は棒状工具による刺突文と太篦描沈線によって上下を画された中に2帯の櫛描直線文が施され、さらにその下にもう一帯刺突文が認められる。(3)は底部破片で、底部はやや突出ぎみである。磨耗が著しく詳細不明だが、底部はていねいにナデ整形されきれいな平底を呈する。

図27①～⑮は壺形土器、⑯は甕形土器破片である。①～⑪は頸部から胴上半にかけての破片で、①は太篦描沈線による区画内に上から棒状工具による刺突文、縄文、櫛描直線文が施文されている。②は直線文と円弧文が認められ、④⑤は直線文のみで構成されている。⑥⑦は縄文が施文されるもの、⑧～⑩は棒状工具による刺突文が施されるものである。⑪は突帯上に篦状工具による縦位の刻みがなされ、その後一本の沈線がひかれている。⑫～⑮は胴中位～下位の破片で⑬には重三角文が、⑭には幾何学文が、⑮には円弧文が描かれている。⑯は甕頸部付近の破片で右

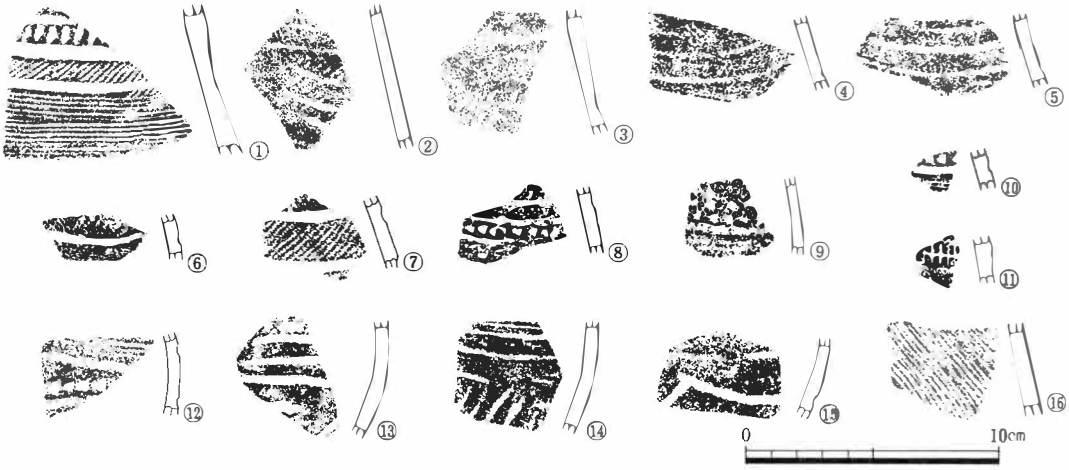


図27　1号溝址出土土器拓影

表2　1号溝址出土土器観察表

番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存度	成形・調整	備考
1	弥生	壺				3/4	内面頸部：ヨコナデ　胴部：横or斜ハケ→ナデ	
2	〃	壺	21.4			4/5	外面口縁部：ハケ→ナデ？	
3	〃	壺		7.8		3/5		

下がりの櫛描単斜条痕が施されている。

土器集中遺構

遺構　(図28)

Ⅰ区の南側、9号住居址の南、8号住居址の西に検出された遺構で、上面からの落ち込みは認めらず、単に土器が集中していた形態で見い出された。土器片の散在範囲は約1m×1mの狭いもので、その出土状態は、土圧によりつぶれ込んだものとほぼ球形を呈するものがある。しかしこの土器片群から完形に近くまで復元されるものはない。当初住居址　内の遺構と考えたのであるが、床面と推定する面は礫が多く突き出していたり、凹凸があり平坦でなかったので、この想定は無理であると考えた。単なる土器の廃棄場とも思えない。尚、球形に近い土器の残存から古墳時代に比定する8号住居址の構築時には埋没しており、この住居址の南壁付近は検出時より少なくとも15cm程高い数値が求められる。

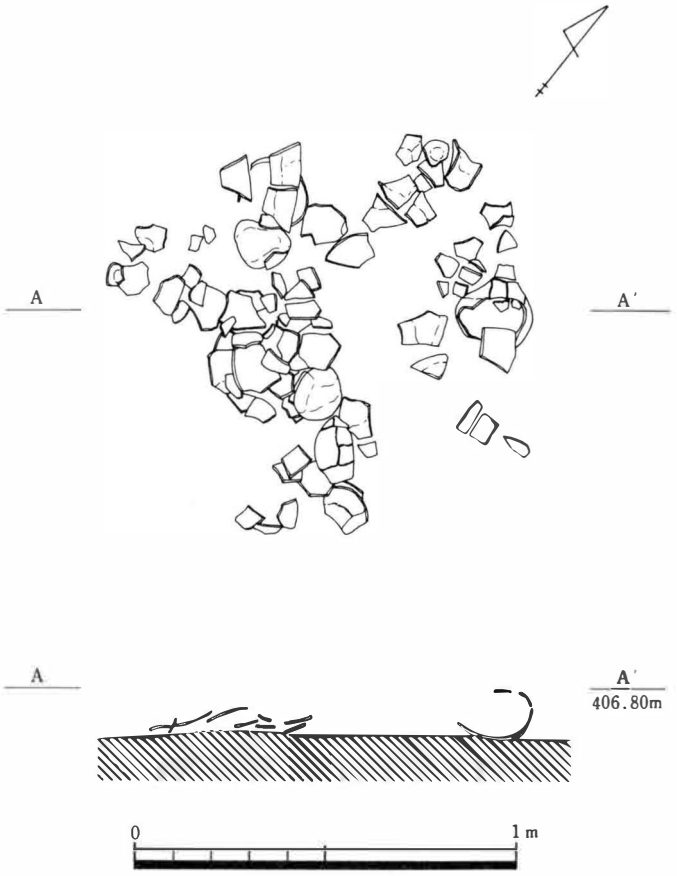


図28　土器集中遺構実測図

遺物　(図29～31)

(1)～(12)は壺形土器である。

(1)は細頸壺で口縁部は頸部か

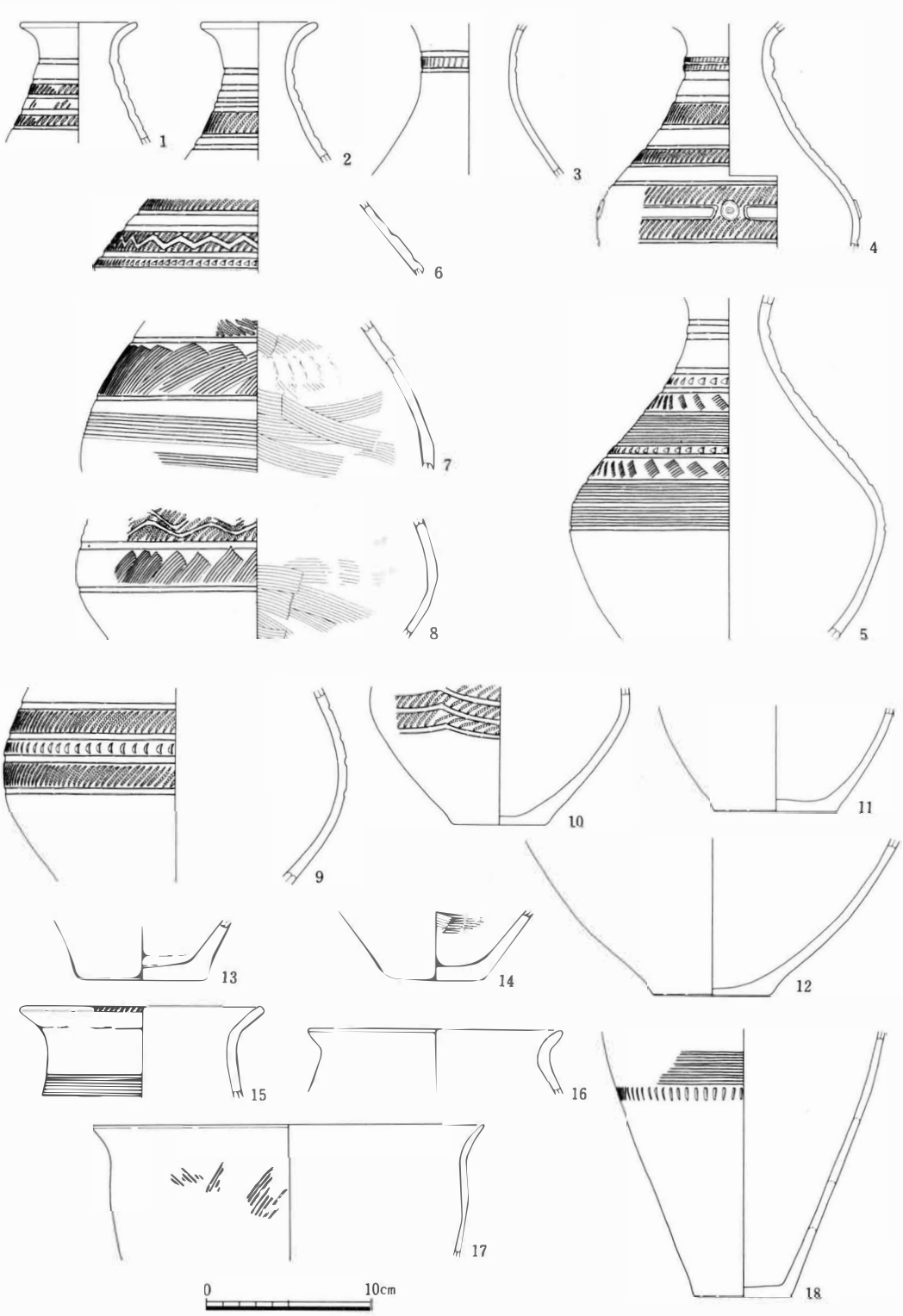


図29　土器集中遺構出土土器実測図

表3　土器集中遺構出土土器観察表

番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存度	成形・調整	備考
1	弥生	壺				4/5	外面口縁部：ヨコナデ→赤彩　頸部：施文後にミガキ 内面頸部：ナデ	
2	〃	壺	7.2			3/5	磨耗のため詳細不明	
3	〃	壺	8.9			3/5	外面口頸部：縦の斜ハケ→ナデ　胴部：ハケ→ナデ 内面：ナデ？	
4	〃	壺				1/3	外面口頸部：ヨコナデ	
5	〃	壺				3/5	外面口頸部：ナデ 内面口頸部：ナデ	
6	〃	壺				1/6	内面：指頭による調整痕を残す	
7	〃	壺				1/4	外面：斜or横ハケ→ナデ→施文→軽いミガキ 内面：斜or横ハケ　指頭による調整痕を残す	
8	〃	壺				1/5	外面胴下半：斜ハケ→ヘラミガキ 内面：斜ハケ→ナデ	
9	〃	壺				3/4	外面胴下半：ヘラミガキか？	
10	〃	壺		5.8		3/4	外面胴下半：斜or横ハケ→ヘラミガキ 内面：横ハケ？→ナデ	
11	〃	壺		7.6		1/3	外面：ていねいなナデ？	
12	〃	壺		7.4		1/6	内面：斜ハケ→ナデ	
13	〃	壺		8.0		3/5	外面：斜ハケ→ヘラミガキ 内面：斜ハケ　底部付近に強いヨコナデ	
14	〃	壺		6.0		2/5	外面：縦or斜方向のヘラミガキ 内面：ハケ→ナデ	
15	〃	甕	15.1			1/6	外面口頸部：ヨコナデ	
16	〃	甕	15.6			1/8	内面：ヨコヘラミガキ？	
17	〃	甕	24.2			1/3	磨耗著しく詳細不明	
18	〃	甕		6.0		4/5	〃	

ら短く外反して丸みをもって終る形態をとる。口唇部への加飾の有無は磨耗のため不明である。口縁部外面は横ナデされその後赤彩されている。頸部内面はていねいに横ナデされるが、外面に篦描沈線が施されることによってその周辺は凹凸をなしている。頸部には太篦描沈線による直線文が5本認められ、この直線文によって区画された文様帯には上から無文と縄文を交互に繰り返している。また無文部には横方向の軽いヘラミガキが加えられている。(2)は(1)に比較して口縁部の頸部からの立ち上がりはやや長く外反度も大きい。内外面とも磨耗が著しく口唇部への加飾の有無、ならびに調整等の詳細は不明である。頸部付近には太篦描沈線による直線文が6本認められるが縄文が施される文様帯は一帯のみで、他は無文のまま残されている。(3)は口縁部と頸部下を欠失するが、外面は斜めもしくは縦方向の細いハケ整形を行い、その後ナデ整形されている。頸部文様は2本の太篦描沈線を施文し、その後ハケ状工具原体による刻みを充塡している。

(4)(5)はともにやや下ぶくらみの器形を呈する細頸壺で、胴中位下半に最大径を有する。(4)は内

外面とも磨耗が著しく推定によるところが大きいが、頸部には貼りつけによる突帯を施し、この突帯には箆による縦方向の刻みを施したのちに一本の箆描沈線を引いている。頸部下は確認できる範囲においては、太箆描沈線による直線文を7本施すことによって6帯の文様帯を作り出している。文様帯は上から無文と縄文が充塡されるものを交互に繰り返し、胴中央部の幅広の文様帯には工字文を描いている。工字文内部は縄文が施されず、また工字文の交点付近には中央に竹管状工具による刺突をもつ円形浮文が施される。円形浮文は現状では2個確認されるのみだが、全体では4個あったものと思われる。(5)も磨耗のため整形は不明な部分が多いが、外面胴上半は文様施文後部分的にヘラミガキがなされており、胴下半はヘラミガキもしくはナデ整形がなされていたものと思われる。内面は頸部から胴上半はナデ、最大径以下はハケ整形後ナデ整形されている。文様は頸部に2本の箆描沈線を施し、胴上半から胴中位にかけては7本の箆描沈線によって6帯の文様帯をつくり出し、上から棒状工具による刺突文、櫛描単斜線文、櫛描直線文をそれぞれ施文している。また櫛描直線文は一つの文様帯にそれぞれ2帯づつ施文されている。

(7)～(9)はいずれも胴中位付近で、最大径部分が強く張り出す形態を呈する。(7)の外面は文様施文後に部分的に軽いヘラミガキが加えられ、内面は全体に斜めもしくは横方向のハケ整形がなされるが粘土帯接合部付近は指頭による調整痕を顕著に残している。文様は確認できる範囲では2本の太箆描沈線による直線文を施した後、上から縄文、やや長めの櫛描単斜線文・櫛描直線文2帯が施文されている。櫛描単斜線文は右上から左下へ右まわりの順序で施文されている。(8)は外面下半は斜めもしくは縦方向のハケ整形後ヘラミガキがなされ、内面は全体に斜方向のハケ整形がなされた後、上半部はナデ整形される。文様は確認できる範囲では2本の太箆描沈線による直線文を施した後、上段には縄文を地文としてその上に箆描の波状文を2本描き、下段はやや長めの櫛描単斜線文を施している。(9)は最大径付近がさほど強く張り出さず球形に近い形態をとるが、磨耗が著しく調整等の詳細は不明である。文様は確認できる範囲では太箆描沈線文を4本施し、上から無文・縄文・棒状工具による刺突文・縄文の順に施文されている。

(10)～(14)は底部付近の破片である。(10)は胴中位から下半にかけて3本の円弧文が描かれ、沈線間は縄文が施されている。底部はいずれもていねいなナデ調整がなされきれいな平底を呈する。

(15)(16)は甕形土器である。(15)は口縁部は頸部から緩やかなくの字状をなして短く外反して終るが、外面には成形時の接合痕を残し一見折り返し状を呈している。また最大径は口縁部に有するものと思われる。口唇部には縄文が施されまた頸部には櫛描直線文が施文されている。(16)の口縁部も頸部から短く外反して終る形態をとり、内面はヘラミガキがなされているようである。(17)は最大径を口縁部に有し、胴部は内湾ぎみに底部へ収約してゆく深鉢形を呈するものと思われ、また器壁は非常に薄い。磨耗著しく明確ではないが、体部には斜方向の櫛描文が認められる。あるいは縦位の羽状文であるかもしれない。(17)は胴部がさほど張らずこの時期のものとしてはややスマートな感じのする器形を呈する。胴中位には櫛描直線文が一帯認められ、その下端に箆状工具によ

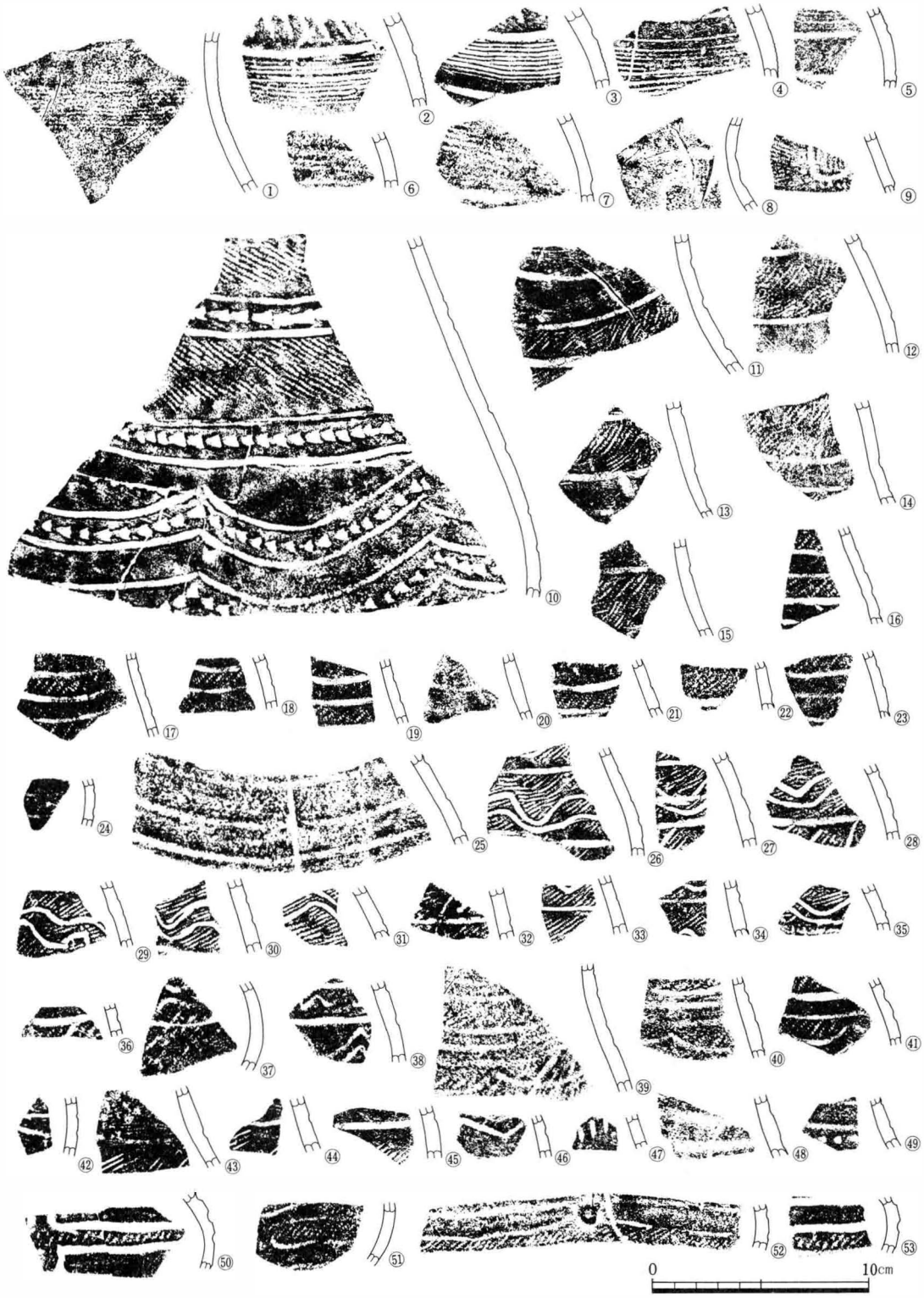


図30　土器集中遺構出土土器拓影①

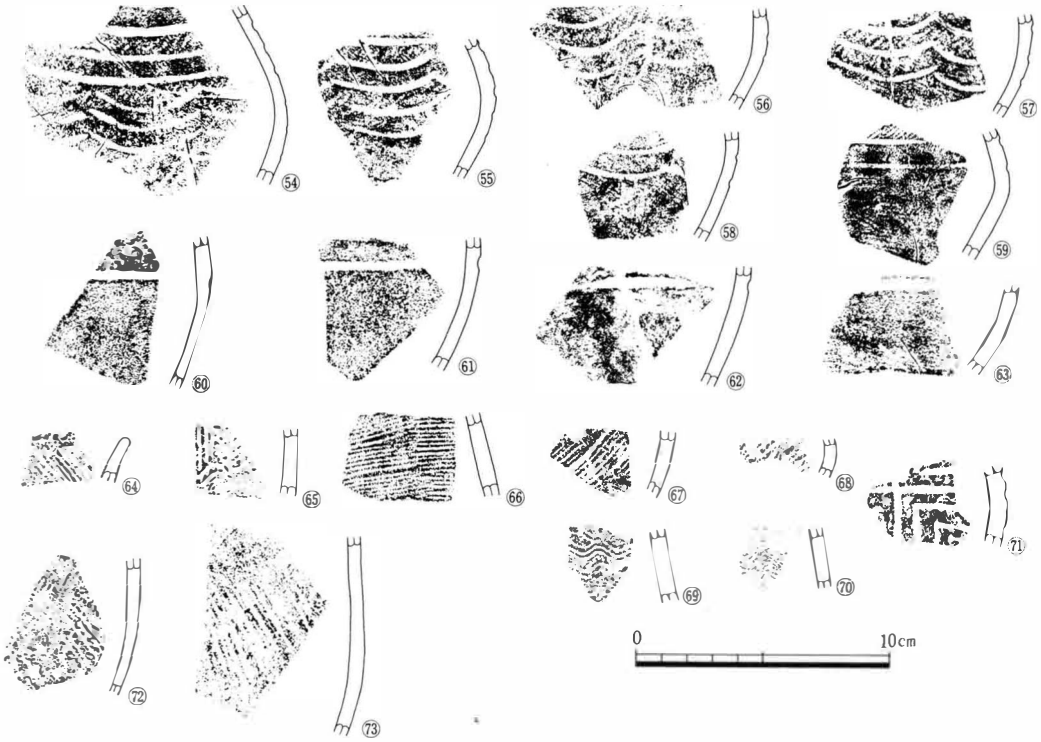


図31　土器集中遺構出土土器拓影②

る刻みが施される。

図30・31には拓影を示した。①～⑥③は壺形土器、⑥④～⑦③は甕形土器である。①から⑦は主として櫛描直線文を施すものであるが、②③には櫛状工具による刺突文が認められる。⑧⑨は懸垂文をもつものである。⑧は磨耗が著しく詳細は不明であるが、⑨は、懸垂文内部には縦方向の櫛描直線文が施され周囲には棒状工具による刺突文がめぐらされる。またその周囲には地文的に縄文が施文されている。

⑩は大形壺の胴中位付近の破片である。上半には太篦描沈線によって区画された縄文帯と棒状工具による刺突文が交互に施され、下半には刺突文が充塡された円弧文が2帯認められる。⑪～④⑨は主として縄文が施文されるものである。⑪～㉕は太篦描沈線による直線文で区画された内部に縄文が施文されるものであり、㉖～㉟はそこにさらに篦描沈線による波状文が描かれるものである。

⑤⓪～⑤③は胴中位の破片で工字文が描かれるものである。工字文内部は無文のまま残される⑤⓪⑤③と内部に縄文が施される⑤①⑤③とがある。⑤②は工字文の交点付近に、中央に竹管状工具による刺突がなされた円形浮文が施されている。⑤④～⑥③は胴中位から胴下半にかけての破片であるが、⑤④～⑤⑧には篦描の円弧文と縄文が施され、⑥⓪⑥③には太篦描沈線による直線文が一本認められる。

⑥④は甕口縁部破片で口唇部には縄文が施され、口縁部には斜方向の櫛描文が認められる。⑥⑤～⑦③

は胴中位から下半にかけての破片である。⑥⑤には櫛描波状文を櫛で縦に切った文様が、⑥⑦⑧には櫛描条痕が、⑦①にはいわゆるコの字重ね文が描かれている。

検出面出土の弥生式土器　(図32～35)

検出面からは弥生中期の栗林式土器ならびに後期の箱清水式土器が出土しているが、実測可能なものは図32に示した4点のみで他は拓影で示した。

(1)は栗林式の太頸壺形土器で、口縁部は頸部から緩やかに立ち上がり端部にて短く外反する形態をとり、口唇部はやや肥厚する。外面口頸部は横もしくは斜方向のハケ整形後ナデ整形されたと思われるが、内面の整形は磨耗が著しく不明である。文様は口唇部に縄文が施され,頸部には棒状工具による刺突文と櫛描直線文が施文されるが、直線文は不明瞭で原体等の詳細は不明である。

(2)は小型の甕形土器で、胴部はさほど張らず口縁部は頸部から緩やかな弧を描いて外反し端部は丸く終る。外面胴下半は文様施文後縦方向のヘラミガキがなされ、内面も全体に横方向のヘラミガキがなされている。文様は頸部に2連止めの櫛描簾状文を施文したのち、口縁部と胴部にともに上から下の順序に波状文を施文している。後期箱清水式期のものと考えられる。

(3)は壺形土器の底部破片で、外面は細く丁寧な縦方向のヘラミガキが行なわれ赤彩される。内面は横方向にハケ整形された後ヘラによる平滑化が行なわれ、その後雑なナデ整形がなされる。底面は不定方向のヘラケズリ後部分的にナデられるが、きれいな平底を呈する。箱清水式期のものと思われる。

(4)は手づくねによるミニチュアの高坏形土器脚部である。外面には指頭による調整痕を顕著に残し内面はナデ整形される。また脚端部は面取りされている。時期は特定しかねるが古墳時代のものである可能性もある。

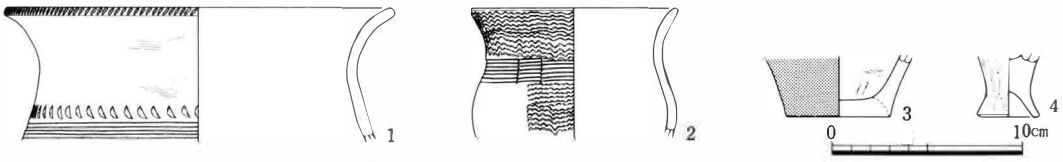


図32　検出面出土弥生式土器実測図

表4　検出面出土土器観察表（弥生時代）

番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存度	成形・調整	備考
1		壺	21.0			1/8	外面口縁部：斜もしくは横ハケ→ナデ	
2		甕	11.0			1/5	外面胴下半：縦ヘラミガキ　内面：ヨコヘラミガキ	
3		壺		5.4		2/3	外面胴部：縦ヘラミガキ・赤彩　底部：ヘラケズリ→ナデ 内面：ハケ→ヘラ調整→ナデ	
4		高坏		3.4		3/4	外面：指頭による調整、脚端は面とりされる 内面：ナデ	ミニチュア

図33①から図34図⑭栗林式の壺形土器破片である。①～③は口縁部破片である。①は小型壺と思われ頸部には篦描沈線が施されその後中央部に棒状工具による刺突を施した円形浮文が施される。口唇部の加飾の有無は磨耗のため不明である。②の口唇部は折り返し状を呈し、口唇部に縄文施文後篦による刻みがなされている。③は無頸壺と思われ、篦によって沈線区画された縄文地文上に弧文が描かれている。

④～㉚は頸部から胴中位にかけての破片で太篦描沈線による直線文で区画された内部に、主として櫛状工具による文様が充填されているものである。④～⑧は櫛状工具による押し引き文と直線文を充填したものであるが、④⑦は櫛原体による押し引きというよりも櫛描短斜文としたほうがよいかもしれない。⑨～⑰は櫛描直線文と棒状工具による刺突文を充填したもので⑪⑮には棒状工具による刺突文が２段にわたって描かれ、また⑪⑰は櫛描斜条痕上に刺突文が施されている。⑱～㉗は沈線区画された内部に櫛描直線文のみ認められるもの、㉘～㉚は櫛状工具による押し引き文のみが認められるものである。

㉛～㊵㊶～㊻は太篦描沈線による直線文で区画された内部に主として縄文が充填されているものである。㉛～㊵はそれに棒状工具による刺突文が加わるもので、㉜㊱には刺突文が２段にわたって施文され、また㊲は弧文の中に刺突文が充填されている。㊶～㊹は沈線区画された内部に縄文のみが認められるもので、また㊺㊻は縄文を地文としてその上に山形文もしくは重山形文が施文されたものである。

㊶㊷は細頸壺の頸部で、太篦描沈線内にヘラによる縦方向の刻みが充填されている。㊸～㊿は棒状工具による刺突文を主とするもので㊸～55は区画内に充填されるもの、56～㊿は刺突文のみが認められるものである。

77～85は太篦描沈線文のみが認められるものであるが、77㊽などは他の文様が加えられず篦描沈線のみ、もしくはそれに棒状工具による刺突文が加えられたのみで構成されていた可能性がある。86～90は頸部付近の破片と思われ、篦描沈線文とその区画内に篦描短斜線を充填した文様とによって構成されている。

91～94は懸垂文を施すものである。91は縦方向に沈線区画された中に櫛描直線文を充填し、その周囲に棒状工具による刺突文をめぐらせるが櫛描直線文は磨耗のためにはっきりしない。92㊸は懸垂文の下端が直線によって区画され懸垂文自体が長方形状を呈する。内部には櫛描直線文が施されるが周囲には刺突文をめぐらしていない。94は懸垂文下端は弧状を呈するが刺突文を欠き、かわりに縄文が施されている。95㊻は変形工字文もしくはそれに類する文様と思われるが、95は内部に縄文を充填し㊻は沈線のみである。

97～99は胴中位付近の破片で円形浮文をもつものである。97は上半に太篦描沈線間に櫛描直線文を施し、その下に櫛描山形文とその頂点に棒状工具による刺突をもつ円形浮文を施し、両脇には刺突文を充填した円弧文が認められる。98は沈線間に施文された直線文とともに２段にわたる

図33　検出面出土弥生式土器拓影①

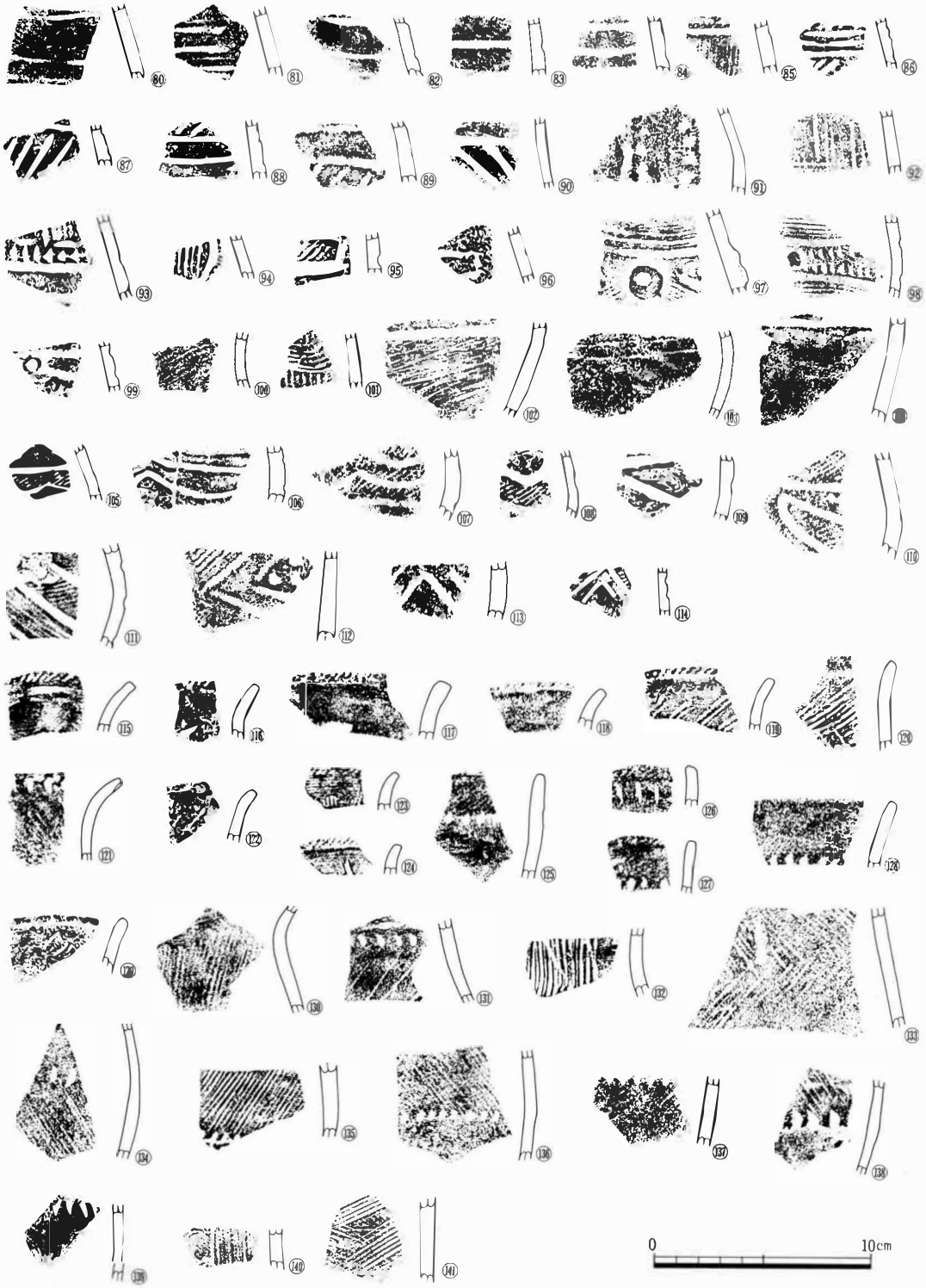


図34　検出面出土弥生式土器拓影②

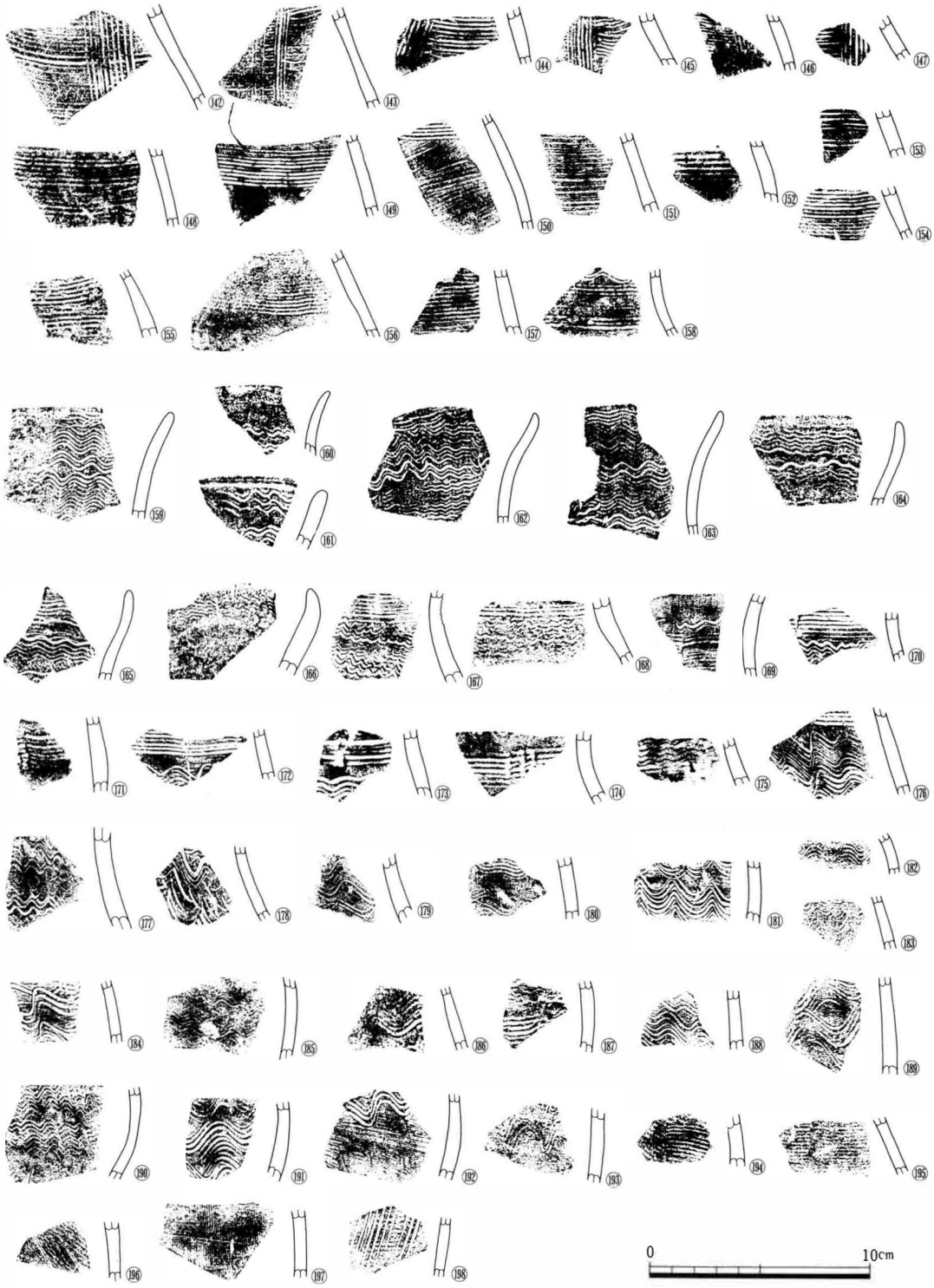


図35　検出面出土弥生式土器拓影③

刺突文と円形浮文を施し、⑨⑨は刺突文を充塡した弧文と棒状工具による刺突を施した円形浮文が認められる。

⑩⓪は縄文のみ認められ、⑩①は縦方向に直線文を施した後、横方向に施文されている。⑩②～⑩④は胴下半の破片で1～2本の箆描直線文が描かれ、⑩②は下半に荒い櫛描条痕をとどめている。⑩⑥～⑪⓪も胴下半の破片で円弧文が描かれ内部には縄文が充塡されている。⑪②⑪④は縄文地文上に重山形文が描かれ、⑪①は重三角文、⑪②は幾何学文が描かれている。

34図⑪⑤～⑭①は栗林式の甕形土器破片である。⑪⑤⑫⑨は口縁部破片であるが⑪⑤⑫④は端部にて短く軽く外反する形態をとり、体部には櫛描羽状文を施文するものが多い。⑫⑨は櫛描横位羽状文が認められる。口唇部には縄文を施文するものが主体をなすが⑬①は箆による刻みが施されている。⑫⑤～⑫⑨は口縁部外面に縄文が施文され、その下端に棒もしくは箆状工具による刻みが施されるものである。口縁部が内湾ぎみに立ち上がる⑫⑤～⑫⑦と、緩やかに外反する⑫⑨⑫⑨の2形態が存在する。⑫⑤の口縁部は折り返し状を呈するが、他のものはいずれも明確ではない。また⑫⑨は縄文のみが認められる。口唇部は確認できるものはいずれも縄文が施されている。

⑬⓪～⑬③は頸部から胴上半部にかけての破片で、横方向の櫛描羽状文が描かれる⑫⑨⑬①⑬③と櫛描T字文的な文様の⑬②とがある。⑬④～⑬⑨は胴中位から下位にかけての破片で、上半の櫛描羽状文施文部分は成形時の接合によってか一段肥厚し、その部分にいずれも棒または箆状工具による刻みを施している。

図35⑭②～⑲⑧は後期箱清水式期のもので、⑭②～⑮⑧は壺形土器の頸部から胴上半部にかけての破片である。⑭②～⑭⑦は櫛描直線文を櫛で縦に切った文様であるいわゆるT字文が認められ、⑭⑧～⑮⑦は櫛描直線文が認められるものである。⑮⑧は直線文の上に波状文が一帯確認できる。

⑮⑨～⑲⑧は甕形土器で⑮⑨～⑯⑥は口縁部破片である。単純に外反して終る⑮⑨～⑯①と端部にて若干内湾ぎみに立ち上がる⑯②～⑩⑥の2形態が存在する。⑯⑦～⑰⑥は頸部付近の破片で簾状文ならびに波状文が施文されている。⑰⑦～⑲③は波状文が施文された胴部破片、⑲⑧は櫛描条痕が施された胴部破片である。⑲④～⑲⑦はハケ整形痕を残しており、あるいは古墳時代のものかもしれない。

第５節　古墳時代の遺構と遺物

当該期のものと比定するのは、住居址だけの遺構で、その数は最も多く15軒にのぼる。古墳時代前期にあたる遺物がピット24より出土しているが、このピットは周辺のものと形態・覆土等に相違が認められないのでこの土器と共伴しないものであろう。住居址は全て古墳時代後半から末葉に比定される。しかし重複関係にある住居址が８軒あり同時存在のものでない。

２号住居址

遺構　（図36）

Ｉ区の北端にある。１号・３号住居址と重複し、この住居址は１号より古く、３号より新しい。調査では１号との新旧関係が明確にならず、２号住居址の床面からの追及を先行してしまったため、調査順序が逆になってしまった。さて検出した部分は、南東隅付近の４分の１程にすぎない。形態は隅丸方形を呈するものと思われる。掘り込みは垂直に近く南壁35cm・東壁37cmを測る。床面は平坦で外縁近くまで貼り床が施され堅緻である。柱穴は１個確認され、最大幅85cmで、深さ34cmのもので、内に径37cm・深さ29cmと径約25cm・深さ21cmの柱痕ピットがある。前者が主柱痕で、後者は支柱痕であろう。周溝は北壁下に認められ、平均幅25cm・深さ５～８cmの

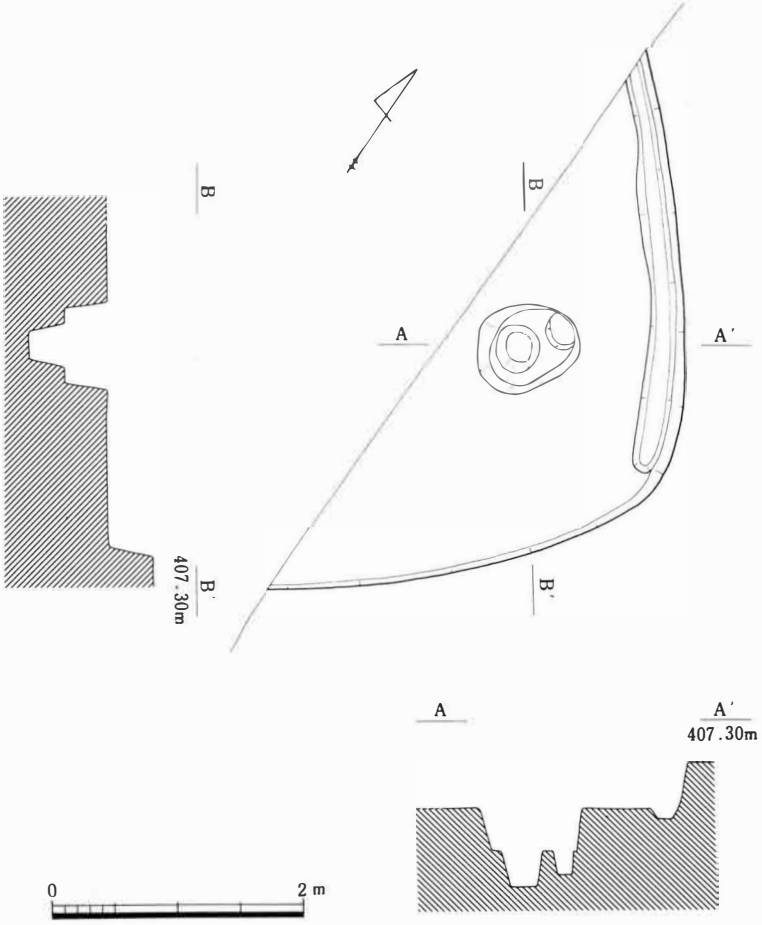


図36　２号住居址実測図

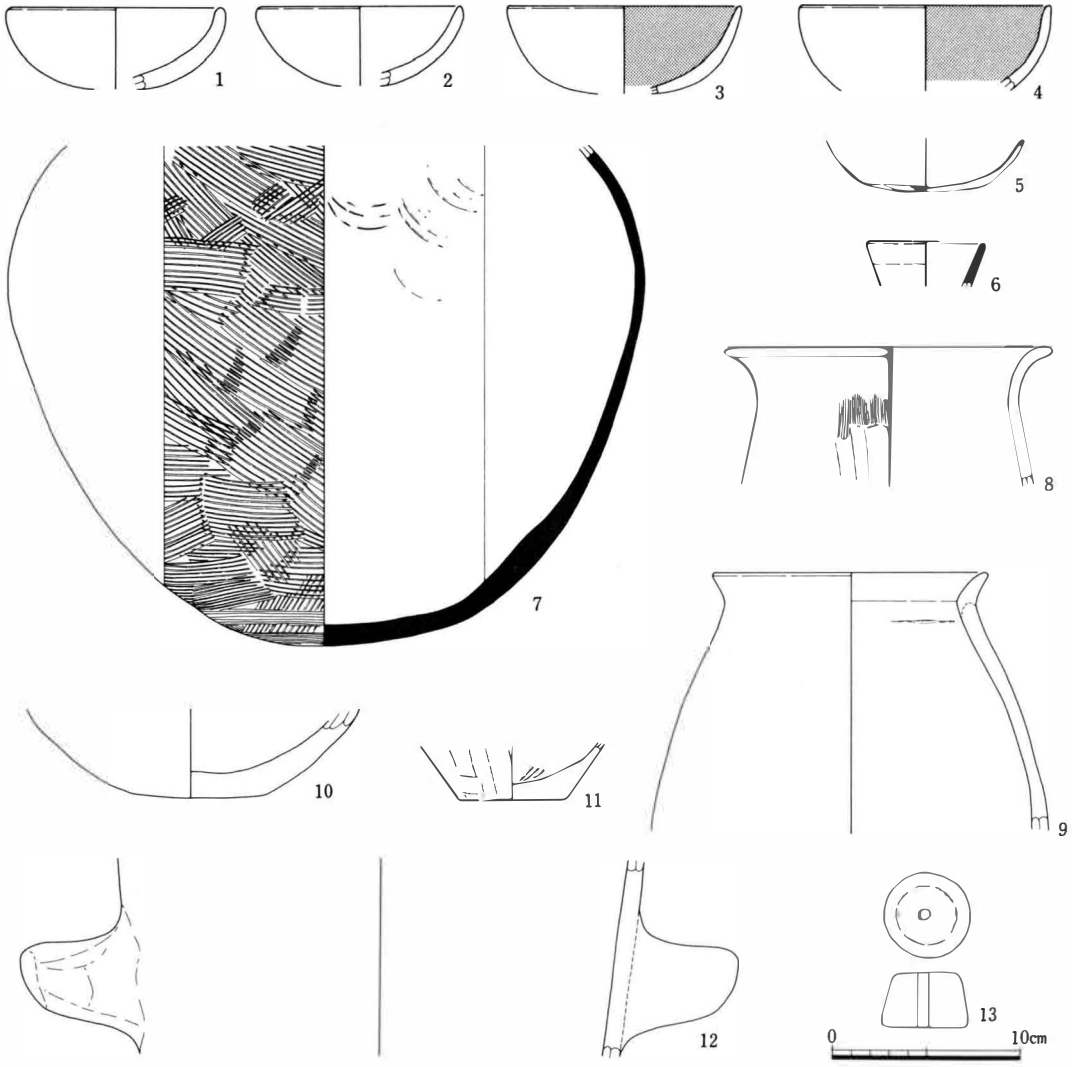


図37　2号住居址出土土器実測図

ものである。カマドは北壁の未調査区域境より焼土の痕跡が認められこの付近を予想する。この推定が正しければ、一辺が8mに近い大形住居址になる。

遺物　(図37)

土師器坏・甕・甑、須恵器細口壺・甕、土製紡錘車等が出土している。(1)～(5)は土師器坏で、いずれも坏部は底部より内湾ぎみに立ち上がり半球形を呈している。(1)(2)はともに磨耗が著しく詳細は不明であるが、内外面ともヘラミガキにより調整されているようである。(3)は口縁部外面は横方向、坏部はヘラケズリ後に斜方向のヘラミガキが行われ、底部もヘラミガキで仕上げられている。内面は全体に雑なヘラミガキ後黒色処理される。(4)も調整は(3)と同様であるが内面はて

表5　2号住居址出土土器観察表

番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存度	成形・調整	備考
1	土師	坏	11.2			1/5	外面：ヘラミガキ　内面：ヘラミガキ	
2	〃	坏	10.6			1/6	外面：磨耗　内面：ヘラミガキ	
3	〃	坏	12.3			3/5	外面：ヘラケズリ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ→黒色処理	
4	〃	坏	13.3			1/6	外面：ヘラケズリ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ→黒色処理	
5	〃	坏		5.1		1/4	外面：ヘラケズリ→ヘラミガキ　底部：ヘラケズリ 内面：ヘラミガキ	
6	須恵	細口壺	6.4			1/3	ロクロナデ	
7	〃	甕				3/4	外面：平行タタキ　内面：青海波→ナデ	
8	土師	甕	17.4			1/6	外面口縁部：ヨコナデ　胴部：ハケ→ヘラケズリ 内面：ナデ	
9	〃	甕	14.9			1/5	外面口縁部：ヨコナデ　胴部：ヘラミガキ 内面：磨耗	
10	〃	甕		7.1		1/4	外面：ヘラケズリ　内面：ナデ	
11	〃	甕		5.7		1/2	外面：ヘラケズリ　底部：木葉痕 内面：ナデ	
12	〃	甑					外面：ヘラミガキ　内面：ヘラミガキ	

いねいなヘラミガキがなされ黒色処理される。(5)も土師器坏であるが器壁は非常に薄く仕上げられる。坏部外面はヘラケズリ後横ヘラミガキがなされ、底部は不定方向のヘラケズリによって仕上げられ、やや不安定な平底を呈する。内面は全体にていねいなヘラミガキがなされている。

(6)は須恵器細頸壺の口縁部破片と思われる。直線的に外開し端部は丸く終る形態をとり、内外面ともロクロナデされる。(7)は須恵器の甕でやや肩の張る球形胴をなし、底部も丸底を呈する。外面は平行タタキを施すが肩部付近と胴下半には格子目状に施し、また底部付近にはタタキ後間隔をおいて2帯のカキメが施されている。内面は全体にていねいなナデ整形がなされるが、胴上半には部分的に青海波文の痕跡が残される。

(8)～(10)は甕形土器である。(8)は口縁部が短く強く外反する長胴甕で、口縁部外面は強く横ナデされ胴部はハケ整形後、縦方向のヘラケズリがなされる。(9)は口縁部がくの字状に短く外反する形態をとり、最大径は胴部に有する。外面には縦方向のていねいなヘラミガキがなされている。(11)は底部破片で、底部には木葉痕を残している。外面はヘラケズリされ、内面はヘラによる平滑化後ていねいにナデ整形されている。(12)は甑の把手部分の破片で、把手は体部成形後貼り付けられている。内外面ともていねいなヘラミガキがなされる。

(13)は土製紡錘車で中央に焼成前の穿孔がなされ、全体にていねいなナデ整形がなされている。最大径4.6cm、厚さ2.9cm、重量65.5gを測る。

3号住居址

遺構　（図38）

Ⅰ区の北側住居址群の一つで2号住居址と重複し、西側の一部はこの住居址によって切り込まれる。形態は西壁が幾分開き気味になるものの隅丸方形を呈する。調査ではカマドの痕跡が認められなかったことから北壁に構築された可能性が強い。規模は東西間の最大幅3.98mになり、主軸方向は東壁からN—45°—Wを推定する。床面は貼り床が施され堅緻でほぼ平坦である。主柱穴は3個確認され、P1は径30cm・深さ28cm、P2は径24cm・深さ22cm、P3は径25cm・深さ6cmを測るもので、内に径10cm程の柱痕ピットをそれぞれ有している。四本柱方形配列の住居址であろう。また何のための施設か理解できないが、隅丸長方形を呈す土壙状のピット（P4）がある。

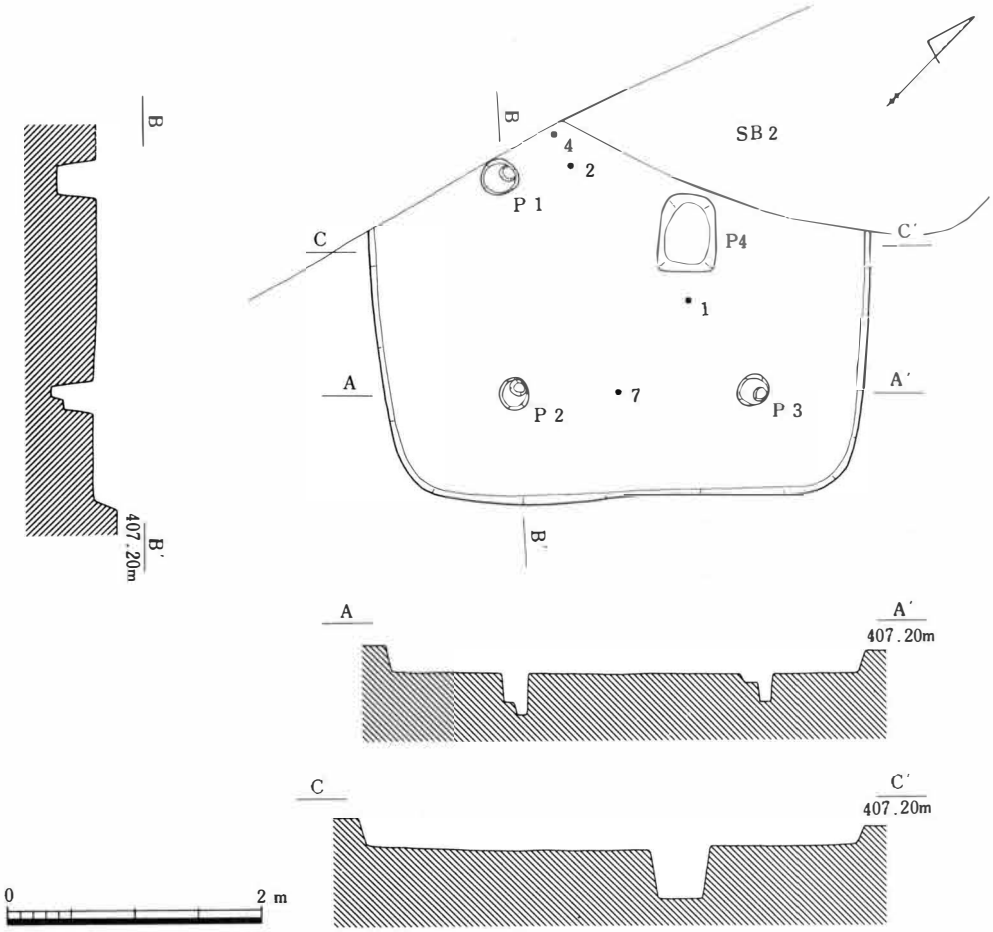


図38　3号住居址実測図

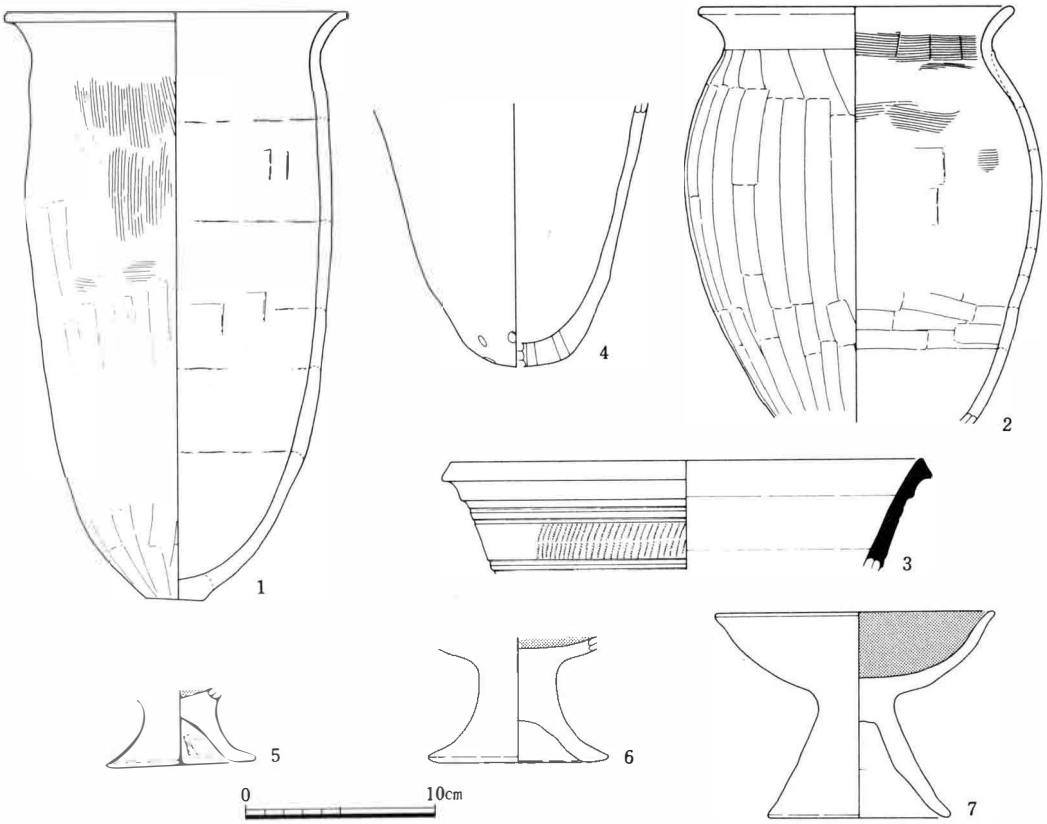


図39　3号住居址出土土器実測図

Ｐ２とＰ３の間で、Ｐ２の近くから拳大の自然礫が17個集中して出土した。従来から説かれている俵等編用のコモデ石であろう。

遺物　（図39）

土師器の甕・甑・高坏、須恵器の甕形土器が出土している。(1)(2)はともに土師器の長胴甕である。(1)は口縁部が緩やかに外反し端部で丸く肥厚する形態をとり、口縁部に最大径をもつ。胴部は胴上位でわずかに張りを持つがほとんど直線的に底部へ収約してゆく形態をとる。底部は小さな平底をなし木葉痕をとどめる。口縁部内外面はともに横ナデ整形される。外面胴上半は縦方向のハケ整形後ヘラケズリされ、その後棒状工具によって縦方向に雑に掻きとられたような痕跡を残す。胴中位には横方向のハケも認められ、また胴下半は主として縦ヘラケズリがなされる。胴部内面は主として横方向のヘラによる平滑化がなされ、その後比較的ていねいにナデ整形されている。

(2)は胴部上位が強く張り出しこの部分に最大径をもつ。口縁部は頸部から短くくの字状に外反し、端部は丸く肥厚して終る。口縁部外面は強く横ナデされ胴部は縦方向のヘラケズリによって調整されている。内面は口縁部から頸部にかけては横ハケ後ナデられ、胴上半はヘラによる平滑

化後ていねいにナデられている。また胴下半の粘土帯接合部付近を中心に横方向のヘラケズリがなされている。(3)は須恵器の甕で、口縁部は直線的に外開し端部は断面三角形状を呈する。口頸部間には上下を2本の沈線によって区画した中に、櫛状工具による刺突を上下2段に施している。内外面ともに自然釉が付着している。

(4)は多孔の甑である。胴部外面はヘラケズリ後斜めから縦方向のていねいなヘラミガキを施し底部は丸く仕上げられている。内面も底部付近を除いてナデ整形後、比較的ていねいなヘラミガキがなされる。底部は一部を欠損するが現状では6個の穿孔が確認される。

(5)～(7)は土師器の高坏で、坏部内面はいずれもヘラミガキされ黒色処理されている。(5)の脚部は短くハの字状に開き、端部は水平に伸びる形態をとる。外面はヘラミガキされ、内面はヘラケズリ後ナデ整形される。(6)も(5)と同様の脚部形態をとるが上半は中実でやや長く立ち上がる。(7)は坏部は椀状に立ち上がり、口縁端部で若干外反する形態をとり、脚部はハの字状に直線的に外開する形態をとる。外面は坏部、脚部とも縦方向の細くていねいなヘラミガキが施されている。

表6　3号住居址出土土器観察表

番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存度	成形・調整	備考
1	土師	甕	18.4	3.1	31.1	完	外面口縁部：ヨコナデ　胴部：ハケ→ヘラケズリ 内面口縁部：ヨコナデ　胴部：ヘラによる平滑化→ナデ	床
2	〃	甕	16.7			5/6	外面口縁部：ヨコナデ　胴部：ヘラケズリ 口縁部：ヨコハケ→ナデ　胴部：ハケ、ヘラ平滑化、ケズリ、ナデ	床
3	須恵	甕	24.9			1/4	ロクロナデ	
4	土師	甑				5/6	外面：ヘラケズリ→ヘラミガキ 内面：ナデ→軽いヘラミガキ	床
5	〃	高坏		8.0		完	脚外面：ヘラミガキ？　脚内面：ヘラケズリ→ナデ 坏内面：ヘラミガキ→黒色処理	
6	〃	高坏		9.6		完	脚外面：ヘラミガキ　脚内面：ヘラケズリ→ナデ 坏内面：ヘラミガキ→黒色処理　坏外面：ヘラミガキ	
7	〃	高坏	14.7	9.6	10.4	完	坏外面：ヘラミガキ　坏内面：ヘラミガキ→黒色処理 脚外面：ヘラミガキ　脚内面：ヘラケズリ→ナデ	床

6号住居址

遺構　(図41)

I区の中央から単独で検出されたが、西側の半分程は調査地域外にある。基本形態は隅丸方形になるものと思われるが、西壁は内屈し不整なものになる。南北間の最大幅は3.6mになる。掘り込みは北壁39cm・南壁37cm・東壁28cmを測る。床面は平坦であるが通常見られる状態とやや趣を異にしており、掘り込み時のままの感を受け地山に含まれる礫が顔を出している。南東隅に長軸100cm・短軸80cm・深さ15cm程の落ち込みが認められ中に柱穴様のピットがある。他の施設は調査からは検出されなかった。

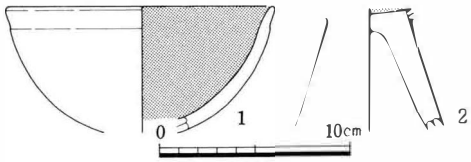


図40　6号住居址出土土器実測図

遺物　(図40)

土師器の坏ならびに高坏形土器が出土している。(1)は坏形土器で、体部は底部から内湾ぎみに立ち上がり口縁部は強く横ナデされることによって厚さを減じ若干外反する形態をとる。外面口縁部は横ナデ後軽い横ヘラミガキが加えられ、体部はヘラケズリ後横もしくは斜方向のヘラミガキが行われる。口縁部と体部との境には緩やかな稜が形成されている。内面は横方向のかなり雑なヘラミガキが加えられ、黒色処理される。

(2)は高坏で坏部と脚端部を欠損するが、脚部はハの字状に直線的に外開する形態をとる。坏部内底面はていねいなヘラミガキがなされ黒色処理されている。脚部外面は縦方向の細くていねいなヘラミガキがなされ、内面は箆による平滑化後全体にナデ整形されている。

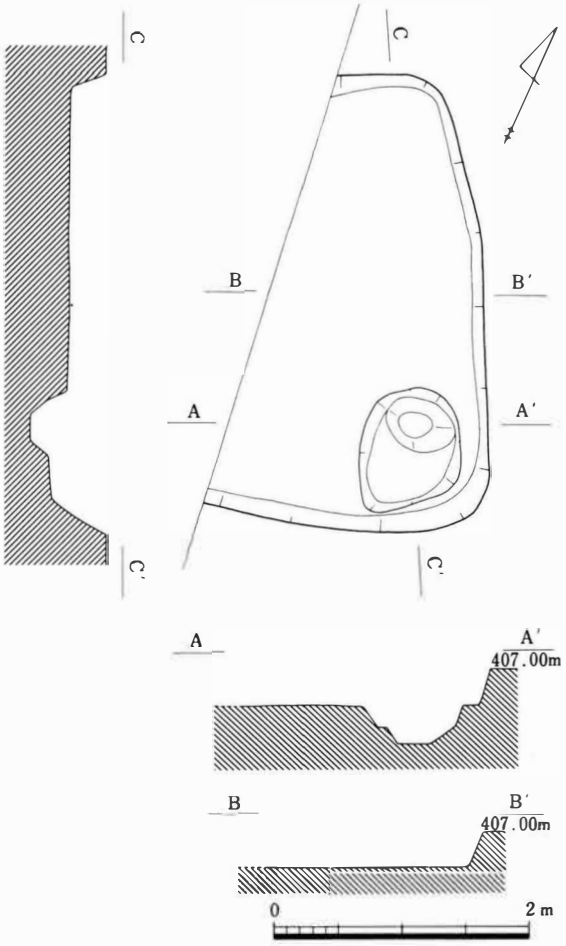


図41　6号住居址実測図

表7　6号住居址出土土器観察表

番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存度	成形・調整	備考
1	土師	椀	14.2			1/3	外面口縁部：ヨコナデ→軽いヘラミガキ　体部：ヘラケズリ→ヘラミガキ　内面：ヨコヘラミガキ→黒色処理	
2	土師	高坏				4/5	坏内面：ヘラミガキ→黒色処理 脚外面：縦ヘラミガキ　内面→ナデ	

8号住居址

遺構　(図42)

Ⅰ区の南側に位置する住居址で、北西隅付近4分の1程を検出したにすぎない。検出面での形態は北壁と西壁の交点は鋭角を呈する。下端では直角に近くなり、最終形態は隅丸方形になるものと予想する。規模等の詳細は不明であるが、検出した北壁の東端に焼土が認められ、これをカマドと想定すれば一辺が6m内外になるものと思われる。掘り込みは北壁42cm・西壁33cmになる。

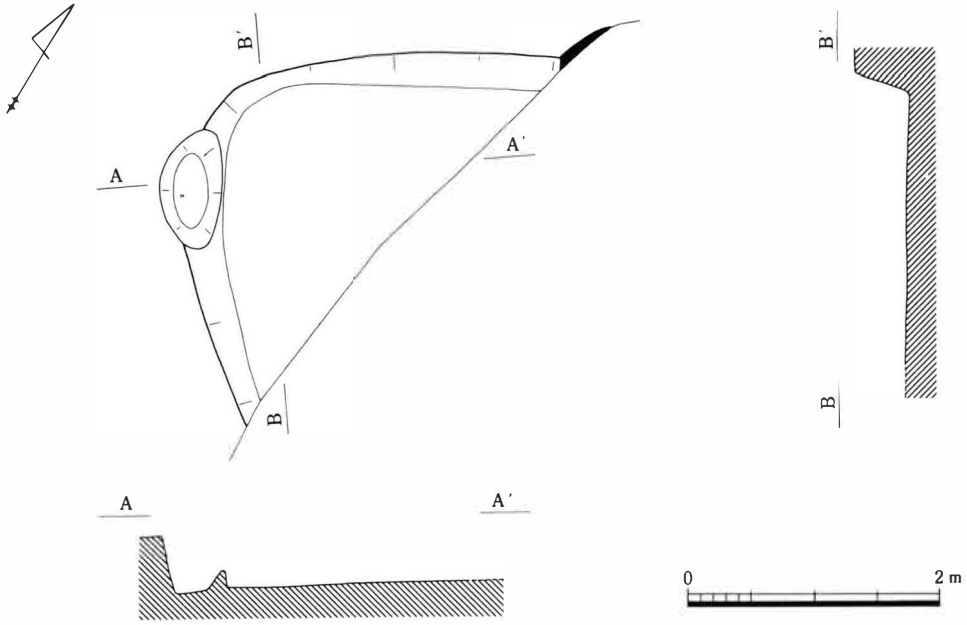


図42　8号住居址実測図

しかし西壁においては弥生時代の土器集中遺構の記述の中でも触れたが、この数値に15cm上積みし48cm以上の壁高が考えられる。床面は平坦であるが軟弱である。柱穴は認められなかった。尚、西壁を切り込んで土壙状の遺構がある。これは本住居址に付属するものか別時期のものか調査からその結果は得られなかった。長軸98cm・短軸50cm・深さ47cmの規模になる。

遺物　(図43)

土師器坏・甕・甑、須恵器高坏形土器が出土している。(1)～(3)は土師器坏で、(1)は底部から内湾ぎみに立ち上がる形態をとる。外面には雑な、内面には比較的ていねいなヘラミガキがなされている。(2)は内湾ぎみに立ち上がった体部が口縁部でさらに内湾し、坏というよりは小型の甕といった形態をとる。内外面とも磨耗が著しく詳細は不明である。(3)は外面口

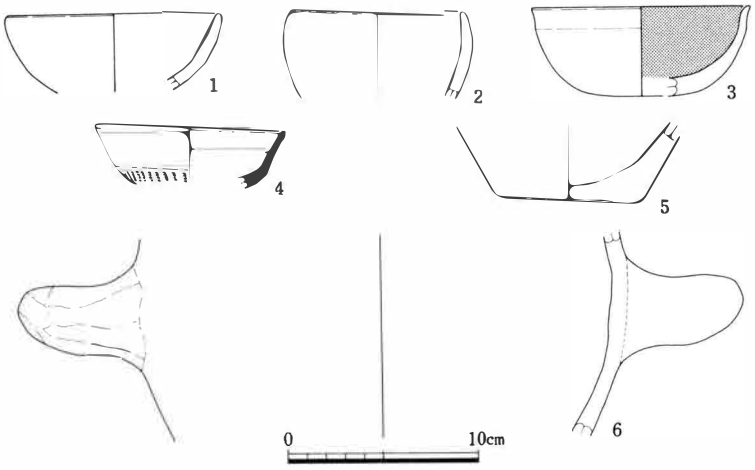


図43　8号住居址出土土器実測図

表8　8号住居址出土土器観察表

番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存度	成形・調整	備考
1	土師	坏	11.4			1/8	外面：ヘラミガキ　内面：ヘラミガキ	
2	〃	坏	9.1			1/3	磨耗著しく不明	
3	〃	坏	11.6	6.5	4.7	1/5	外面口縁部：ヨコナデ　体部：ヘラケズリ→ヘラミガキ 底部：ヘラケズリ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	
4	須恵	高坏	10.0			1/4	ロクロナデ	
5	土師	甕		7.6		1/5	外面：ヘラケズリ→ナデ　内面：ヘラミガキ	底部に木葉痕有
6	〃	甑					外面：ヘラミガキ　内面：ヘラミガキ	

縁部は強く横ナデされ若干外反する。体部はヘラケズリ後雑なヘラミガキがなされ、底部付近はヘラケズリのみなされている。口縁部と体部との境は緩やかな稜を形成する。内面は横方向の軽いヘラミガキがなされ黒色処理される。

(4)は須恵器の小型高坏と思われる。口縁部は坏部中位に明確な稜をなして立ち上がり、口縁端部は尖り気味に終っている。内外面ともロクロナデされ、また外面下半は4本一組の櫛状工具による右まわりの刺突文が施されている。

(5)は土師器の甕形土器で外面は雑なヘラケズリ後ナデ整形され、底面には木葉痕を残している。内面にはヘラミガキが加えられている。(6)は甑で内外面とていねいにヘラミガキされる。把手は体部成形後に貼りつけられたもので、ヘラケズリ的な雑なヘラミガキが加えられている。

10号住居址

遺構　(図44)

Ⅰ区の南端にあり、これも北東隅付近4分の1程を調査したにすぎない。規模等は不明であるが、(隅丸) 方形を呈する形態になるものと思われる。掘り込みは北壁29cm・東壁34cmを測り、床面は平坦であるが東へ傾斜する。この床面上には木炭化したものは認められなかったが炭化物及び焼土が5cm程の厚さをもって全面に覆っており、火災による廃棄が予想される。柱穴やカマドは確認できなかった。北東隅付近より石臼の半欠が中に自然円礫を入れ正位の状態で出土している。

遺物　(図45)

土師器の坏・甕・鉢形土器が出土している。(1)～(6)は坏であるが形態から、坏部中位に明確な稜をなして口縁部が立ち上がる(1)～(3)、坏部中位の稜が不明瞭な(4)(5)、坏部内面に稜を形成して口縁部が外反する(6)に大別できる。(1)(2)はともに坏部中位に明確な稜を形成して口縁部が鋭く外

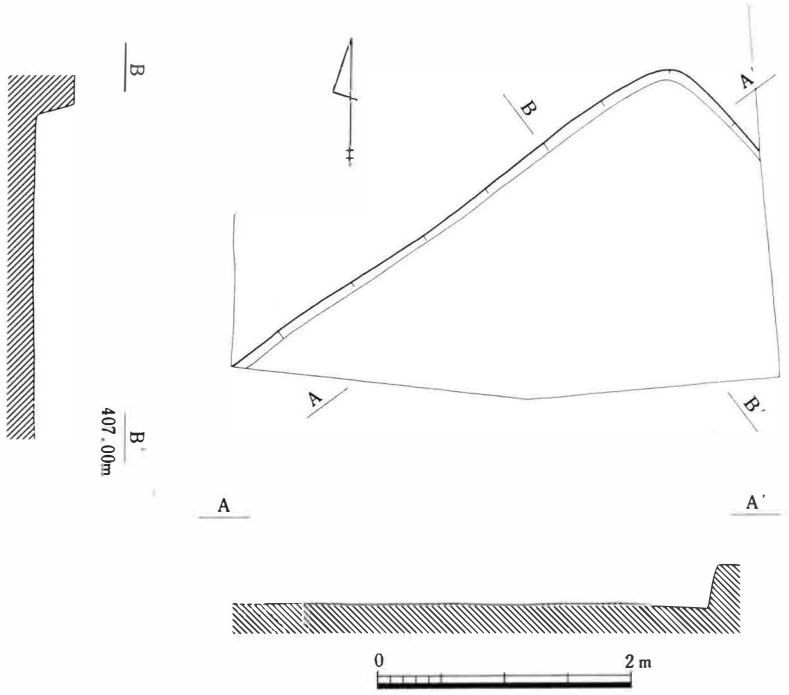


図44　10号住居址実測図

反する。口縁部には強い横ナデが施され、体部から底部にかけては不定方向のヘラケズリで整形される。内面はともにナデ整形と思われる。(3)は坏部上位に稜を有し口縁部は短く外反する。やや厚手の作りで外面体部にはヘラケズリ後ヘラミガキが加えられ、内面は全体にナデ整形されている。

(4)(5)は坏中位に明確な稜を形成せぬものであるが、(4)は口縁部がやや鋭く外反する形態をとる。

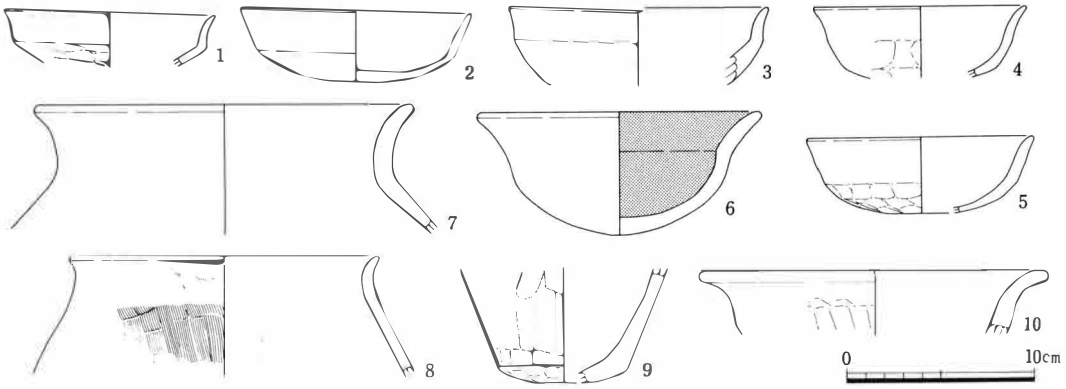


図45　10号住居址出土土器実測図

表9　10号住居址出土土器観察表

番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存度	成形・調整	備考
1	土師	坏	11.2			1/5	外面口縁部：強いヨコナデ　体部：ヘラケズリ 内面：ヨコナデ	
2	〃	坏	12.2	5.5	3.8	1/2	外面口縁部：ヨコナデ　体部：ヘラケズリ 内部：ヨコナデ	
3	〃	坏	13.8			1/8	外面口縁部：ヨコナデ　体部：ヘラケズリ→ヘラミガキ 内面：ヨコナデ	
4	〃	坏	11.4	(5.5)	(3.7)	1/8	外面口縁部：ヨコナデ→ミガキ　体部：ヘラケズリ 内面口縁部：ヨコナデ→ミガキ　体部：ヘラミガキ	
5	〃	坏	12.2	(5.1)	(4.9)	1/2	外面口縁郎：ヨコナデ　体部：ヘラケズリ→ミガキ 内面：ヘラミガキ	
6	〃	坏	15.1		6.4	1/4	外面体部：ヘラケズリ→ヘラミガキ 内面：ハケ→ヘラミガキ→黒色処理	
7	〃	甕	20.1			1/3	外面：ヨコナデ　内面：ナデ	
8	〃	甕	16.4			1/8	外面口縁部：ハケ→ヨコナデ　胴部：斜or縦ハケ 内面：ヨコナデ	
9	〃	甕		7.0		1/6	外面：ケズリ 内面：ナデ	
10	〃	鉢	18.6			1/8	外面口縁部：ヨコナデ　体部：ヘラケズリ 内面：ヨコナデ	

外面口縁部は強いヨコナデ後軽いヘラミガキが施され、体部から底部にかけては不定方向のヘラケズリで整形されている。内面も口縁部は強いヨコナデ後軽いヘラミガキが加えられ、体部は不定方向の雑なヘラミガキがなされている。(5)は口縁部外面は横ナデ、体部から底部にかけてはヘラケズリされ比較的ていねいなヘラミガキがなされている。また内面は全体に横方向のヘラミガキがなされる。

(6)は内面に稜をなして口縁部が外反し、外面口縁部はヨコナデ、体部はヘラケズリ後ていねいなヘラミガキがなされ底部は丸底を呈する。内面はハケ整形後全体にヘラミガキがなされ、黒色処理される。

(7)～(9)は甕形土器である。(7)は口縁部はくの字状に大きく外反する形態をとり端部は丸く終る。口縁部はヨコナデされ、胴部は縦方向のヘラケズリ後ナデ整形される。内面もナデ整形である。(8)は口縁部が端部で短く外反する形態をとるもので、斜めもしくは縦方向のハケ整形後口縁部のみヨコナデされている。(9)は底部破片で外面は縦方向にヘラケズリされ、底部は雑なナデ整形、内面もナデ整形される。

(10)は鉢で口縁部は大きく外反し、端部は丸く終る。口縁部を横ナデした後体部に縦方向のヘラケズリが施されている。

12号住居址

遺構　(図46)

II区の東側に位置する。調査ではカマドを中心とする北壁部分のみ検出した。他は調査区域外

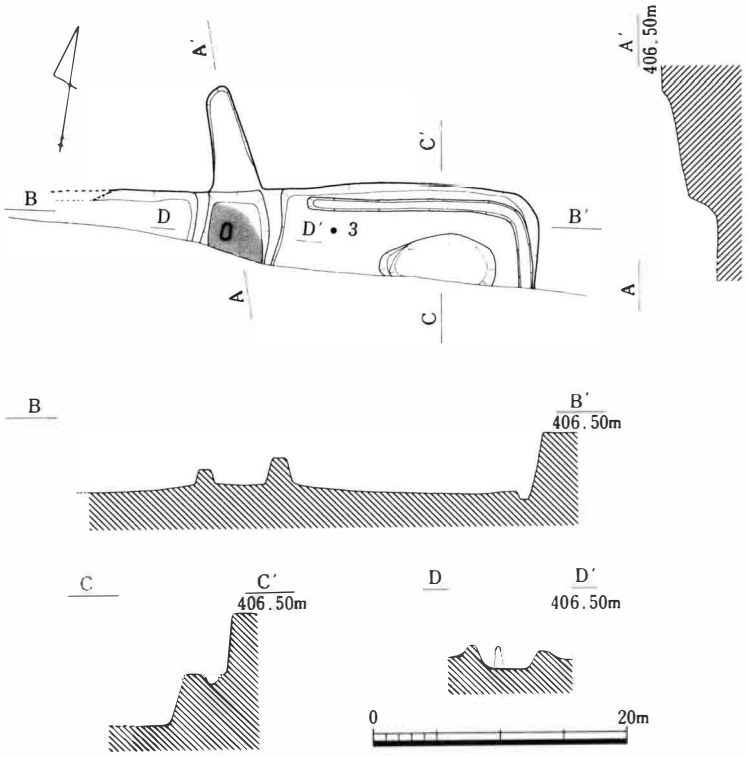


図46　12号住居址実測図

に延びる。形態は一辺が5m前後の規模になる隅丸方形を呈するものと思われる。掘り込みは北壁46cm・東壁48cmを測る比較的深い住居址である。検出した範囲内での床面は、カマド付近が高くその両壁に向かって軟弱で低くなる。カマドの右側の壁下には幅10cmで深さ7～14cmの周溝がめぐる。また北東隅付近には、長軸90cm・深さ44cmの貯蔵穴がある。カマドは北壁の中央に構築されているものと思われる。形態は粘土製両袖形のもので、燃焼部に石製の支脚が埋設され、その周辺は焼土で覆われていた。主体部の規模は不明であるが、焼成部内法は45cm程になる。煙道は傾斜を有しながら、また左傾して85cm突出した部分だけを確認した。煙道幅は中位で25cmを測る。カマド右から

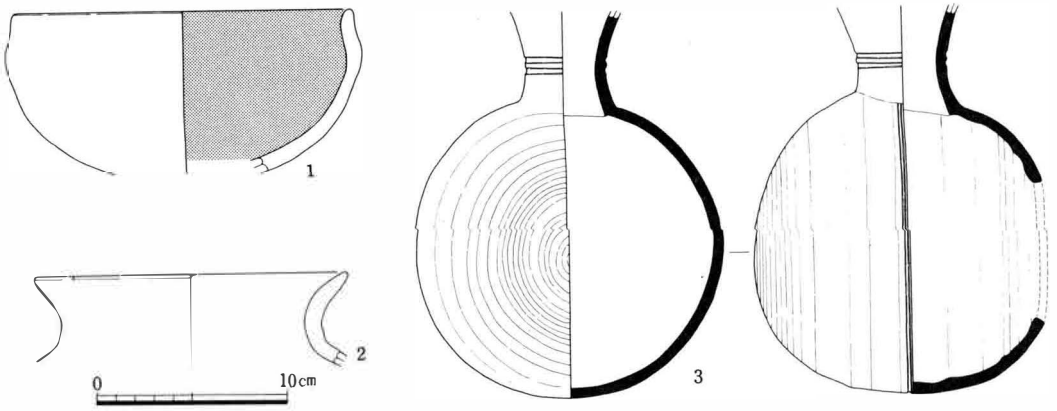


図47　12号住居址出土土器実測図

表10　12号住居址出土土器観察表

番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存度	成形・調整	備考
1	土師	鉢	17.8			1/4	外面口縁部：ヨコナデ→ヨコヘラミガキ　胴部：ヘラケズリ→ヘラミガキ　内面：ヘラミガキ	貯蔵穴
2	〃	甕	16.5			1/5	外面口縁部：ヨコナデ→縦ヘラミガキ 内面：ヨコヘラミガキ	
3	須恵	長頸瓶				1/5	体部外面：回転ヘラケズリ　内面：ロクロナデ 頸部：ロクロナデ	床

土師器甕片とともに須恵器フラスコ形瓶がほぼ正位状態で出土している。

遺物　(図47)

土師器鉢・甕形土器ならびに須恵器フラスコ形長頸瓶が出土している。(1)は土師器の鉢で、体部は底部より内湾しつつ立ち上がり口縁部は頸部より内傾し端部にて若干外反する。また端部は丸く終っている。外面口縁部は強い横ナデ、体部はヘラケズリされ、その後全体にていねいな横ヘラケズリが加えられる。口縁部と体部の境には明確な稜を残さない。内面は口縁部から体部上半にかけては横ヘラミガキ、体部下半には不定方向のヘラミガキが加えられ黒色処理される。

(2)は甕で、口縁部は頸部から短く強く外反する形態を呈する。口縁部は内外面とも強く横ナデされ、外面口縁部下半から頸部にかけてはその後縦方向の雑なヘラミガキが加えられる。内面は頸部下まで、全体にていねいな横ヘラミガキがなされている。

(3)はいわゆるフラスコ形長頸瓶で、口縁部と体部の一部を欠損する。残存高約20.5cm、体部径約16.3cmを測り、体部は球形に近い。頸部は内外面ともロクロナデされ、外面には2本の沈線が施される。体部との接合部は内面に鋭い稜を形成している。体部外面は全体に回転ヘラケズリで調整され、接合部付近には一本の沈線が施される。また内面には左まわりのロクロナデ痕が認められる。口縁部内外面ならびに体部には深緑色の自然釉が付着しているが、体部は片面にのみ認められる。

13号住居址

遺構　(図49)

II区の東端、III区の南端から検出されたもので、北西隅のみの部分であるため規模等は不明である。形態は方形を呈するものと思われる。掘り込みは43cmになる。尚、調査区域境にみられる深さ27cmの落ち込みは柱穴の可能性がある。

遺物　(図48)

(1)は土師器の小型甕であろうか。口縁部は緩やかに外反し端部は丸く終っている。外面にはやや雑な、そして内面には比較的

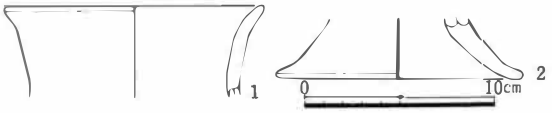


図48　13号住居址出土土器実測図

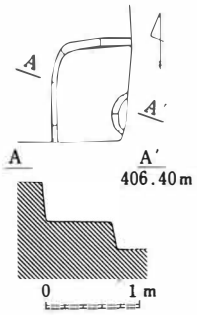


図49　13号住居址実測図

ていねいな横ヘラミガキが行われている。(2)は高坏脚部でやや大きく開く形態をとり、端部は丸く終る。磨耗が激しく詳細は不明だが、外面にはヘラミガキが加えられ、内面はナデ整形と思われる。

表11　13号住居址出土土器観察表

番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存度	成形・調整	備考
1	土師	甕	13.8			1/8	外面口縁部：ヨコナデ→軽いヨコヘラミガキ 内面：ヨコヘラミガキ	
2	〃	高坏		13.0		1/4	外面：ヘラミガキ　内面：ナデ	

14号住居址

遺構　(図50)

II区の南側にあり、南東隅は調査区域外にあるが、ほぼ全体を検出することができた。2号溝址を切り込んでいるが、カマドの両脇は大形のピットにより破壊を受けている。基本形態は隅丸方形が考えられるが、東西軸4.55mに対し、主軸（南北）の方が短い3.75mを測る変則的な住居址である。掘り込みは北壁23cm・南壁23cm・東壁24cm・西壁22cmと一定の数値になるが、東西間の床面は東へ傾斜する。南北間は平坦で、全体的に貼り床が施され堅緻である。主柱穴は位置からしてＰ２（径35cm・深さ24cm）とＰ３（径35cm・深さ10cm）が考えられ、４本方形配列になるものと思われる。Ｐ１（径53cm・深さ24cm）とＰ４（径37cm・深さ13cm)は内に柱痕様ピットを有しているが支柱穴であろう。

カマドは北壁の中央よりやや東側に構築される粘土製両袖形のものである。主体部の袖部約60cm、焚口部の内法34cmの規模になる。左袖部先端には袖石が埋設され、火床は５cm程凹み焚口部に焼土塊化して認められた他は、灰・焼土が堆積していた程度で明瞭でない。カマド内上面に甕が２個体横転した状態で出土している。そのためカマドの最終使用はこれら土器の下方、実測図中のＩ層上面ということになる。またカマド前面に床に接して高坏が、Ｐ２の右から凹石が出土した。このほか南西隅付近には工作台として使用したと思われる偏平自然石が確認されている。

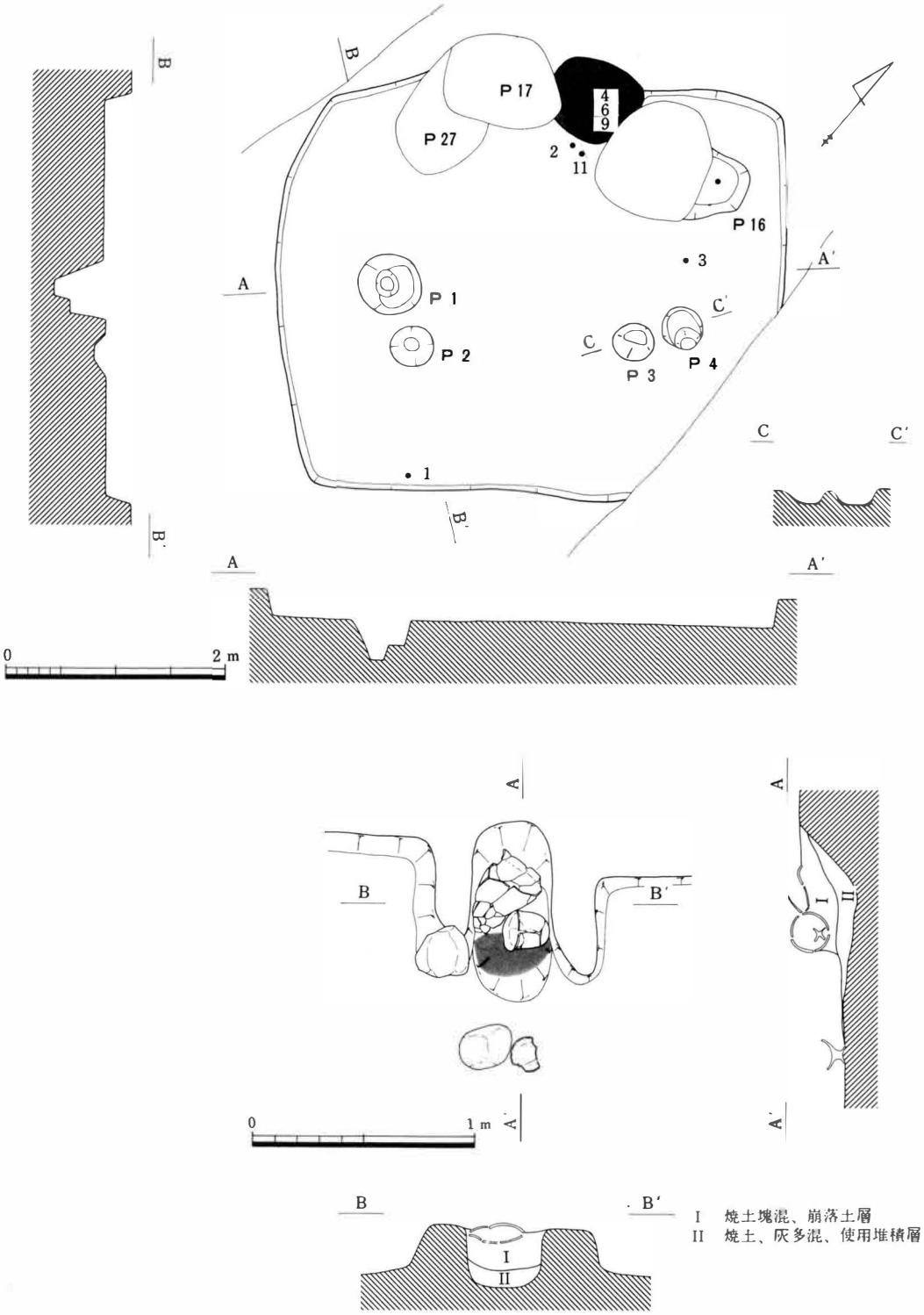


図50　14号住居址・同カマド実測図

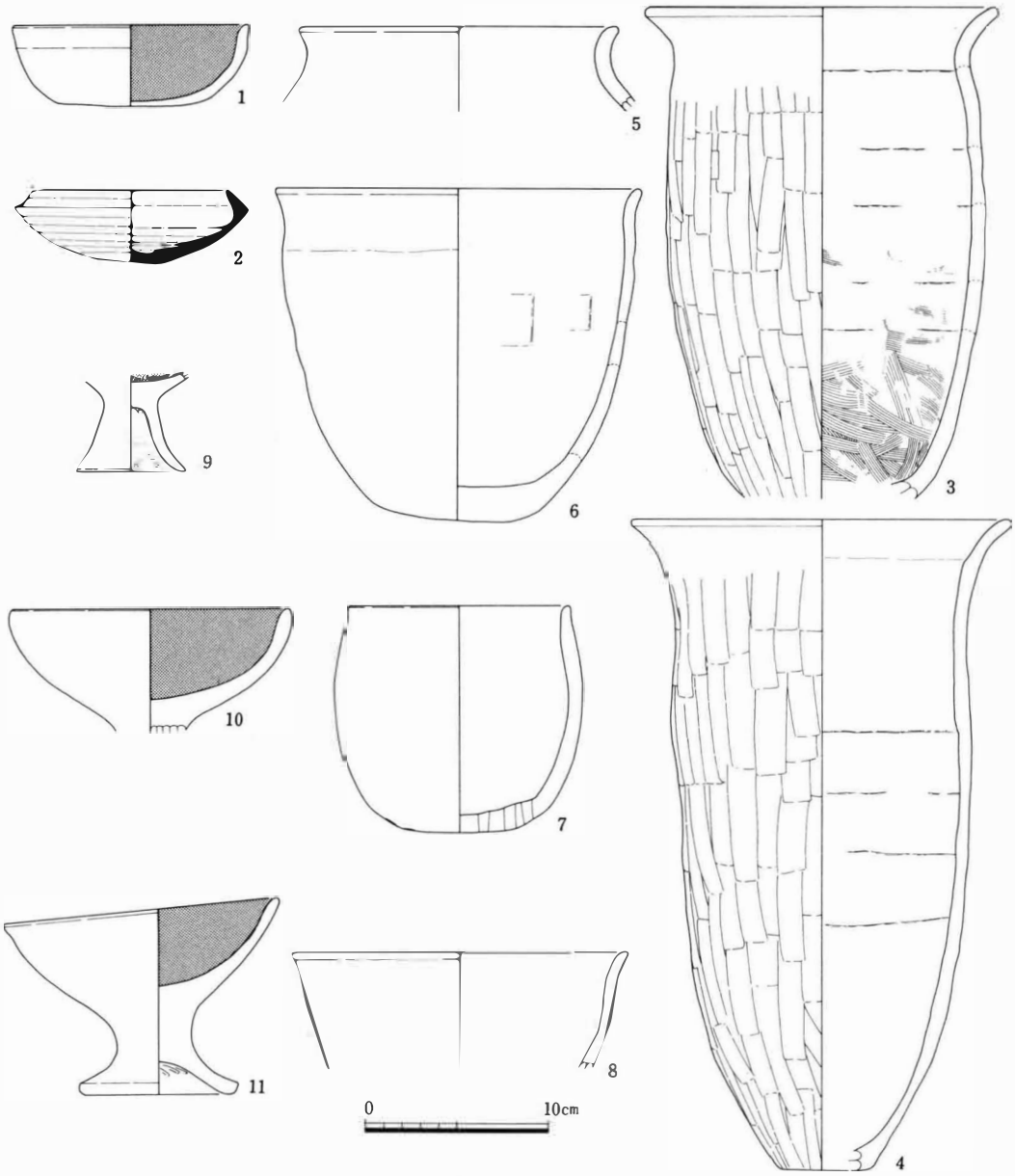


図51　14号住居址出土土器実測図

その一つは長辺40cm・短辺20cmの長方形のもので、もう一つは径20cm程の偏平円礫である。

遺物　(図51)

坏・甕・甑・鉢・高坏形土器が出土している。(1)は土師器の坏で、体部は内湾ぎみに立ち上がって端部に至る形態をとる。体部はヘラケズリ後主として横方向のヘラミガキがなされ、底部もヘラケズリされその後ヘラミガキされる。内面は全体に横方向のていねいなヘラミガキがなされ、

黒色処理される。(2)は須恵器の坏で、立ち上がりは内傾し端部は丸く終る。受部は若干上向きに外方へ伸びる。体部下端には左回りのヘラケズリが一帯なされ、また底部は一帯の回転ヘラケズリで調整されている。体部と底部の一部に薄い自然釉がかかっている。

(3)(4)は長胴甕である。(3)は口縁部がくの字状にやや強く外反し口縁部に最大径をもつ。胴部は胴上半から胴中位にかけてやや張りをもつ。口縁部は内外面とも強く横ナデされ、外面胴部はその後縦方向の密なヘラケズリがなされる。また頸部付近は胴部ヘラケズリ後さらに縦方向のヘラミガキが加えられ、口縁部と胴部との境には稜を残さない。内面胴上半から胴中位にかけてはヘラによる平滑化後ていねいなナデ整形がなされ、胴下半はハケ整形がなされている。内面には比較的顕著に粘土帯接合痕を残している。(4)も長胴甕であるが口縁部は緩やかに外反し口縁部に最大径をもつ。胴部は(3)に比較してほとんど張りをもたず、直線的に底部に収約する形態を呈する。口縁部は内外面ともに強い横ナデが行われ、内面はそのために頸部との境に段を生じる。胴部は頸部付近から全体に縦方向のヘラケズリがなされるが、頸部から下半にかけてはその後ヘラミガキが加えられる。底部付近は縦方向のヘラケズリがなされるのみである。胴部内面は全体にナデ整形されるが粘土帯接合痕を顕著に残す。

(5)は甕口縁部であるが、口縁部は短く立ち上がりつつ外反し最大径を胴部に有する。内外面ともナデ整形される。(6)は短胴の甕形土器で、口縁部は端部にて若干外反し胴部はさほど張りを持たずに底部へ収約する形態をとる。また底部は丸みをもった不安定な平底状を呈する。口縁部は内外面とも強いヨコナデが行われ、胴部外面はヘラケズリされその後比較的ていねいな縦もしくは斜方向のヘラミガキが加えられる。底部も不定方向のヘラミガキがなされ、ていねいに仕上げられている。胴部内面は横方向のヘラによる平滑化がなされ、その後ナデもしくは横方向のヘラミガキが加えられる。

(7)は甑で内湾ぎみに立ち上がった体部が口縁部で短く外反して終り、最大径は胴上位に有する。底部はやや丸みをもった不安定な平底を呈する。底部は多孔で現状では10個の穿孔が確認される。径は5～8㎜ぐらいでいずれも内から外へ穿孔されている。口縁部は横ナデされ、体部はヘラケズリ後縦もしくは斜方向の雑なヘラミガキがなされる。内面口縁部は横、胴部は斜めの雑なヘラミガキがなされている。(8)は鉢で口縁部に最大径をもつ。外面は剝落激しく詳細不明であるが内面は横方向のていねいなヘラミガキがなされている。

(9)～(11)は高坏で、(9)は脚部付近の破片である。脚部は端部に至ってハの字状にやや外反する形態をとり端部は丸く終る。外面は縦方向の細く密なヘラミガキがなされ内面は横ハケ後ナデ整形される。坏部内面は不定方向のていねいなヘラミガキがなされ黒色処理される。(10)は脚部を欠損するが坏部はやや厚手の作りで半球形を呈する。外面は口縁部から坏中位までは横方向に、坏下半は縦方向にていねいなヘラミガキがなされ、内面も主として横方向のヘラミガキがなされ黒色処理される。(11)は、坏部は口縁端部にて若干外反し脚部は短く端部にてハの字状に大きく外反す

表12　14号住居址出土土器観察表

番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存度	成形・調整	備考
1	土師	坏	12.9	8.2	4.9	4/5	外面口縁部：ヨコナデ　体部：ヘラケズリ→ヘラミガキ　底部：ヘラケズリ→ナデ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	
2	須恵	坏	10.8	3.7	4.0	4/5	外面：ロクロナデ　底部：回転ヘラケズリ 内面：ロクロナデ	カマド付近
3	土師	甕	19.6			4/5	外面口縁部：ヨコナデ　胴部：タテヘラケズリ 内面口縁部：ヨコナデ　胴部：ハケ→ナデ	床
4	〃	甕	21.0	4.7	36.0	9/10	外面口縁部：ヨコナデ　胴部：タテヘラケズリ 内面口縁部：ヨコナデ　胴部：ナデ	カマド
5	〃	甕	17.6			1/8	ヨコナデ	
6	〃	甕	20.1	(6.5)	18.3	完	外面口縁部：ヨコナデ　胴部：ヘラケズリ→ヘラミガキ 内面口縁部：ヨコナデ　胴部：ヘラナデ→ナデ	カマド
7	〃	甑	12.2	(6.1)	12.5	1/3	外面口縁部：ヨコナデ　胴部：ヘラケズリ→ヘラミガキ 底部：10孔有　内面：ヘラミガキ	床
8	〃	鉢	18.6			1/5	外面：不明　内面：ヨコヘラミガキ	カマド
9	〃	高坏	6.0			4/5	脚外面：タテヘラミガキ　脚内面：ハケ→ナデ 坏内面：ヘラミガキ→黒色処理	カマド
10	〃	高坏	15.1			3/5	外面：ヘラミガキ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	床
11	〃	高坏	15.2	8.1	10.3	9/5	坏外面：ヘラミガキ　坏内面：ヘラミガキ→黒色処理 脚外面：ヘラミガキ　脚内面：ナデ	カマド

る形態を呈する。脚端部は箆状工具により面とりされる。内外面とも雑なヘラミガキがなされ、坏内面は黒色処理される。また脚内面は箆による調整後ナデられる。

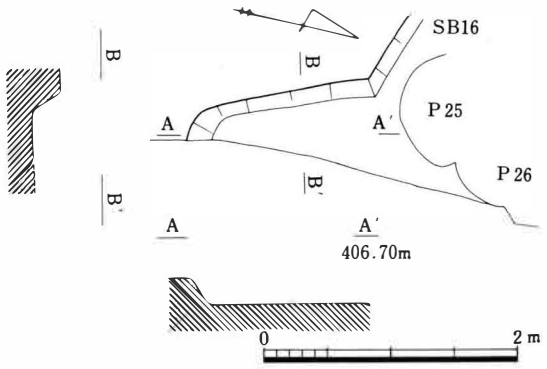


図52　15号住居址実測図

15号住居址

遺構　(図52)

III区中央に位置し、14号住居址の東側に隣接する。16号住居址と重複し、この住居址により北側を切り込まれ、また東側の大部分が調査区域外にあるため確認した所は南西隅のごくわずかである。そのため形態は方形を呈すると思われるほか詳細については不明である。西壁の掘り込みは23cmである。

遺物

実測可能な遺物は出土していない。

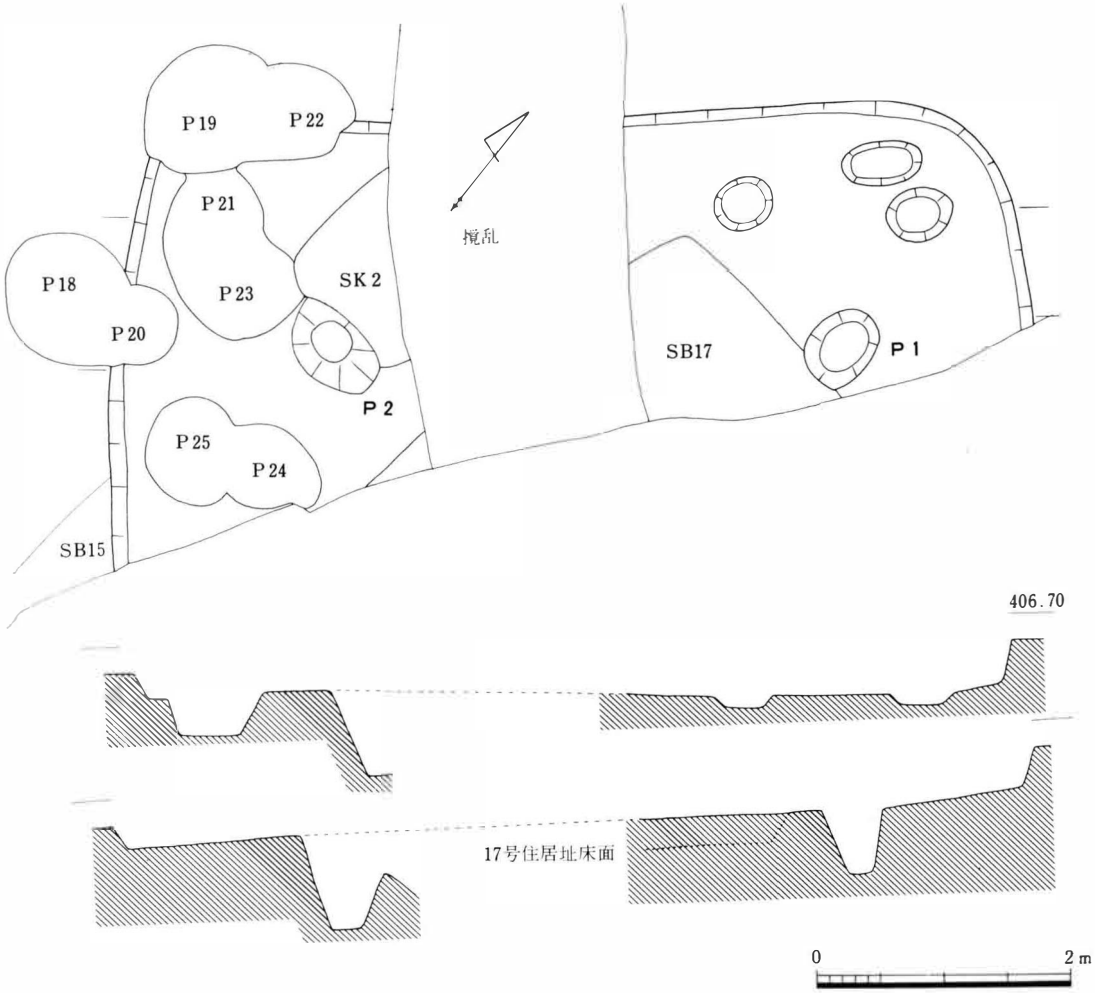


図53　16号住居址実測図

16号住居址

遺構　（図53）

III区北端に位置し、調査では西側の半分に満たない部分を検出した。しかし住居址中央部に排水管が埋設されて1.9mの幅で破壊を受け、更に南側はピット群・土壙により床面下まで掘り込まれている。また15号・17号住居址と重複関係にあり、15号より新しく、17号より古い。形態は隅丸方形を呈するものと思われ、その規模は南北間7.25mを測る大形の住居址である。床面は平坦であるが南壁から北壁にかけて10cm程差をもって傾斜する。掘り込みは南壁で16cm、北壁直下で24cmを測り、西壁は41cmになる。主柱穴はＰ１（最大幅65cm・深さ52cm）とＰ２（最大幅85cm・深さ67cm）が考えられる。多分４本柱方形配列になるであろう。カマドは確認されなかった。尚、西壁の軸線はN—21°—Eの方向になる。

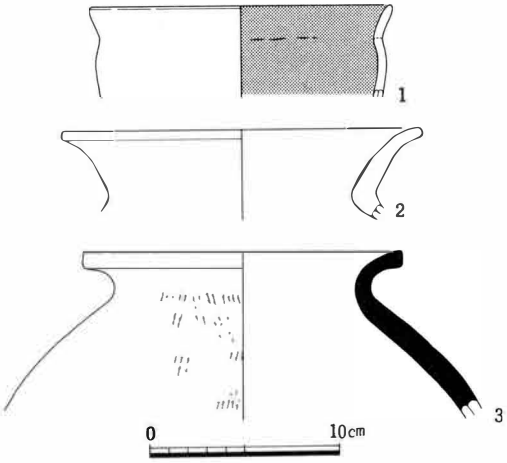


図54　16号住居址出土土器実測図

遺物　(図54)

土師器の鉢、甕形土器、須恵器の甕形土器が出土している。(1)は鉢で口縁部は頸部から緩やかなくの字状をなして外反し、端部は丸く終る。外面は横ナデ後ハケ状工具のようなものでナデつけられる。内面口縁部は斜めもしくは縦方向の荒いヘラミガキ、体部は横方向のヘラミガキがなされ黒色処理される。

(2)は土師器甕の口縁部で頸部からくの字状に鋭く外反し、口縁部は面とりされる。口縁部外面は縦方向の細くていねいなヘラミガキがなされ内面も横方向のヘラミガキがなされている。また内面頸部下には指頭による調整痕を顕著にとどめている。

(3)は須恵器の甕で口縁部はくの字状に強く短く外反し端部にて肥厚する。また口縁部は面とりされる。口縁部は内外面ともにロクロナデされるが、外面胴部は平行タタキ後ロクロナデされ内面胴部はユビナデされている。

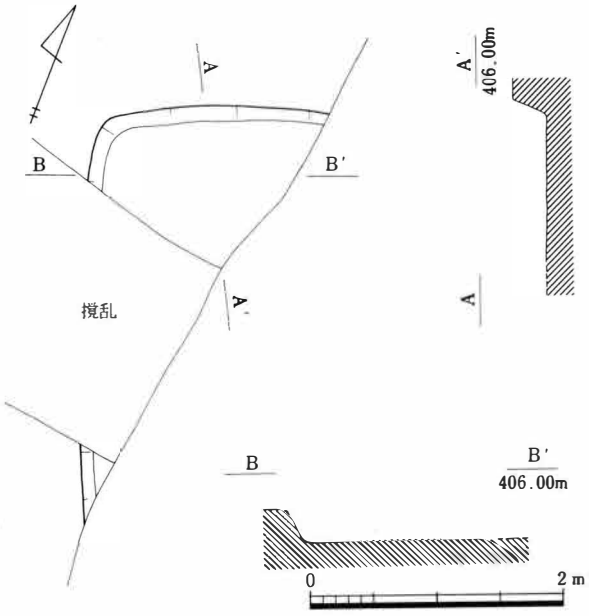


図55　17号住居址実測図

17号住居址

遺構　(図55)

III区の16号住居址検出中に発見された住居址である。形態は隅丸方形を呈するものと思われるが、その規模等は北西隅部の調査であったため不明である。16号住居址から本住居址の床面まで30cmを測り、両住居址とも年代にそれ程差が見い出せないので本来の壁高を60cm前後と推定する。床面は平坦で軟弱である。柱穴・カマド等の施設は確認されなかった。

遺物

実測可能な遺物は出土していない。

表13　16号住居址出土土器観察表

番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存度	成形・調整	備考
1	土師	鉢	16.0			1/8	外面：ナデ 内面口縁部：縦ヘラミガキ　体部：ヨコヘラミガキ→黒色処理	
2	〃	甕	19.1			1/3	外面：縦ヘラミガキ 内面：横ヘラミガキ	
3	須恵	甕	16.9			1/5	外面：平行タタキ→ナデ　内面口縁部：ロクロナデ 胴部：ナデ	

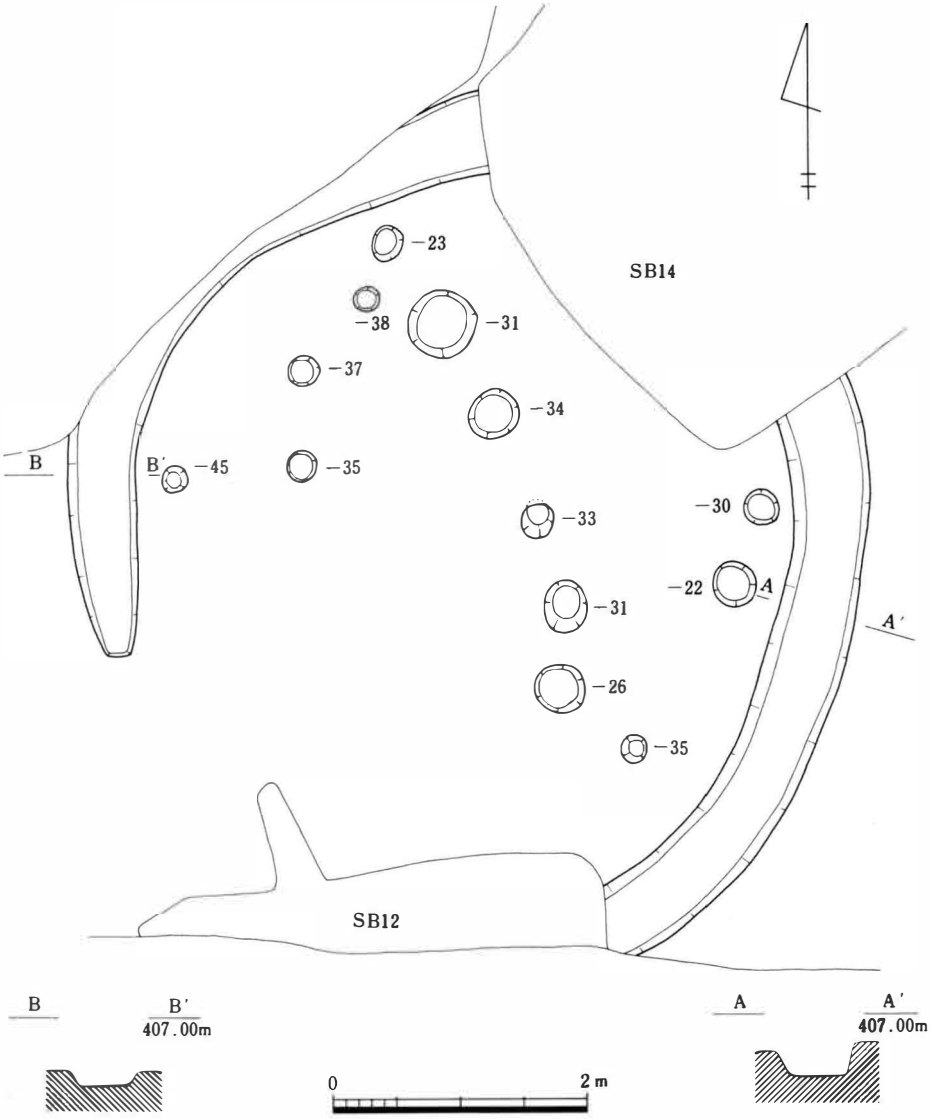


図56　2号溝址・ピット群実測図

2号溝址、ピット群

遺構　(図56)

II区とIII区との接合部にある。この溝址は円弧を描くが一周はしていなく、南西部で掘り込まれていない。いわば陸橋のある円形周溝といえよう。北からの溝は幅を減じつつ終結し、南側の終結は12号住居址内にある。溝址の内法は東西5.2mで、45°西に傾いたところでの内法は5.6mを測る。溝幅はほぼ一定しており55cm～60cmで、深さは北の終結部は12cmになり更に北上するに従い深くなり14号住居址付近では34cmになる。また南にいくにしたがって高くなって、14号住居址の南壁では20cmになり、12号住居址の東壁のところではまた深く39cmを測る。溝の形態はU字形で底面は平坦である。この溝址の時代認定には確固とした資料を得ていないため不安があるが、12号・14号住居址により切り込まれている点と、覆土から出土した土器のうちもっとも新しいものが古墳時代後期のものであったのでこの時期の所産と考えたい。

またこの溝址をとり囲むように13個の小ピット群が散在している。これらのピットには統一性がなく何の施設があったのか理解できない。ただこれらのピットは溝址内におさまっており、溝外にないことからこの溝址に関連ある遺構と考えている。

石器・玉類　(図57)

(1)は10号住居址床面より出土した石皿で、(2)の丸石と組み合わされた状態で出土しているが、(2)の表面には磨滅が認められず自然石に近い。(3)は3号住居址より出土した磨石であり、安山岩製である。

(4)は碧玉製管玉で13号住居址覆土より出土している。両端は欠損するがその後再研磨されている。現存長約1.4cmを測り、径2mmほどの穿孔がなされている。(5)は土製小玉で17号住居址覆土より出土している。径約9mmを測り、また径1mmほどの穿孔がなされている。

検出面出土の古墳時代の遺物　(図58)

(1)は古式土師器の壺形土器口縁部破片である。内外面とも強いヨコナデを行った後に、軽いヘラミガキを加えている。(1)～(3)は土師器の坏で(2)(3)はともに半球形の形態をとる。(2)は外面はヘラケズリ後比較的ていねいなヘラミガキが調整され、底部も丸底を呈する。内面は斜方向のヘラミガキ後黒色処理される。(3)の外面は磨耗のため不明であるが内面は(2)同様黒色処理されている。(4)は口縁部端部が短く外反する形態を呈する。口縁部外面は強い横ナデが行われ、坏部は不定方向のヘラケズリのみでヘラミガキは加えられない。内面は全体にていねいなヘラミガキが行われている。(5)は須恵器の無蓋高坏で、内外面とも雑なロクロナデが行われている。

(6)は円筒埴輪の底部破片で内外面ともに指頭による調整痕を顕著に残している。また底部には

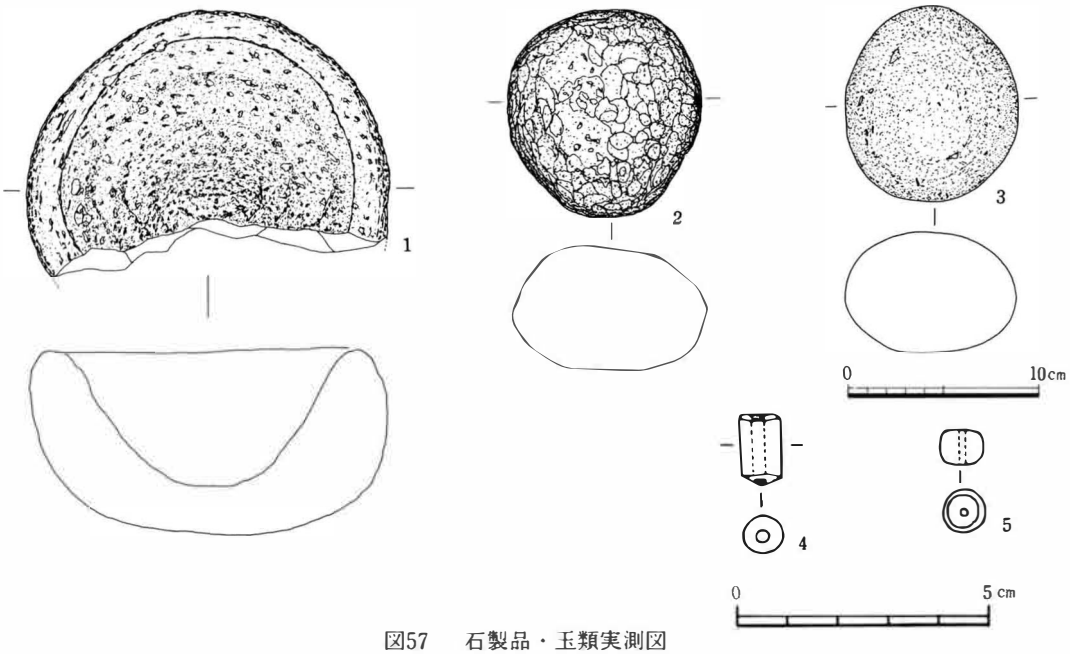


図57　石製品・玉類実測図

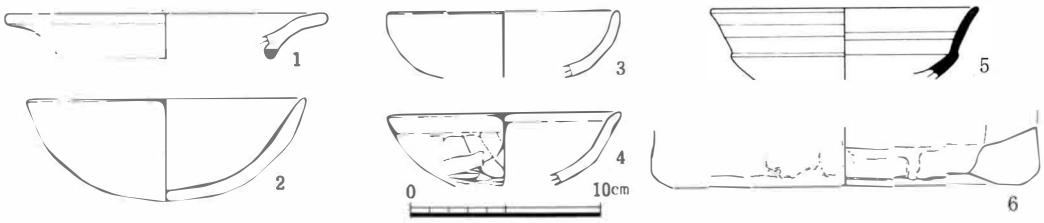


図58　検出面出土の古墳時代の遺物

切り離し時に用いたと思われる棒状工具の圧痕が認められる。

表14　検出面出土土器観察表（古墳時代）

番号	種別	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	遺存度	成形・調整	備考
1	土師	壺	17.2			1/6	内外面ともヨコナデ後軽いミガキ	
2	〃	坏	14.9		5.5	1/3	外面：ヨコナデ　ヘラケズリ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ→黒色処理	
3	〃	坏	12.1			1/6	外面：磨耗　内面：ヘラミガキ→黒色処理	
4	〃	坏	12.4			1/5	外面口縁部：ヨコナデ　坏部：ヘラケズリ 内面：ヘラミガキ	
5	須恵	高坏	14.1			1/10	ロクロナデ	
6		埴輪		20.5		1/6	ナデ	

第６節　奈良時代の遺構と遺物

該期の遺構で明確に判別できるものは、１号と５号住居址だけである。ただII区とIII区にみられた規格性・統一性のあるピットを建物址あるいはその一部分と想定し、古墳時代の住居址を掘り込んでいるためこれより新しい時期の所産と考えて本期の遺構とした。建物址と判断したのは３軒である。

１号住居址

遺構　(図59)

Ｉ区の北端に位置し、２号住居址と重複するが、これよりも新しい住居址である。形態は隅丸方形を呈するものと思われるが、規模等については、西側の半分以上が調査区域外にあるため不明である。掘り込みは北壁で23cm、東壁で17cmを測る。床面は平坦で軟弱なものになり、幾分東から西へ、北から南に傾斜する。柱穴・カマド等の施設は確認されなかった。尚、東北壁に柱穴様の遺構（ピット１）があるが、覆土等から本住居址とは関係ないものと思われる。

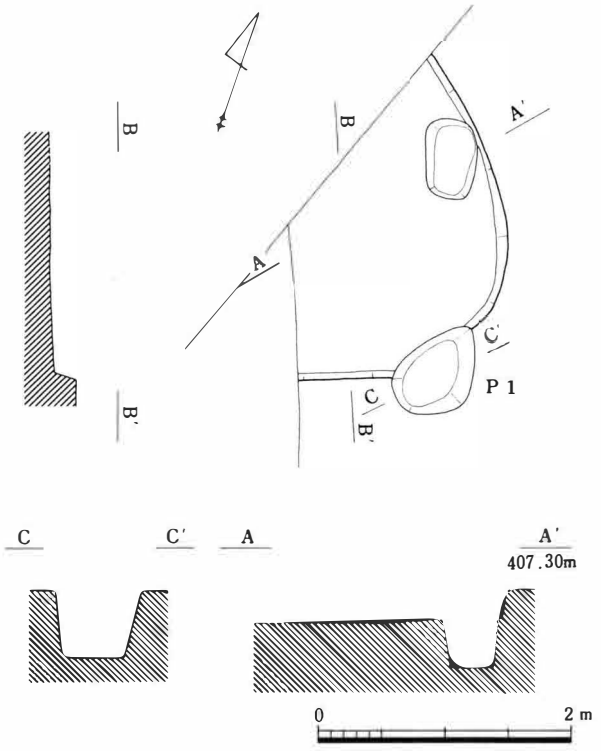


図59　１号住居址実測図

遺物　(図60)

須恵器坏・高台付坏、土師器坏形土器が出土している。(1)(2)は須恵器坏で、(1)の坏部は底部から直線的に外開し端部は丸みをもって終る形態を呈する。坏部は内外面ともにロクロナデされるが内面底部はその後雑なナデ整形がなされる。底部は左まわりの回転ヘラケズリがなされ、その後不定方向の雑なナデ調整が行われる。また底部には「×」状のヘラ記号が施されている。色調は灰白色を呈する。(2)も内外面ともロクロナデされるが底部には箆状工具による切り離し痕をとどめている。

(3)～(5)は須恵器高台付坏である。(3)の坏部は底部から比較的直に内湾ぎみに立ち上がり端部にて若干外反する形態をとり、また端部は丸みをもって終

る。高台は貼り付け高台で高台内側の接合部と端部付近には沈線が施されている。(4)(5)はともに貼る付けによる角方台をもつが(5)の底部には回転ヘラケズリが認められる。(6)は土師器の椀形土器で、底部から内湾ぎみに立ち上がった後口縁部で短く外反して終る形態を呈し厚手につくられている。口縁部外面は強いヨコナデがなされ、体部はヘラケズリ後雑なヘラミガキがなされる。口縁部と体部との境には明確な稜を残さない。

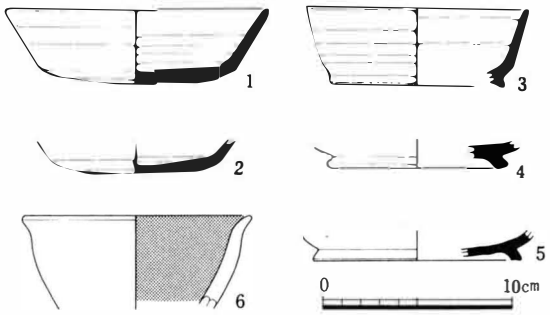


図60　1号住居址出土土器実測図

表15　1号住居址出土土器観察表

番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存度	成形・調整	備考
1	須恵	坏	14.2	8.2	3.9	1/3	ロクロナデ　底部：回転ヘラケズリ→ナデ	底部にヘラ記号有
2	〃	坏		5.1		1/8	ロクロナデ　底部：回転ヘラケズリ	
3	〃	台坏	11.8	9.3	4.1	1/8	ロクロナデ	
4	〃	台坏		9.6		1/10	ロクロナデ	
5	〃	台坏		11.0		1/8	ロクロナデ　底部：回転ヘラケズリ	
6	〃	椀	12.3			1/5	外面口縁部：強いヨコナデ　体部：ヘラケズリ→ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ→黒色処理	

5号住居址

遺構　(図61・62)

Ⅰ区北側住居址群のうち最も南に位置し、4号住居址の東側を切り込んで構築される。検出した部分は西側2分の1程で他は調査区域外にある。形態は隅丸方形を呈するものと思われる。東西間は4.45mを測るが主軸（南北）の規模は不明である。掘り込みは北壁22cm・南壁41cm・西壁35cmを測る。床面は貼り床され堅緻で平坦である。主柱穴2個確認され4本方形配列であろう。P1は径31cm・深さ50cmで、P2は径40cm・深さ35cmを測り、P2の柱痕は径22cmである。南西隅付近の掘り込みは長軸70cm・短軸50cm程の楕円形を呈し、深さ24cmになる。貯蔵穴であろう。

カマドは西壁中央に設けられ、粘土製両袖形のものである。焚口に長楕円形の自然石（袖石）が長軸を縦にして埋設されるが、左側の袖石は抜き去られ、ピット状にその痕跡を残している。火床は壁に向かって掘り込まれ床面より10cm深くなる。焚口部に厚さ5cm程の焼土が残存し、奥部には認められなかった。カマド主体部の規模は袖部45cm・焚口内法30cmを推定する。煙道は明瞭に残っており、西壁から直角に約1.5m突出している。残存部での幅22cm～15cmのトンネル式の

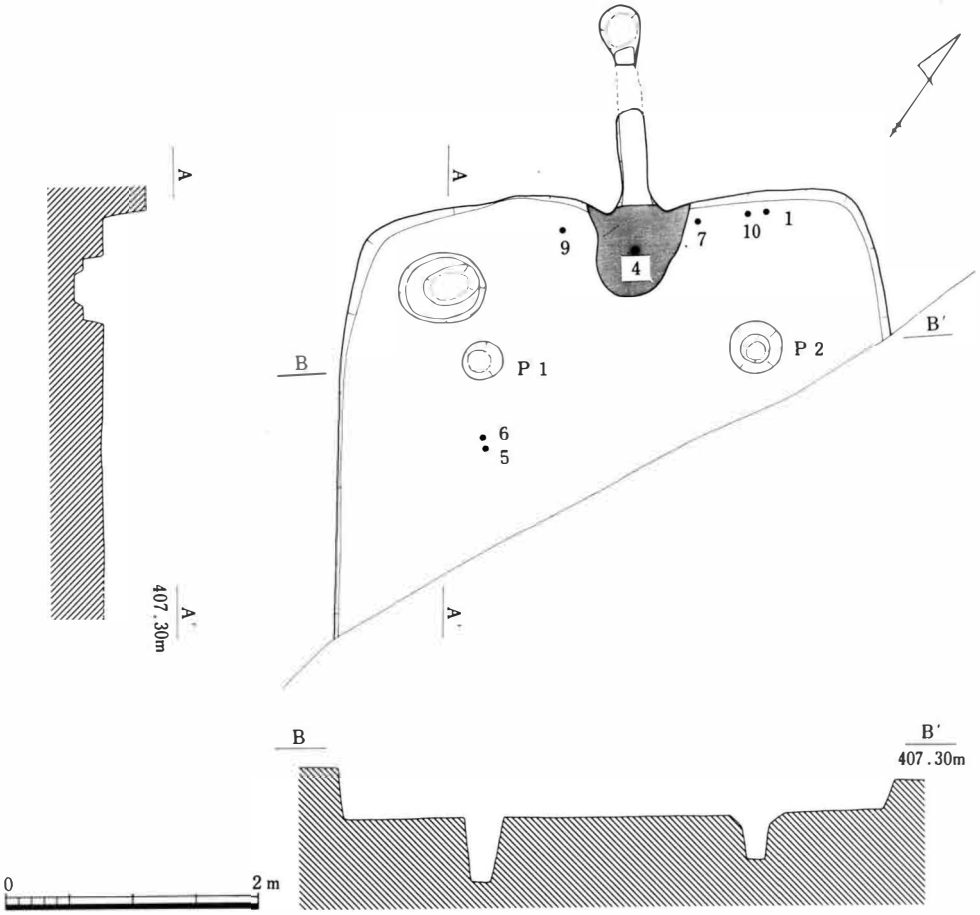


図61　5号住居址実測図

もので、先端は30cm程のピット状を呈して立ち上がる。覆土上部は焼土混りの崩落土で、下部は炭化物を多く含んでおり、このカマド内及び左右には坏・鉢・甕等の土器片が散在していた。またＰ１の南西に床面に接して甕２個体がつぶれた状態で出土した。

遺物　(図63)

坏・甕・鉢形土器などが出土している。(1)～(3)は土師器の坏で、(1)は坏部が底部から内湾ぎみに立ち上がり端部は丸く終る。坏部外面は横方向の細くていねいなヘラミガキがなされ、底部も不定方向のていねいなヘラミガキによって仕上げられや不安定な平底状を呈する。内面は斜方向を主としたヘラミガキがなされ黒色処理される。(2)(3)は口縁部破片で、ともに坏部上位で口縁部が立ち上がる形態を呈するが口縁部と体部との境には明確な稜を残さない。口縁部外面は横ナデされた後ヘラミガキされ、体部はヘラケズリ後ヘラミガキされる。内面もやや雑なヘラミガキが

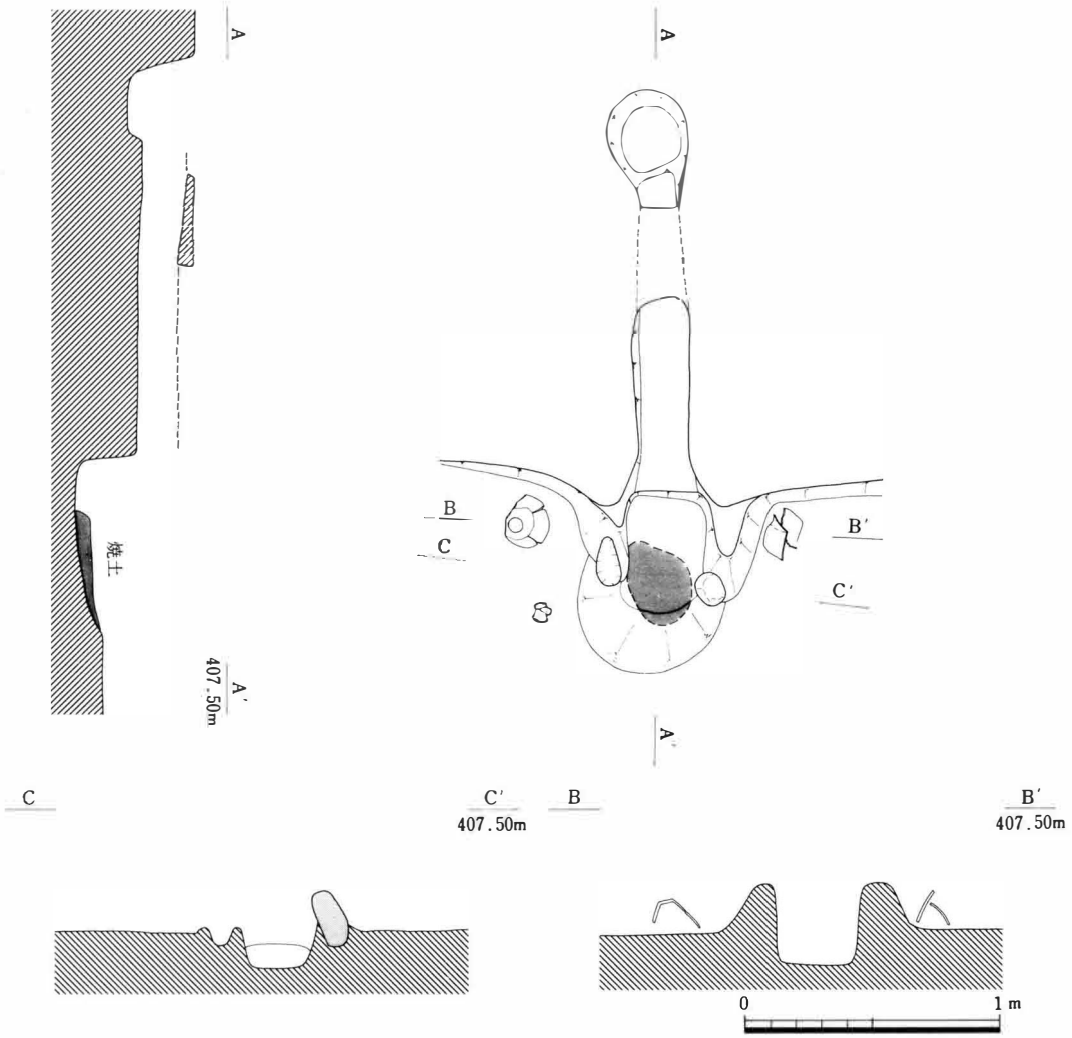


図62　5号住居址カマド実測図

なされる。(4)は須恵器高台付坏で、坏部は底部から直線的に外開し端部にて若干外反する。坏部は内外面ともロクロナデされ、底部は回転ヘラケズリされる。高台は貼り付けによる角高台である。

(5)～(9)(11)は土師器の甕である。(5)は口縁部が頸部で強いくの字状の屈曲をなして直線的に外反し、胴部は上半で強く張りこの部分に最大径をもつ。口縁部外面は横方向にハケ整形後ナデられ胴部は主として縦方向のハケ整形がなされる。また胴下半には縦方向のヘラケズリが認められる。内面は口縁部、胴部ともに横ハケ整形されナデられている。器壁は薄く仕上げられているが胎土には小石等を多量に含み、粗雑な感じのする土器である。

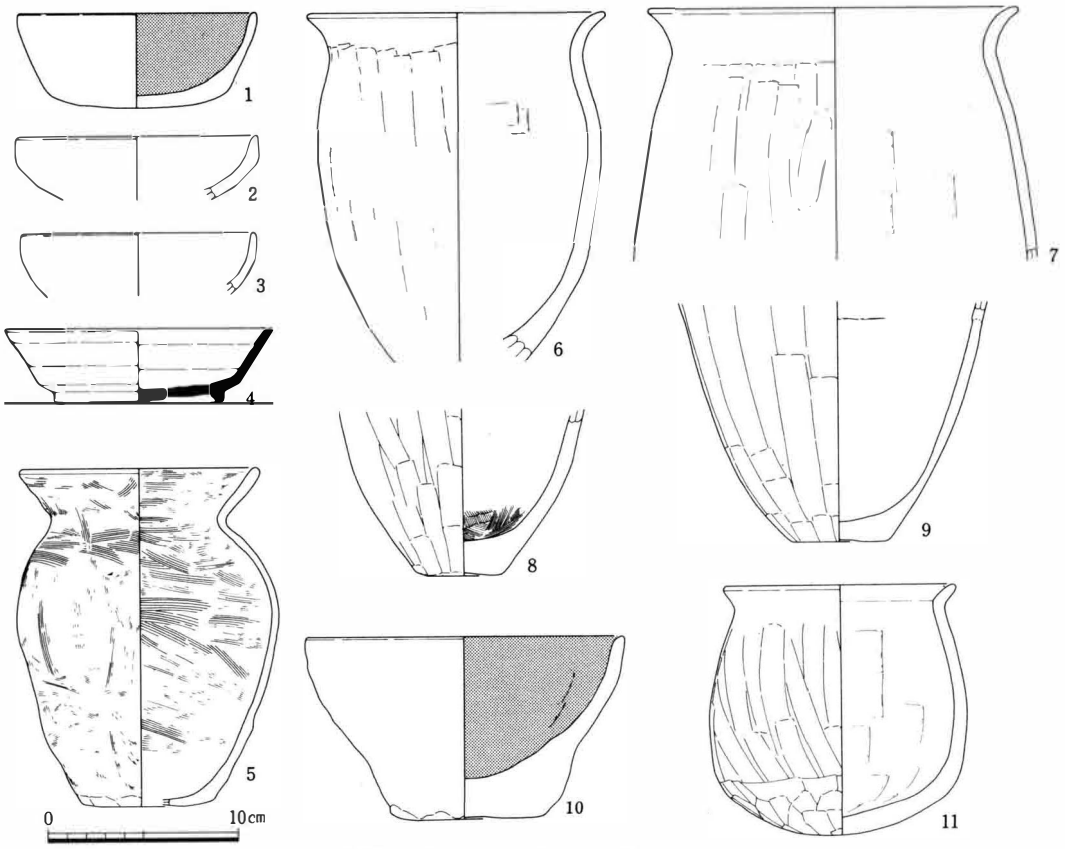


図63　5号住居址出土土器実測図

(6)～(9)は長胴甕である。(6)は底部を欠損するが、口縁部は頸部から比較的大きく外反し口縁部に最大径をもつ。胴部は上位から中位にかけてやや張りを持つ。口縁部は内外面とも強いヨコナデが行われ、胴部外面はその後縦方向のヘラケズリがなされさらに軽いヘラミガキが加えられる。内面は横方向のヘラによる平滑化がなされ、比較的ていねいにナデ整形される。(7)は口縁部が短く外反し最大径は胴部に有すると思われる。口縁部は内外面とも横ナデされ胴部外面は縦方向のヘラケズリ、内面はヘラによる平滑化後ナデ整形される。

(8)(9)はともに胴下半から底部にかけてであり、外面は縦方向のヘラケズリがなされる。(8)の内面底部付近はくもの巣状にハケ整形がなされ、(9)の内面は全体にていねいなヘラミガキがなされている。(11)は小型の甕で口縁部は短くくの字状に外反し、胴部は胴下半でやや強く張りこの部分に最大径をもつ。口縁部には横ナデ、胴部は主として斜方向のヘラケズリがなされ、底部は不定方向のヘラケズリによって丸く仕上げられている。内面は横ハケもしくはヘラによる平滑化後ナデ整形される。

(10)は土師器の鉢で体部は分厚い底部から内湾ぎみに立ち上がり、口縁部は端部が強くナデられて尖りぎみとなる。外面は口縁部は横、体部は縦方向の雑なナデ整形がなされ、底部もナデで仕

表16　5号住居址出土土器観察表

番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存度	成形・調整	備考
1	土師	坏	12.5	6.1	4.9	3/4	外面：ヨコヘラミガキ　底部：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ→黒色処理	床
2	〃	坏	12.6			1/5	外面口縁部：ヨコナデ→ヘラミガキ　体部：ヘラケズリ→ヘラミガキ　内面：ヘラミガキ	
3	〃	坏	12.4			1/5	外面口縁部：ヨコナデ→ヘラミガキ　体部：ヘラケズリ→ヘラミガキ　内面：ヘラミガキ	
4	須恵	台坏	14.1	8.6	3.9	1/5	体部：ロクロナデ　底部：回転ヘラケズリ	
5	土師	甕	12.6	6.7	18.1	4/5	外面口縁部：ハケ→ナデ　胴部：ハケ→ナデ 内面口縁部：ハケ→ナデ　胴部：ハケ→ナデ	床
6	〃	甕	15.8			4/5	外面口縁部：ヨコナデ　胴部：縦ヘラケズリ→ヘラミガキ？ 内面口縁部：ヨコナデ　胴部：ヘラ平滑化？→ナデ	床
7	〃	甕	19.7			1/5	外面口縁部：ヨコナデ　胴部：縦ヘラケズリ 内面口縁部：ヨコナデ　胴部：ヘラ平滑化→ナデ	床
8	〃	甕		4.7		1/4	外面：縦ヘラケズリ　内面：ハケ	
9	〃	甕		5.2		2/3	外面：縦ヘラケズリ　内面：ヘラミガキ	床
10	〃		16.8	8.2	9.7	1/5	外面口縁部：ヨコナデ　体部：ヘラケズリ後ナデ 内面：ナデ→雑なヘラミガキ→黒色処理	
11	〃	小型甕	12.3		13.4	2/5	外面口縁部：ヨコナデ　胴部：ヘラケズリ 内面：ハケ→ヘラによる平滑化→ナデ	

上げられる。内面はヘラによる平滑化がなされた後ナデられ黒色処理される。

1号建物址

遺構　(図64)

II区の中央付近から東側にかけて検出された柱穴群を抽出した。調査遺構名ではピット5～12にあたる。推定する規模は、東西2間・南北2間のもので、東西1間を1.65m、南北のそれを1.40m前後のものである。南北軸の方向はN—35°—Wになる。柱痕は確認できなかった。これらの柱穴は円形又は楕円形を呈するもので、その規模は以下のとおりである。P5（径63cm・深さ42cm）・P6（径55cm・深さ32cm）・P7（最大幅58cm・深さ36cm）・P8（径57cm・深さ59cm）・P9（径60cm・深さ47cm）・P10（最大幅52cm・深さ32cm）・P11（最大幅60cm・深さ46cm）・P12（最大幅70cm・深さ40cm）。尚、この建物址北西にピット13～15が点在し、規模・掘り込み等類似するので同様遺構の一部と考えられるが、調査地内からは明確にできなかった。

2号建物址

遺構　(図65)

III区中央の土壙状ピット群の中から抽出したもので、調査時の遺構名では、ピット16～19・26をあてる。形態は東西2間・南北2間が予想され、そのうち調査では北側の部分を検出したにすぎない。東西1間は1.7m、南北のそれは1.8mと推定する。南北軸の方向はN—26°—Wになる。

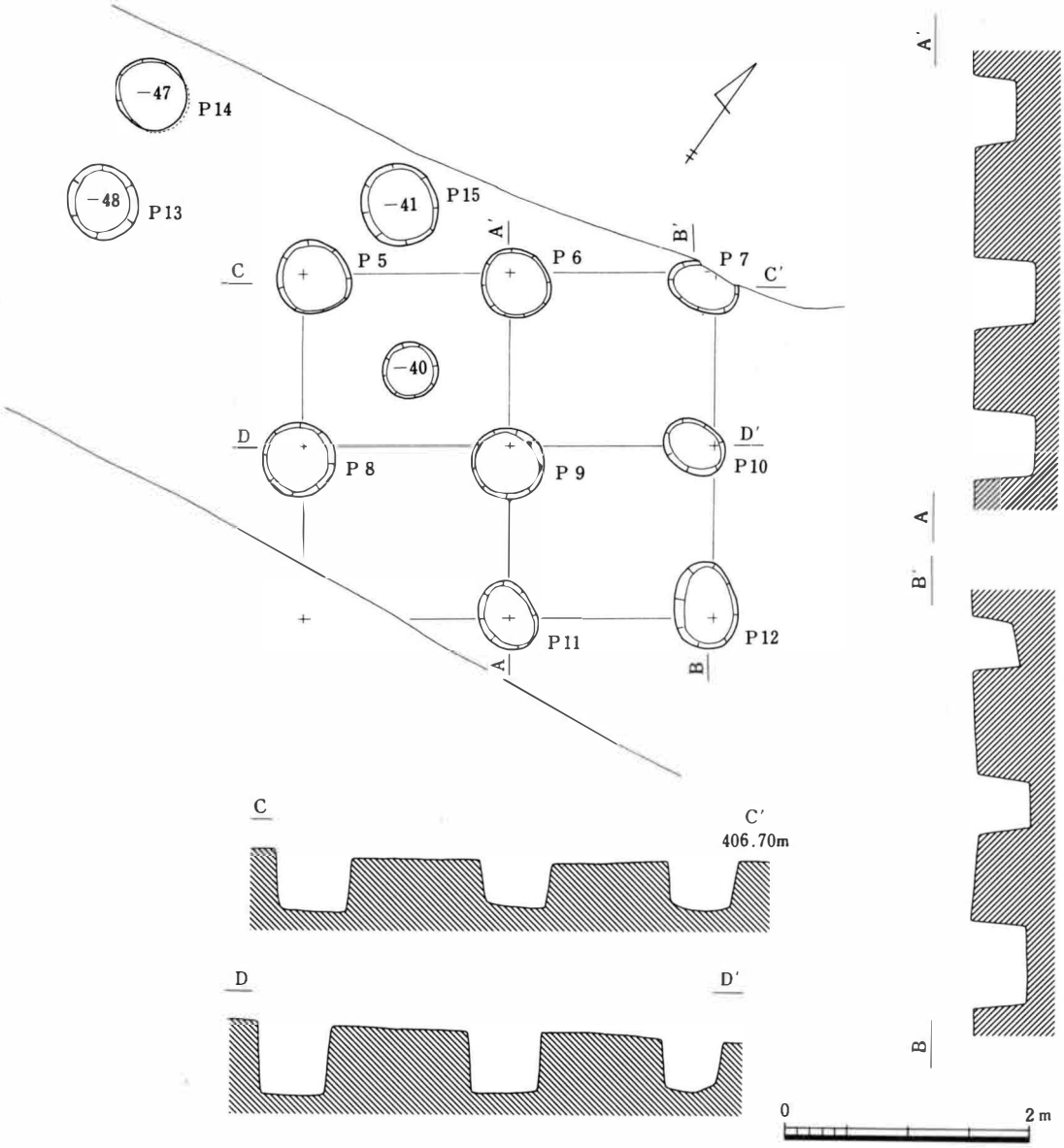


図64　1号建物址実測図

この遺構を構成するピットは他のものよりも大きく、円形を基調とするが不整形になるものが多い。規模等について以下のとおりである。ただし深さについて実測図では他の遺構との関連の数値を示しているが、本文では他のものと重複しないピット18の上面からの数値を記する。P18(最大幅105cm・深さ82cm)・P17（最大幅115cm・深さ110cm)・P16（径96cm・深さ66cm)・P19（径115cm・深さ93cm)・P26（径約120cm・深さ65cm)。

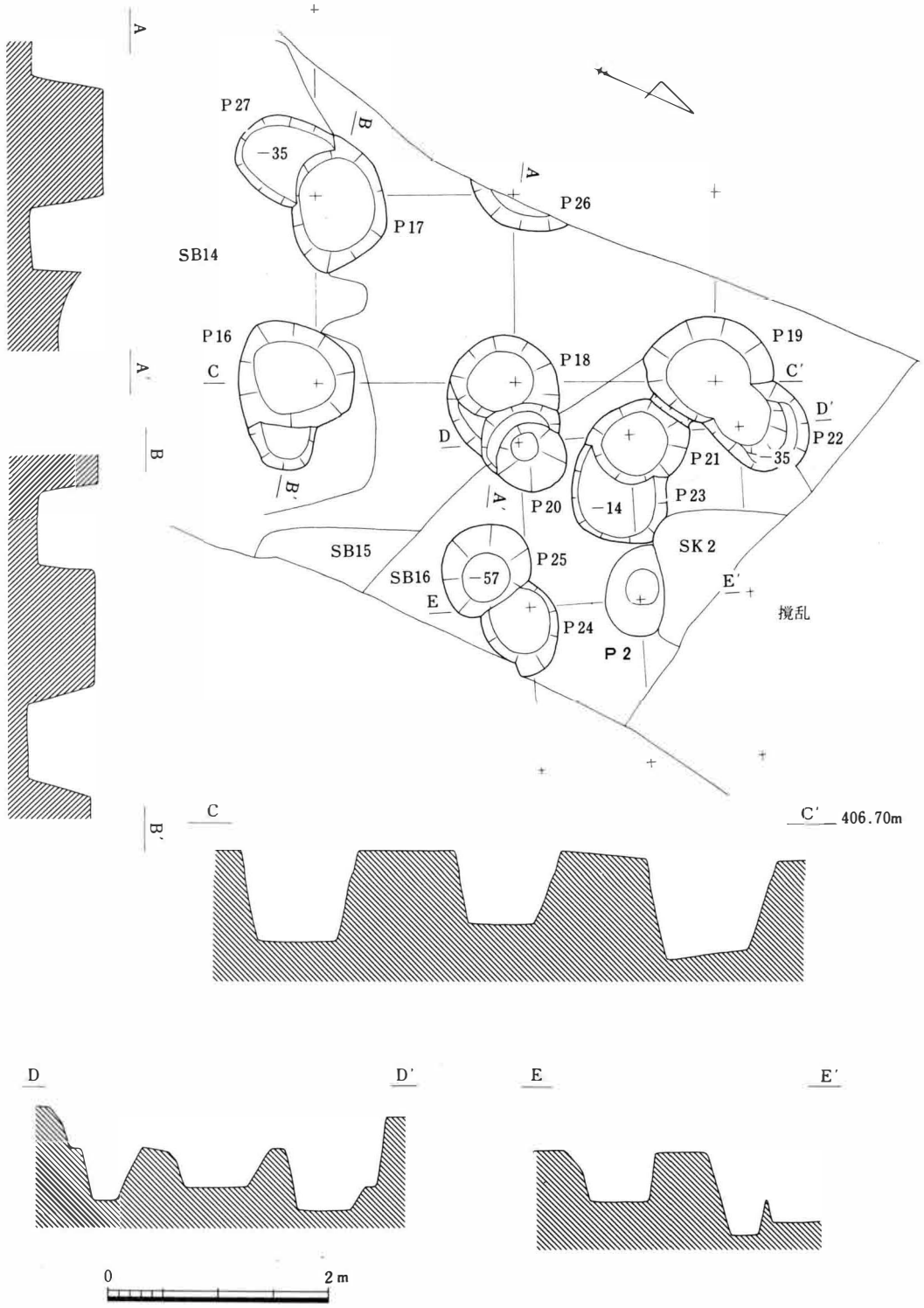


図65　2号・3号建物址実測図

3号建物址

遺構　(図65)

III区の中央、2号建物址の東に隣接する。しかしこれとの同時存在は、ピット18と20が重複していることから考えられず、本建物址の方が新しい。形態はやはり東西2間・南北2間の建物を予想する。規模は東西1間1.5m・南北1.0mを推定し、調査時の遺構名ではピット20～22・24と16号住居址の柱穴2の再利用が考えられる。南北軸の方向はN—30°—Wになる。構成するピットの規模は以下のとおりで、深さについては2号建物址の例と同じである。P20（径62cm・深さ85cm）・P21（径82cm・深さ89cm）・P22（径77cm・深さ92cm）・P24（径68cm・深さ74cm）・16号住居址P2（最大幅82cm・深さ116cm）。尚、このほかにP25（径85cm・深さ96cm）・P23（短軸85cm深さ59cm）とP22の上部（規模不明・深さ72cm）も等間隔に配置されているようであるが対辺的なピットが確認できなかった。

第７節　平安時代の遺構と遺物

今回の調査で確認された遺構は、４号土壙１基にすぎない。それもIII区北側の土層観察用試掘坑断面からのもので全容は不明である。また該期の遺物量も少なく、調査結果がそのまま平安時代の姿を示しているように思える。即ちこの地域には何らかの理由で集落が営まれなかったこと。多分浅川の影響であろう。

４号土壙

遺構　（図６）

III区の北端遺構である。大溝状の斜面に掘り込まれてるが、前記したとおり形態等は不明である。平面で確認できなかったのは、遺構の東端部付近を検出したためと思われる。南壁の掘り込み45cmになり、底面の南北間は1.7mを測る。また底面は二段あり、下部のその長さは約1.3mである。覆土は黒褐色シルト質粘土層である。

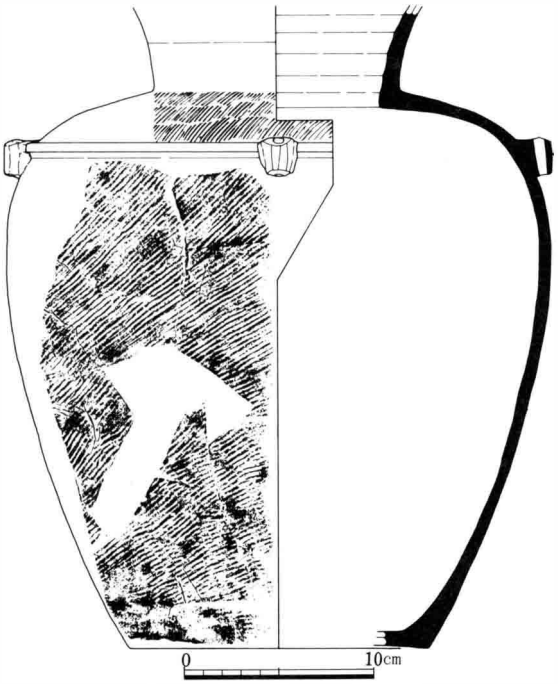


図66　４号土壙出土土器実測図

遺物　（図66）

突帯付四耳壺が１点出土している。口縁部を欠損し残存高は34.5cmを測る。肩部に一条の突帯がめぐり、耳は突帯上端から下方に貼りつけられている。広口長頸の口縁部と思われ肩部は丸みを帯びて張る。胴部は長胴平底をなしている。突帯は断面四角形を呈し、耳部も断面四角形で上方から下方へ径５㎜ほどの穿孔がなされている。口頸部は内外面ともロクロナデされ、胴部は全体に左下がりの平行タタキで成形されている。また胴下半は平行タタキ後ヨコナデが行われる。胴部内面は全体にていねいなナデ整形がなされている。

表17　４号土壙出土土器観察表

番号	種別	器種	法量（cm） 口径	底径	器高	遺存度	成形・調整	備考
1	須恵	四耳壺		15.9		1/4	外面口縁部：ロクロナデ　胴部：平行タタキ→下端にヨコナデ 内面口縁部：ロクロナデ　胴部：ナデ	

検出面出土の奈良時代以降の遺物 (図67)

(1)は土師器の小型坏で猪口状の形態をとり、口縁端部内面は面とりされる。器壁は非常に薄くつくられ精巧な感じがする。外面は全体にナデ整形され、内面はていねいな横ヘラミガキ後黒色処理される。

(2)は須恵器坏で口縁部はやや外反する。外面にはロクロ痕を顕著に残し底部は回転糸切りされる。(3)は高盤の脚であろうか。内外面とも雑なロクロナデがなされ、脚端部は嘴状を呈する。

(4)は土師器の小型甕で、口縁部は頸部から短くくの字状に外反し端部は強く横ナデされることにより嘴状に立ち上がる。

図67　検出面出土の奈良時代以後の遺物

表18　検出面出土土器観察表（奈良時代以後）

番号	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	遺存度	成形・調整	備考
1	土師	坏	6.9			½	外面：ナデ　内面：ヘラミガキ→黒色処理	
2	須恵	坏	12.6	5.8	3.8	⅓	ロクロナデ　底部：回転糸切り	
3	〃	脚		11.4		⅕	ロクロナデ	
4	土師	甕	11.9			⅙	〃	

第８節　時期不明の遺構

時期を決定する根拠資料がないものを一括して扱う。遺構名としては、ピット１～３と１号・２号土壙である。

ピット１

遺構（図68）

１号住居址の東壁上にあり、他に関連する遺構が周辺になく、単独で検出された。形態は卵形を呈し、長軸81cm・短軸58cm・深さ53cm程の規模になる。奈良時代の１号住居址を切り込んでいるのでこれよりも新しい。

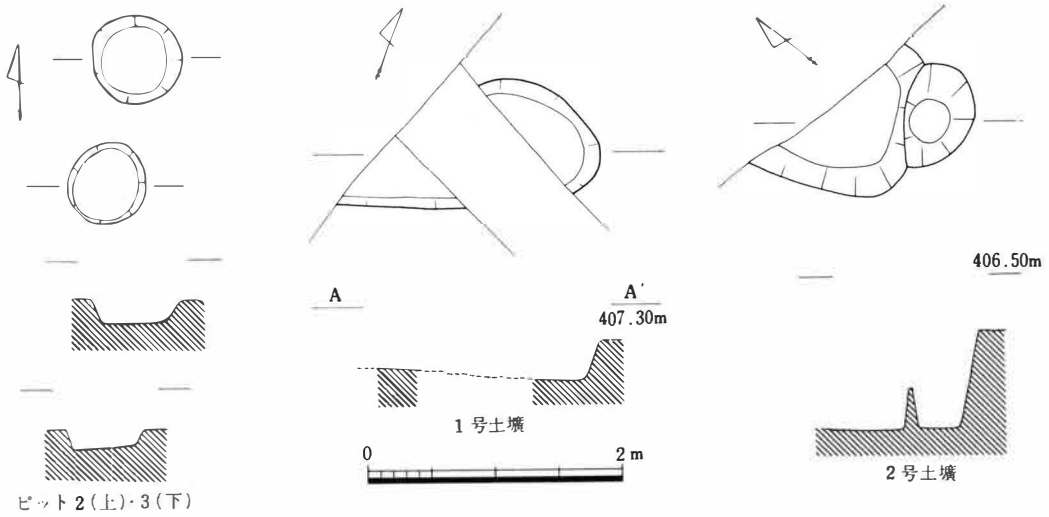


図68　ピット1・2　1号・2号土壙実測図

ピット2・3

遺構（図68）

Ⅰ区の2号住居址の東側にある。2個並んで検出されたが、他に関連するものがない。形態は2号建物址のピットに近似するが浅い。ピット2は円形を呈し、径70cm・深さ19cmの規模になる。ピット3も円形で、径67cm・深さ11cmを測る。

1号土壙

遺構（図68）

Ⅰ区の2号住居址と3号住居址の間にある。遺構の中央部は排水管により破壊され、南側は調査区域外へ延びるため全容は不明である。形態は不整楕円を呈するものと思われる。短軸の最大幅は1m前後を推定し、東壁での深さは32cmである。底面は軟弱で西から東へ傾斜する。

2号土壙

遺構（図68）

Ⅲ区北側の柱穴群内にある。北側は排水管埋設により破壊を受け、更に南壁は16号住居址の柱穴と重複する。ただこの重複の新旧関係は不明である。住居址よりも古いものであれば掘り込みの深さを床面より68cmと推定し、新しいものであれば107cmの掘り込みになる。形態は隅丸長方形を呈するものと思われる。

第4章　調査のまとめ

本遺跡からは前述のとおり、縄文時代～平安時代にわたる多数の遺構が検出された。以下各時代ごとにその概要を述べ調査のまとめとしたい。

〔縄文時代〕 住居址1軒、土壙1基を検出した。遺物はともに前期初頭の関山式期を中心とするが、3号土壙出土資料は早期末にまで遡る可能性を有し、尖底と平底の伴出等問題を有する資料と言えよう。善光寺平地域においてこの時期の資料は皆無に近く、管見によるかぎり長野市牟礼バイパスA地点遺跡において関山式期の破片が出土しているのみであるが、本遺跡においては復元し得るもので計6個体の資料が明確な遺構に伴って検出された点、今後の研究に大きな意義を有するものと言えよう。また遺跡の立地も扇状地扇央付近であり、この時期の遺跡立地の従来の認識に対し再考を促すものといえよう。

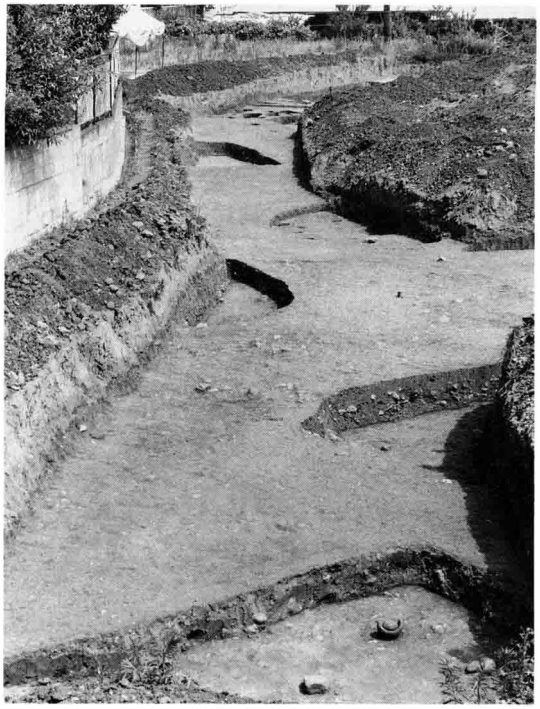
〔弥生時代〕 住居址4軒・溝址1・土器集中遺構1を検出したが、時期的には弥生時代中期―栗林式期（SB 4・SB 7・SB 9・SD 1・土器集中遺構）、弥生時代後期―箱清水式期（SB11）に大別され、中期が主体を占める。中期の住居址は比較的検出状況が良好な4号、7号住居址に見るように、径4.0～5.0m前後の円形プランをとり、炉は地床炉でほぼ住居址中央に設定されている。また後期の11号住居址は詳細は不明ながらも方形もしくは長方形プランが想定される。千曲川下流の北信地域における弥生時代住居の平面形態は、中期では円形プランが主流で炉も住居址中央部に設定され、後期では長方形プランへ移行し炉も壁際～柱穴間へ移行することが諸先学により指摘されているが、本遺跡においても同様の傾向が認められるものと言えよう。

次に本遺跡からは特殊なものとして土器集中遺構が検出されている。径約1mほどの範囲内に壺形土器を主体に土器片が集中して検出されたものであるが、明確な掘り込み等は確認し得なかった。土器の廃棄場・祭祀遺構等さまざまな可能性が推測されるが、本地域では現在のところに他に類例もなく、今後の検討課題としたい。各遺構の細かな時間的位置については詳述する余裕はないが、4号住居址、土器集中遺構はいわゆる栗林I式期、1号溝址は栗林II式期に位置づけることが可能かと思われる。

〔古墳時代〕住居址が11軒検出されているが年代的にはすべて古墳時代後期～末葉に比定し得るものである。比較的良好な資料を出土しているものには、2・3・14号住居址等があげられよう。14号住居址は各器種が比較的そろって出土しており、この時期の器種構成を検討する上で良好な資料となろう。同住居址出土の須恵器坏（図51 2）は形態の上から7C前半頃に比定されようか。住居址の切り合い関係からは3号住→2号住といった関係が確認されるが、土器様相の上からは大きな変化は認められない。また奈良時代の資料と比較しても土師器の様相、特に甕の形態などには長胴化傾向といった一系的な発展傾向は必ずしも認め得ず、当該期における複雑な様相の一

端がうかがわれる。12号住居址からは須恵器のフラスコ形長頸壺が出土した。長野市内では初めての出土である。東海地方において6世紀末～7世紀初頭に出現したものといわれるが、当該期における須恵器の生産、流通の問題を考える上で今後注目すべき資料となろう。

〔奈良時代・平安時代〕奈良時代の遺構としては住居址2軒ならびに建物址3軒が検出された。5号住居址から比較的良好な資料が出土しているが土師器の様相には前述のとおり大きな差異が認めがたい。建物址はそれに伴う明確な遺物を欠き、時期等の詳細は不明であるが、特に2号建物址などは比較的規模の大きな掘り込みを有する点注目される。平安時代の遺構は土壙が1基確認されたのみである。限定された調査範囲からは詳細は不明であるが、各時期ごとの生産構造の変革をふまえた遺跡立地の検討が必要とされよう。



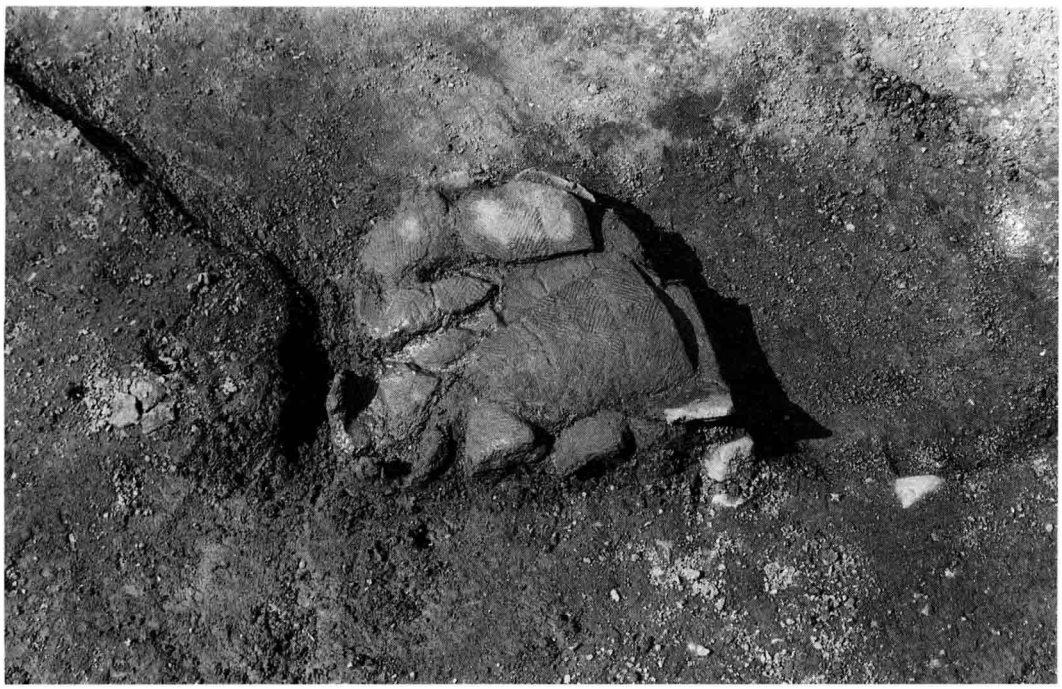
第 I 区全景

図版 2

第II区全景

第III区全景

18号住居址



18号住居址遺物出土状況

図版 4

3 号土壙・遺物出土状況

4 号住居址

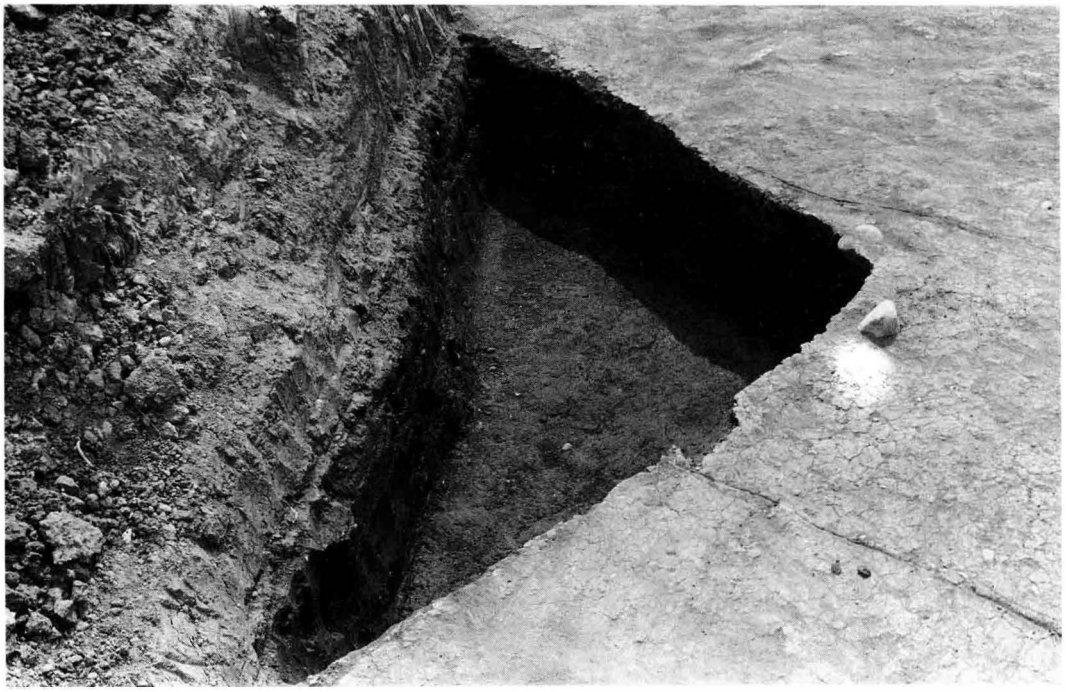
図版 5

7 号住居址

9 号住居址

図版 6

溝址 1



11号住居址

図版 7

土器集中遺構

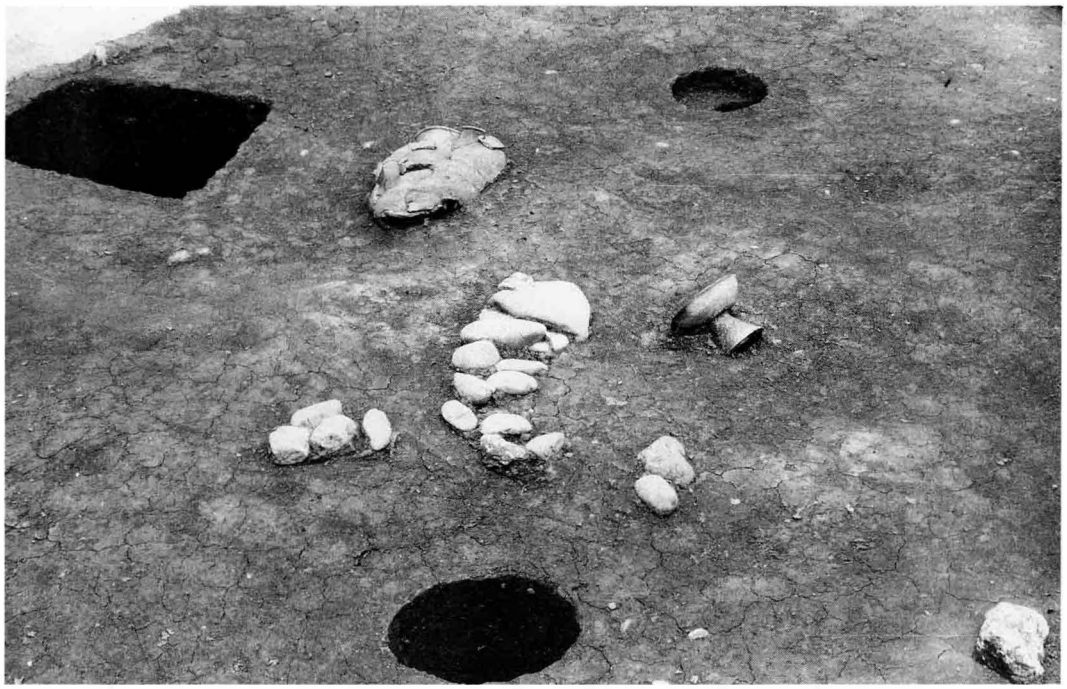
土器集中遺構

図版 8

2 号住居址

2 号・3 号住居址

3 号住居址



3 号住居址遺物出土状況

図版10

6号住居址

8号住居址